

図221 硯・石製品

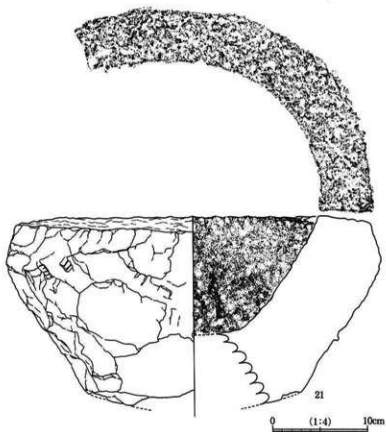


図222 石白(石鉢) 1

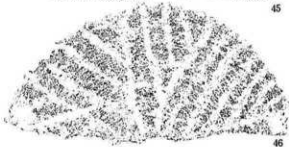
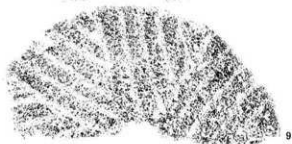
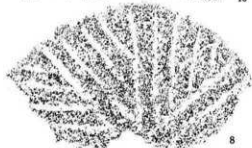
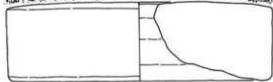
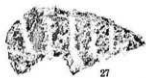
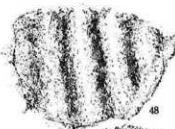
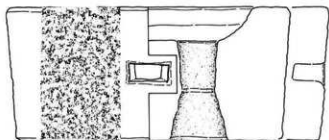


图223 石白2

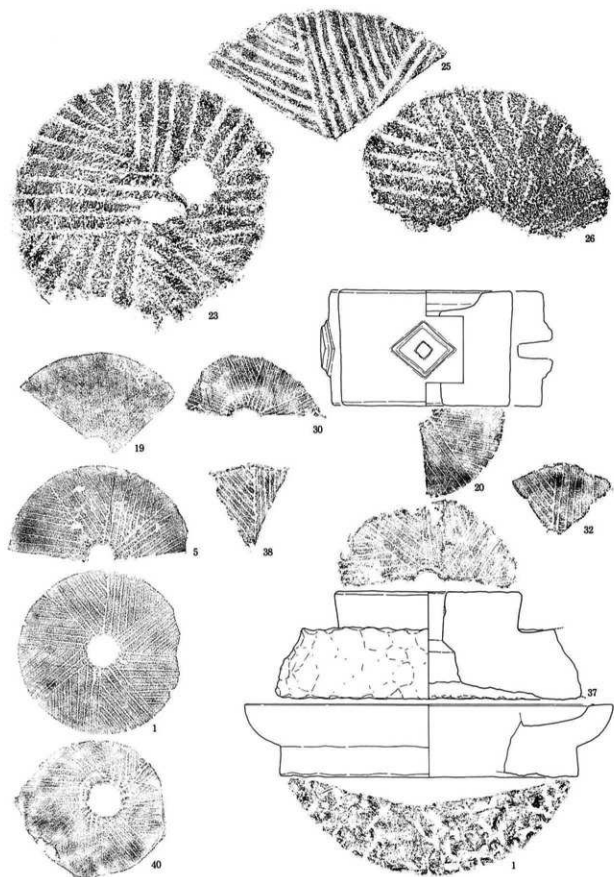


図224 石白 3



图225 石塔 (石仏)

g、銭貨

該期に比定される出土状況の銭貨は20種類以上の84枚以上である。内訳は多い順で、皇宋通寶9枚、元豊通寶7枚、開元通寶・熙寧元寶・祥符元寶・元祐通寶・洪武通寶5枚、政和通寶4枚、景德元寶3枚、聖宋元寶・天禧通寶・嘉祐元寶・治平元寶・天聖元寶・聖宋通寶2枚、景祐元寶・宣和通寶・紹聖元寶・慶長通寶・唐國通寶1枚、およびその他不明である。なお寛永通寶とも読める銭貨が3枚入っているが、これは土留め工事の際などによる混入品である。

h、石製品

硯・砥石・石塔・石臼・茶臼・石仏および包含層からの混入品である古代の石器がみられる。なお石仏と石塔は現位置を遊離したものであり、石臼類についても礎石などに再利用されたものも含まれているために、ここで出土状況での時期区分にこだわらず、掲載している。なお石材については観察表を参照されたい。

硯は一般的な方形以外に、円形(1)、内部に仕切をもった小型の製品(35)がみられる。いずれも使用痕が認められるが、とくに40はそれが著しく舟底状のくぼみをみせる。ただしこの痕跡が硯の使用に伴うものか、砥石に転用された結果生じたものかの整理は今後の課題として残る。

石製品8は周辺の使用痕は不明であるが、表面に打撃痕と思われる痕跡は散在する。古代包含層からの混入であろう。

臼類は石臼と茶臼がみられる。1・5・19・20・30・32・37・38・40が茶臼であり、それ以外が石臼である。臼目は、石臼では5本単位が最も多く、7・10本がみられ、茶臼では8~12本がみられる。石

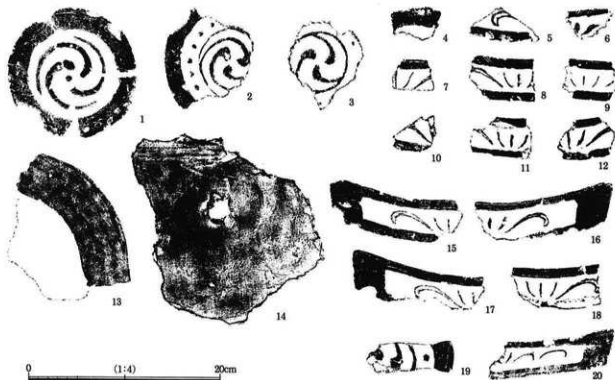


図226 瓦1



图227 瓦 2



図228 瓦3

白4と48を除き、基本的に8分割で全て右が左を切る関係での施条である。なお23は5または6分割で施条も乱れている。

i、瓦

図226は大坂夏の陣が終結して後、徳川氏による大坂城が築造されるまでの間に営まれた耕作地とそれに伴う遺構から出土した瓦であり、図227～241は三の丸築造以後で大坂夏の陣により破却された施設に伴っていたと考えられる瓦である。金箔の有無を含めた全ての掲載瓦のデータについては観察表を参



図229 瓦4



图230 瓦5

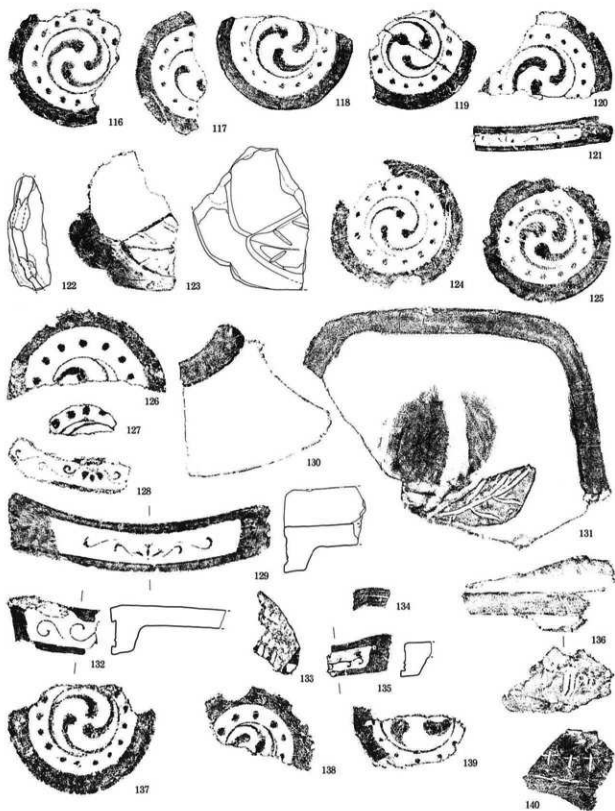


图231 瓦 6



図232 瓦7

考されたい。以下は図227以降の瓦について補足説明をおこなう。

1・269～272は家文瓦である。1・269～271は扇に月丸文、272は桔梗文である。269は直径15.1cm、厚さ2.0cm、文様面から外縁への高さは0.5～0.6mmである。瓦当裏面の丸瓦との接合部には円弧状のキザミをつける。

2は軒丸瓦であり、瓦当面に「寶」を配する。なお右端の凸は外縁ではないため、他にも装飾の加わる可能性がある。

5・205は均整唐草文軒平瓦である。5の中心飾りは三葉と考えられ、中心の一葉には葉脈がみられ

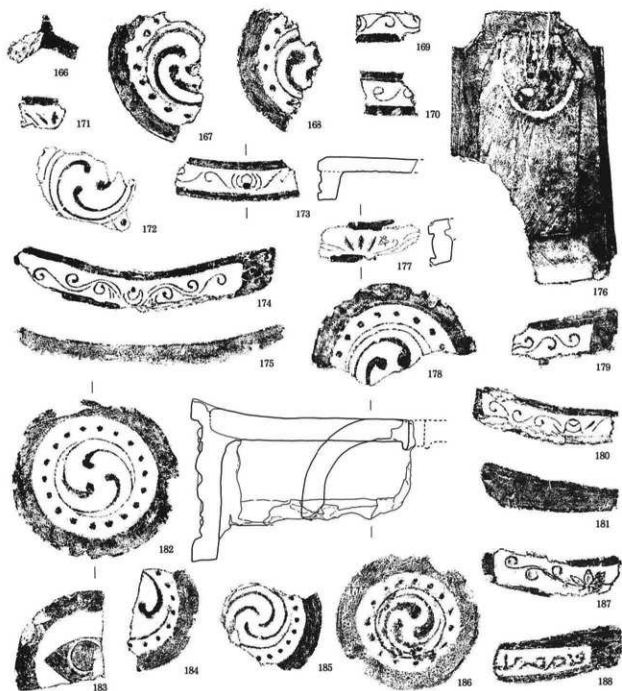


図233 瓦 8

る。浅い段顎である。205の中心飾りは5弁花で浅い段顎である。

7・280には連珠、巴文等に下地の漆が見られる。

13・14は軒先飾瓦であり13は篁描きで沈線を施した立体的な珠を種子状に配し、その一端の中央に沈線の入った装飾が付く。なお向かって左裏面に柵が付く。14は向かって右側に柵が付くが、上側ではそれが低くおさまる。文様は一部が馬目状に残り、それに続く剝離痕がその上下に残る。なお表面の柵に対応する位置で裏面にも柵が付く。

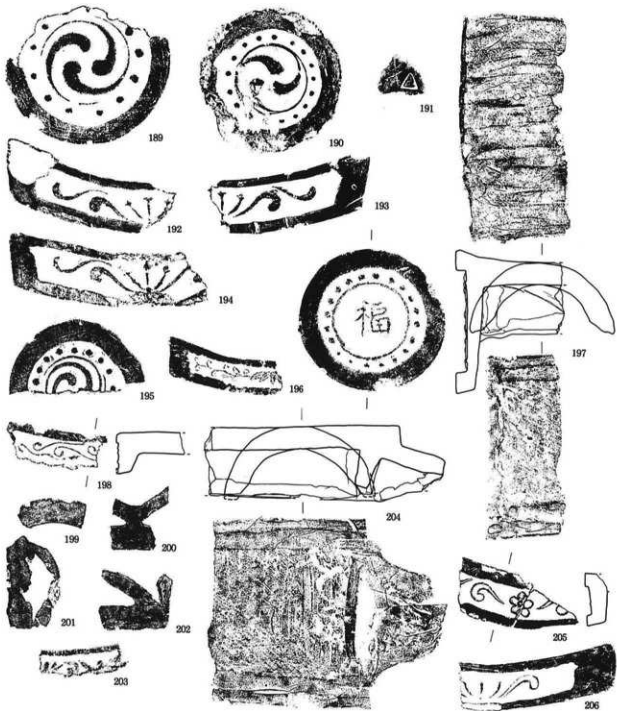


図234 瓦9

29は丸瓦凹面である。玉縁側に縄目をもち、全面に長軸方向と直交して平行する切り離し痕跡をもつ。

39は小破片であるが、231と同施の可能性がある。

40・264・267は二重の菊文襷込瓦である。264は直径11.1cm、厚みはいずれも1.5cm前後である。花卉は264が16弁、花卉の間隔には個体間で粗密がある。

45は下地の赤色漆が、94と231には下地の黒色漆が残る。

45は端部に文様の一部が残るが、中心飾りか51のような唐草文の一部であるかはわからない。

51は中心飾りを欠き2回反転する唐草文である。外縁上部に面取りがある。

56は数珠掛鬼板瓦である。

59・60・64・65は花狭間の一部を構成する。

61は鯉などの魚を意匠した飾り瓦の尾部分と考えられる。

66は飾り瓦の葉部分である。本体より独立した部位で立体的な表現を示す。中心軸の葉脈は太い凸線がつくりだされ、枝の葉脈部分は寛描き沈線である。

77は丸瓦凹面である。右上から左下へむかって粗い切り離し痕跡が弧状にみえる。

88は赤色漆を接着材にした金箔押しの飾り瓦の一部であり、上面に直径1.5cmほどの円形の平坦面をもつ。本体より独立した立体的な意匠である。

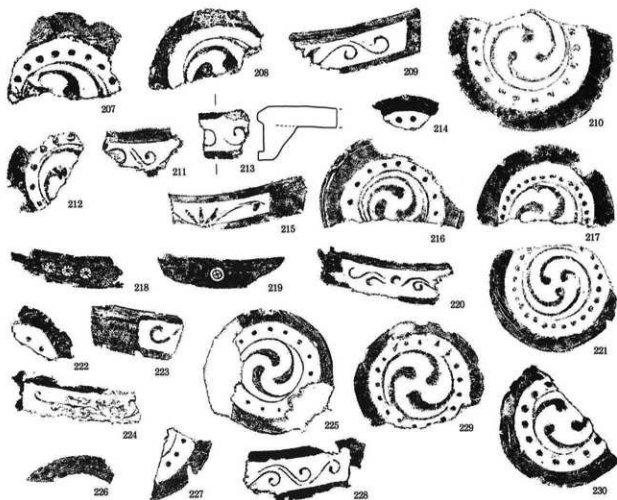


図235 瓦10

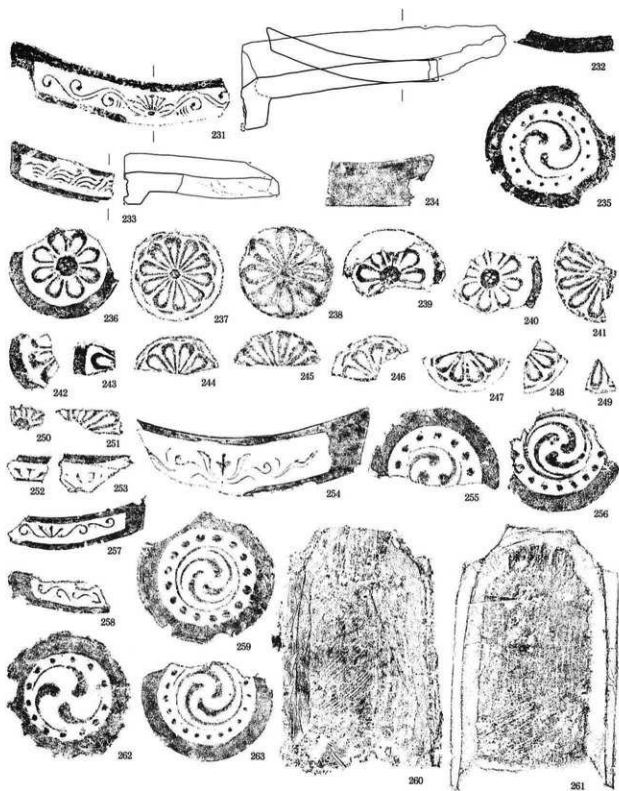


图236 瓦11

94は唐草文が内区いっばいに反転する。外縁上部にかかる面取りがなされる。

97・312は鬼瓦である。周縁に円形スタンプ文と二重沈線を施し、97の中央文様は剝離している。また97の沈線は斜めに切り込み、断面三角形である。

98は唐草文軒平瓦である。中心飾りは、中央に蕾状の飾りとその左右に葉を配したもので、右側の葉の葉脈は凸線で、左側の葉の葉脈は凹凸で表現している。立体感のある意匠である。

103は瓦当面の半分を欠損するが、中心飾りは3弁の花文になろう。唐草の巻き込み部分が太くなり、外側の唐草は上から下に向かい大きく広がる。外縁上部の一部に面取りと工具のアタリ痕がある。

105は平縁の瓦当面の中心に刺突による蓮子を設け、その周囲に3葉の花弁と剣を配する。剣酢漿文である。花弁は瓦当面より大きく広がる。瓦当面で文様を欠く部分には剝離痕が認められる。瓦当裏面の接合痕は上部は広い幅、下部は狭い幅で全周をめくり、そこからのびる部分は、やや反った形が復原できる。鳥衾の可能性はある。

106は違い釘抜き文の飾り瓦、107は桐文飾り瓦である。共に釘孔をもつ。

115は波状文軒平瓦である。波状文は断面がシャープな三角形を呈する。瓦当上端部に布目がみられる。

122は一部に金箔が見られ、赤漆はかなり剝離している。

123は葉の文様を有する。飾瓦の一部であろう。

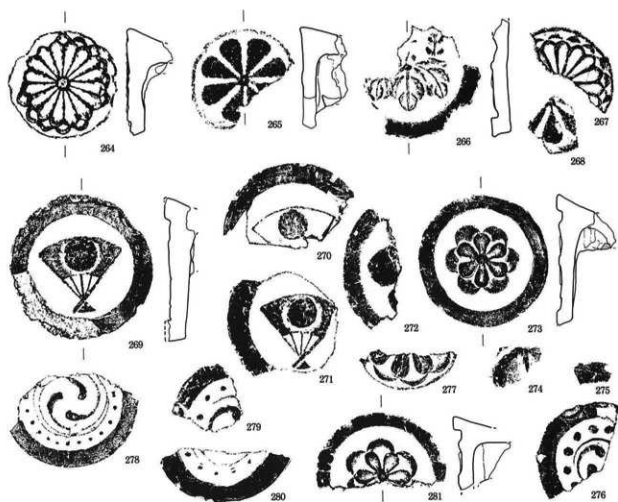


图237 瓦(包含層) 12

- 130・131は軒先飾り瓦であり、周縁に枠をもつ。131は桃の意匠である。
 133は軒丸瓦の瓦当面であり大半が欠損している。134は軒丸瓦の周縁である。
 136は飾り瓦の一部であり、1条の凸線がつけられ、裏面に篋描きの平行線がみえる。
 140は平瓦であり、凸面に篋描きで連続する十字が描かれている。
 146は丸瓦である。凹面に斜位で粗い切り離し痕跡がみえる。凹面端部は幅1cmほどの面取りが施され、凸面には長軸方向のケズリがおこなわれている。胎土は砂粒を多く含み粗い。
 147は軒先飾り瓦であり、桃が意匠されている。
 155・159は家紋瓦であり、それぞれ桔梗と違い鷹羽をえがく。また163は軒丸瓦であるが、幅の狭い尾の巴文であり、連珠をもたないことから家文である可能性が考えられる。
 157・166は花狭間の一部である。
 152・177は唐草文軒平瓦である。共に細身で3葉の中心飾りをもち、その右に星印を配する。
 164は軒先飾り瓦である。右下と右上に弧状の面をもつ。表面には緩やかな凸線が二方向にのび、さらにその交差部は剝離している。また2方向の凸線に挟まれた部分には篋描きによる平行沈線がみえる。
 176は丸瓦であり、斜位で粗い切り離し痕が彎曲することなくみられ、玉縁近くに吊り紐痕も残る。

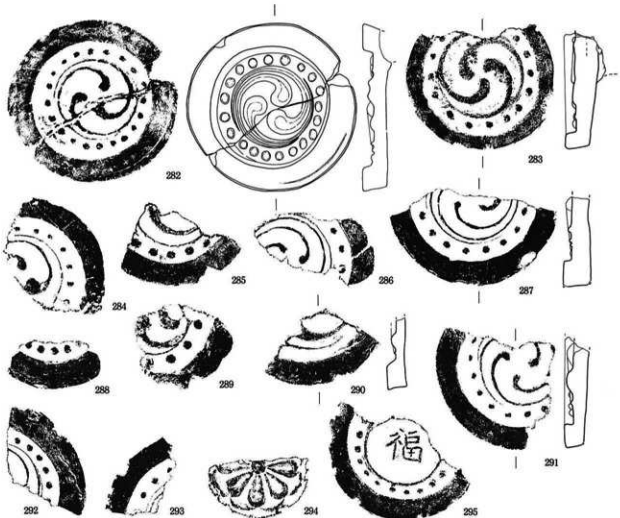


図238 瓦(包含層)13

187は唐草文軒平瓦である。中心飾りは立体感のある凸線で3葉の花弁とその下に莖と茎が描かれる。

183は扇に月丸文軒丸瓦である。

191は丸瓦であり、凸面に篋描で三角形を描く。

199～202は花狭間の一部である。203は唐草文軒平瓦であり、磨滅により判然としなが、左端に3葉からなる中心飾りの中央と右葉がみられ、その右に3転する唐草がつづく。

204は丸瓦である。凹面の玉縁近くに仕切をもうけ、凹面には粗い斜位の切り離し痕とそのナデ消しが見える。

208は軒丸瓦であり、瓦当に連珠のない巴文が見える。尾と頭とは共に太く、その先は圈線状につながる。

218・219は平瓦の端面に押された菊花文および丸に十字文である。共に壁は厚く焼成も堅緻である。

220は唐草文が連続して4回反転する。

223は唐草文軒平瓦の左端部である。側縁幅は5.3cmある。幅0.6cmの帯状の金箔が貼られている。

また223・297は用いた金箔の原形がうかがえる資料で、原形は一片4～4.5cmの方形あるいは長方形が想定される。

224は唐草文軒平瓦であるが、瓦当面の剝離が著しく、両側から藤手状に挟まれた中心飾りの中央の意匠はほとんどわからない。

226は軒丸瓦の外縁である。

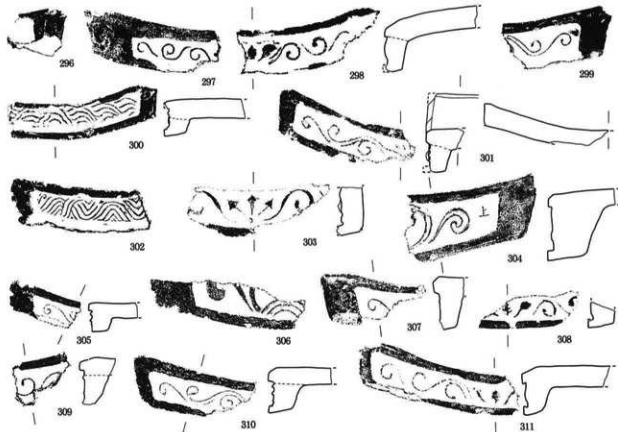


図239 瓦(包含層) 14

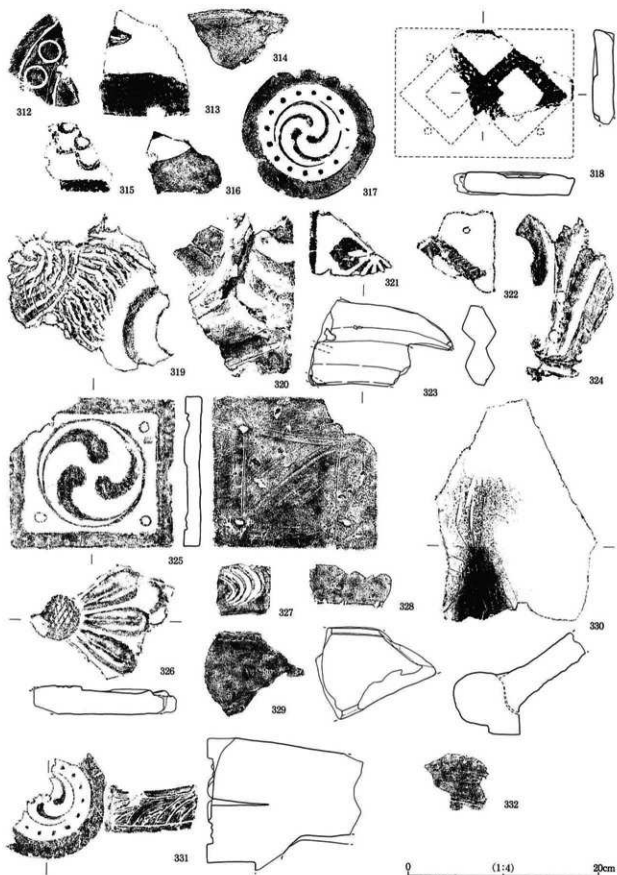


図240 瓦(包含層) 15

231の中心飾りは綾をもつ3弁間に凸線状の2弁が配された7弁の花文で、最下部の凸線は窠であろうか。両脇の唐草文の下には3~4本の縦の弧線がみられる。外縁上部には面取りがある。

232は軒平瓦の上縁である。234は飾り瓦の枠と思われる。

236~251は菊文棟込瓦であろう。幅が広く長さの短い単弁8葉、と花卉幅が細身で、弁間に下の弁頭を配する、上面10葉、背面10葉の2種類がみられる。

253は唐草文軒平瓦の中心かざりの一部である。葉は長三角形を呈するがほとんど磨滅している。

266は外縁と桐文に金箔が残る。中央桐花が不明瞭であるが五七桐文であろう。桐の葉の葉脈は突線



図241 瓦(包含層) 16

の中央をくぼめている。

265と268は金箔押菊文棟込瓦である。2点とも金箔は瓦当全面に施され、下地の朱漆が残る。265は8弁で一部花卉が2重である。268は4弁が残り、二重の花卉であろう。

272は厚さ2.2cm、文様面から外縁への高さは0.8~0.9mmである。瓦当面は乳白色、外面は紫赤褐色を呈し二次的に火を受けた可能性がある。花卉の中央はくぼむ。

274は桐文飾り瓦の一部である。275は軒丸瓦の外縁である。

281は6葉+6葉の二重菊で、直立縁である。

282は巴文軒丸瓦であり、瓦当全面に、瓦当の凸面およびくぼんでいる部分まで黒色~黒褐色の漆が塗られ、一部に金箔が残されてる。ただし金箔もくぼみ部分まで押されていたかどうかは不明である。

297は欠損のため中心飾りは花文の一部を残すのみである。唐草文は3回反転する。側縁幅は4.7cmある。

298は中心飾りは3弁の花文で、縁取り状に細い凸線がめぐる。

303は剣菱状の三葉を中心飾りにもつ唐草文である。

304は唐草文の中央部が凹んだ部分にも金箔が施されている。また瓦当面凹部右上に「上」の文字があり、同様のものが伏見城跡からも出土している。

305は外側縁の上下部に赤漆が塗られ、瓦当面凹部に一ヵ所僅かに金箔が残る。

313は文様面にえぐりが入り、外縁部が収束するような形態がうかがわれるが、使用箇所は不明である。また中央にキザミのはいる三角形が残るが、文様は不明である。

314は軒先飾り瓦であり、表面の一部に金箔が残る。上面は弧を描き、その先は凹線または段である。

315は菊文方形飾り瓦であり、二重の菊文で釘穴が1箇所残る。

金箔押飾り瓦で318は復元長13×19cm、厚さ1.8cmの方形違釘抜文である。金箔は文様凸部のみ残存する。

316は鬼瓦の上部右隅部と考えられる。金箔は凹部にみとめられる。

317は瓦当より2方向の延長箇所がみとめられるもので、使用箇所の特定には至らなかった。瓦当直径が14.2cmの左巻三ツ巴文である。金箔は文様の凹部に主に残り、凸部には部分的にみとめられることから、文様部分全面に施された可能性がある。下地に塗られた朱漆が残る。外縁には金箔は施されない。巴文頭部はわずかにくびれ、尾部は比較的長くのびている。珠文は直径0.6cmであり、15個を数える。

319は鬼瓦の目および髪部分と思われる。323・324は鯛などの尾。327は164と類似する飾り瓦の一部であろう。328は磚、329は薄い板状であるが、表面の一部にT状の金箔が押される。

331は獅子口であり、経の巻の部分で、未貫通の孔がある。

334は立体的な鬼瓦の鼻の部分である。

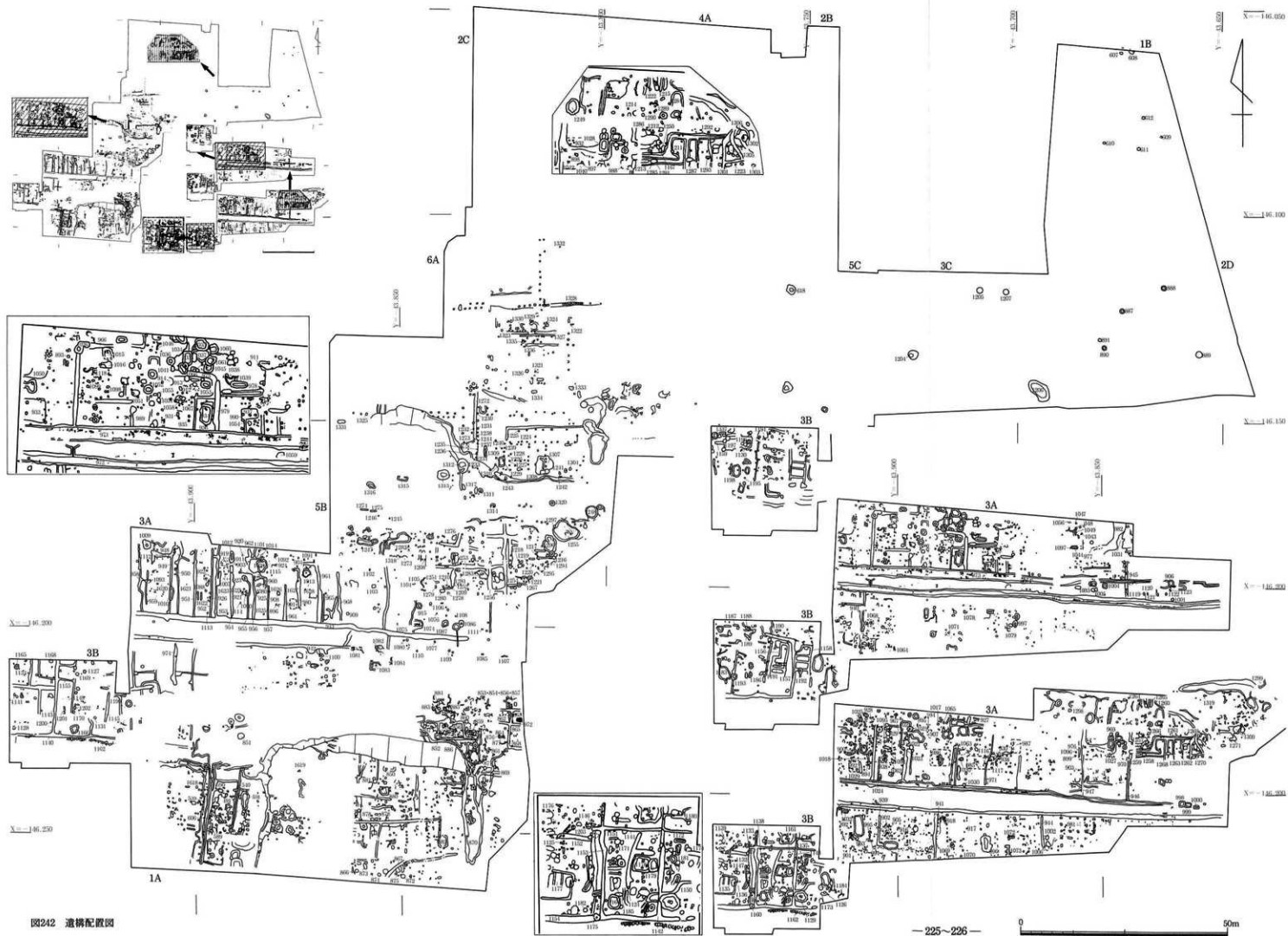


图242 遺構配置図

(4) 豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前

表9 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)1

番号	遺構名	時期	X座標	Y座標	深さ	915	3A井戸28	前期	-146195	-43846
850	IAビッド144	前期	-146234	-43854	0.35	916	3A屋敷01	前期	-146210	-43900
851	IA井戸03(17トレ)	前期	-146223	-43890		917	3A屋敷02	前期	-146210	-43878
852	IA井戸13	前期	-146226	-43842		1620	3A屋敷03	前期	-146190	-439090
853	IA屋敷01	前期	-146218	-43894		1621	3A屋敷04	前期	-146190	-439015
854	IA屋敷01(溝41)	前期	-146223	-43825	0.22	1622	3A屋敷05	前期	-146190	-438980
855	IA屋敷01(溝42・45)	前期	-146218	-43824		1623	3A屋敷06	前期	-146190	-438930
856	IA屋敷01(土坑243・244)	前期	-146218	-43824		1624	3A屋敷07	前期	-146191	-438890
857	IA屋敷04	前期	-146225	-43844		1625	3A屋敷08	前期	-146193	-438840
858	IA屋敷05	前期	-146223	-43835		1626	3A屋敷09	前期	-146194	-438800
859	IA屋敷06	前期	-146225	-43834		1627	3A屋敷10	前期	-146192	-438765
860	IA屋敷07	前期	-146223	-43835		1628	3A屋敷11	前期	-146192	-438725
861	IA屋敷08	前期	-146229	-43833		918	3A瓦敷中部	前期	-146206	-43889
862	IA屋敷09	前期	-146222	-43826		919	3A瓦敷01	前期	-146184	-43893
863	IA屋敷10	前期	-146221	-43832		920	3A瓦敷02	前期	-146183	-43888
864	IA屋敷11	前期	-146222	-43826		921	3A瓦敷03	前期	-146192	-43888
865	IA屋敷12(土坑242)	前期	-146225	-43823		922	3A瓦敷04	前期	-146188	-43897
866	IA溝24	前期	-146258	-43863	0.14	923	3A瓦敷05	前期	-146188	-43888
867	IA溝28	前期	-146255	-43863	0.34	924	3A瓦敷06	前期	-146185	-43881
908	IA溝44	前期	-146227	-43825	0.13	925	3A瓦敷07	前期	-146192	-43885
869	IA溝78	前期	-146235	-43828	0.12	926	3A瓦敷08	前期	-146193	-43896
870	IA溝80(土坑246)	前期	-146248	-43833	1.26	927	3A瓦敷09	前期	-146182	-43881
1618	IA欄列5	前期	-146243	-43902		928	3A瓦敷10	前期	-146188	-43905
1619	IA欄列6	前期	-146234	-438765		929	3A瓦敷11	前期	-146189	-43901
871	IA礎石群	前期	-146229	-43833		930	3A瓦敷12	前期	-146191	-43876
872	IA土坑219	前期	-146257	-43851	0.60	931	3A瓦敷竈	前期	-146193	-43889
873	IA土坑225	前期	-146257	-43859	0.75	932	3A建物3	前期	-146189	-43855
874	IA土坑226	前期	-146259	-43858		933	3A建物4	前期	-146194	-43912
875	IA土坑233	前期	-146258	-43852	0.46	934	3A建物5	前期	-146193	-43885
876	IA土坑247	前期	-146226	-43827	0.17	935	3A建物6	前期	-146194	-43888
877	IA土坑271	前期	-146226	-43826	0.15	936	3A建物7?	前期	-146195	-43885
878	IA土坑313	前期	-146246	-43858	0.39	937	3A建物8	前期	-146194	-43877
879	IA土坑314	前期	-146246	-43857	0.08	938	3A建物9(礎石列)	前期	-146193	-43874
880	IA土坑318	前期	-146239	-43855	0.56	939	3A溝03	前期	-146209	-43904
881	IA土坑321	前期	-146237	-43857	0.60	940	3A溝04	前期	-146206	-43908
882	IA土坑324	前期	-146252	-43841	0.41	941	3A溝05	前期	-146209	-43891
883	IA竈1	前期	-146220	-43841		942	3A溝06(溝39・42・68)	前期	-146205	-43874
884	IA竈2	前期	-146219	-43843		943	3A溝07(溝67)	前期	-146202	-43847
885	IA竈3	前期	-146220	-43839		944	3A溝08	前期	-146209	-43865
886	IA竈4	前期	-146225	-43838		945	3A溝043	前期	-146199	-43844
887	2D井戸1	前期	-146127	-43675		946	3A溝044	前期	-146196	-43844
888	2D井戸2	前期	-146118	-43665		947	3A溝045	前期	-146195	-43855
889	2D井戸3	前期	-146133	-43656		948	3A溝057	前期	-146183	-43905
890	2D井戸4	前期	-146132	-43679		949	3A溝058(溝85)	前期	-146189	-43905
891	2D井戸5	前期	-146130	-43680		950	3A溝059	前期	-146190	-43903
892	3Aビッド055	前期	-146209	-43911	0.14	951	3A溝060(溝80)	前期	-146189	-43900
893	3Aビッド083	前期	-146184	-43907		952	3A溝061	前期	-146189	-43896
894	3Aビッド086	前期	-146193	-43907	0.47	953	3A溝062(溝109)	前期	-146190	-43895
895	3Aビッド090	前期	-146184	-43895	0.32	954	3A溝063	前期	-146192	-43891
896	3Aビッド112	前期	-146194	-43880	0.58	955	3A溝064(溝83)	前期	-146194	-43887
897	3Aビッド116	前期	-146191	-43852		956	3A溝065	前期	-146193	-43886
898	3Aビッド117	前期	-146190	-43854		957	3A溝066	前期	-146195	-43882
899	3Aビッド118	前期	-146191	-43858		958	3A溝069	前期	-146189	-43911
900	3Aビッド131	前期	-146190	-43906	0.35	959	3A溝070	前期	-146192	-43911
901	3A圍炉裏1	前期	-146214	-43911		960	3A溝071	前期	-146189	-43883
902	3A圍炉裏2	前期	-146208	-43902		961	3A溝072	前期	-146194	-43878
903	3A圍炉裏3	前期	-146194	-43856		962	3A溝073	前期	-146182	-43887
904	3A圍炉裏4	前期	-146185	-43875		963	3A溝074	前期	-146186	-43888
905	3A遺物集中部	前期	-146209	-43902		964	3A溝075	前期	-146191	-43870
906	3A井戸06	前期	-146199	-43833		965	3A溝076	前期	-146195	-43869
907	3A井戸14(土坑571)	前期	-146187	-43890		966	3A溝077	前期	-146182	-43901
908	3A井戸16	前期	-146192	-43880		967	3A溝061a	前期	-146185	-43898
909	3A井戸17	前期	-146197	-43863		968	3A溝084	前期	-146192	-43865
910	3A井戸18	前期	-146180	-43904		969	3A溝086	前期	-146189	-43847
911	3A井戸19	前期	-146185	-43876		970	3A溝087	前期	-146190	-43843
912	3A井戸20	前期	-146189	-43886		971	3A溝089	前期	-146192	-43878
913	3A井戸23	前期	-146188	-43888		972	3A溝090(溝40・41)	前期	-146202	-43865
914	3A井戸24	前期	-146188	-43891		973	3A溝091(溝8・土坑288)	前期	-146198	-43880

表9 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)2

974	3A溝003	前期	-146210	-43904	0.16	1042	3A土坑302	前期	-146190	-43854	0.01
975	3A溝094	前期	-146187	-43886	0.20	1043	3A土坑304	前期	-146189	-43852	0.89
976	3A溝095	前期	-146189	-43856	0.07	1044	3A土坑305	前期	-146190	-43857	0.21
977	3A溝096	前期	-146191	-43852	0.17	1045	3A土坑306	前期	-146186	-43884	0.47
978	3A溝097 a	前期	-146190	-43879	0.46	1046	3A土坑308	前期	-146183	-43892	0.08
979	3A溝097 b	前期	-146192	-43863	0.45	1047	3A土坑309	前期	-146184	-43856	
980	3A溝110	前期	-146190	-43875	0.11	1048	3A土坑310	前期	-146184	-43856	0.05
981	3A礎石建物(瓦葺積)	前期	-146208	-43855		1049	3A土坑311	前期	-146187	-43856	0.06
982	3A谷2	前期	-146188	-43847		1050	3A土坑312	前期	-146187	-43856	0.23
983	3A土間01	前期	-146192	-43903		1051	3A土坑317	前期	-146190	-43896	0.18
984	3A土間02	前期	-146185	-43892		1052	3A土坑318	前期	-146189	-43894	0.76
985	3A土間03	前期	-146193	-43890		1053	3A土坑321	前期	-146189	-43892	
986	3A土間04	前期	-146192	-43890		1054	3A土坑324	前期	-146195	-43878	0.57
987	3A土間05	前期	-146189	-43871		1055	3A土坑329	前期	-146190	-43892	
988	3A土間06	前期	-146191	-43845		1056	3A土坑334	前期	-146184	-43858	
989	3A土間07	前期	-146194	-43895		1057	3A土坑335	前期	-146191	-43889	0.04
990	3A土間08	前期	-146194	-43877		1058	3A土坑336	前期	-146191	-43888	0.13
991	3A土間09	前期	-146195	-43876		1059	3A土坑356	前期	-146200	-43873	0.50
992	3A土間10	前期	-146194	-43910		1060	3A土坑361	前期	-146183	-43884	0.41
993	3A土坑144	前期	-146212	-43907	0.02	1061	3A土坑009	前期	-146185	-43884	0.79
994	3A土坑145	前期	-146212	-43906	0.19	1062	3A板敷1	前期	-146190	-43884	
995	3A土坑146	前期	-146210	-43907	0.22	1063	3A板敷2	前期	-146215	-43900	
996	3A土坑150	前期	-146214	-43877		1064	3A溶解炉1	前期	-146183	-43888	
997	3A土坑151	前期	-146209	-43871	0.29	1065	3A溶解炉2(土坑242)	前期	-146185	-43888	
998	3A土坑156	前期	-146203	-43828	0.03	1066	3A溶解炉3	前期	-146185	-43885	
999	3A土坑157	前期	-146203	-43830	0.30	1067	3A溶解炉4	前期	-146191	-43887	
1000	3A土坑158	前期	-146203	-43832	0.20	1068	3A竈02	前期	-146209	-43906	
1001	3A土坑159	前期	-146203	-43833	0.34	1069	3A竈03	前期	-146213	-43887	
1002	3A土坑160	前期	-146211	-43864	0.01	1070	3A竈04	前期	-146215	-43885	
1003	3A土坑161	前期	-146199	-43852	0.37	1071	3A竈05	前期	-146211	-43885	
1004	3A土坑162	前期	-146200	-43849	0.59	1072	3A竈06	前期	-146211	-43873	
1005	3A土坑163	前期	-146201	-43852	0.36	1073	3A竈07	前期	-146214	-43873	
1006	3A土坑164	前期	-146214	-43864		1074	3A竈08	前期	-146199	-43846	
1007	3A土坑218	前期	-146187	-43892	0.20	1075	3A竈09	前期	-146196	-43842	
1008	3A土坑219	前期	-146185	-43884	0.05	1076	3A竈10	前期	-146204	-43843	
1009	3A土坑221	前期	-146180	-43911	0.32	1077	3A竈11	前期	-146206	-43883	
1010	3A土坑222	前期	-146192	-43905		1078	3A竈12	前期	-146211	-43872	
1011	3A土坑223	前期	-146186	-43891	0.24	1079	3A竈13	前期	-146203	-43880	
1012	3A土坑224	前期	-146183	-43891	0.29	1080	3A竈14	前期	-146203	-43892	
1013	3A土坑226(土坑228)	前期	-146186	-43873	0.23	1081	3A竈15	前期	-146205	-43896	
1014	3A土坑229	前期	-146182	-43884	0.07	1082	3A竈16	前期	-146205	-43896	
1015	3A土坑235	前期	-146184	-43900	0.56	1083	3A竈17	前期	-146209	-43857	
1016	3A土坑236	前期	-146185	-43900	0.28	1084	3A竈18	前期	-146208	-43842	
1017	3A土坑241	前期	-146183	-43890	0.11	1085	3A竈19	前期	-146206	-43830	
1018	3A土坑244	前期	-146192	-43906	0.24	1086	3A竈20	前期	-146199	-43840	
1019	3A土坑249	前期	-146185	-43897	0.42	1087	3A竈21	前期	-146190	-43897	
1020	3A土坑253	前期	-146192	-43884	0.24	1088	3A竈28	前期	-146190	-43884	
1021	3A土坑255	前期	-146184	-43896	0.26	1089	3A竈29	前期	-146191	-43887	
1022	3A土坑257	前期	-146188	-43898	0.42	1090	3A竈30	前期	-146191	-43887	
1023	3A土坑258	前期	-146189	-43898	0.14	1091	3A竈31	前期	-146184	-43874	
1024	3A土坑259	前期	-146196	-43904	0.21	1092	3A竈32	前期	-146183	-43880	
1025	3A土坑261	前期	-146188	-43906		1093	3A竈33	前期	-146189	-43910	
1026	3A土坑262(土坑362)	前期	-146182	-43905	0.71	1094	3A竈34	前期	-146200	-43902	
1027	3A土坑265	前期	-146190	-43848	0.24	1095	3A竈35	前期	-146199	-43903	
1028	3A土坑270 a	前期	-146182	-43848		1096	3A竈36	前期	-146190	-43857	
1029	3A土坑270 b	前期	-146194	-43908	0.19	1097	3A竈37	前期	-146190	-43857	
1030	3A土坑276	前期	-146198	-43884	0.15	1098	3A竈38	前期	-146190	-43900	
1031	3A土坑277	前期	-146189	-43845		1099	3A竈39	前期	-146188	-43903	
1032	3A土坑281	前期	-146205	-43913	0.09	1100	3A竈40	前期	-146207	-43869	
1033	3A土坑284	前期	-146184	-43888	0.28	1101	3A竈41	前期	-146182	-43884	
1034	3A土坑285	前期	-146183	-43890	0.52	1102	3A竈42	前期	-146186	-43858	
1035	3A土坑286	前期	-146182	-43885	0.70	1103	3A竈43	前期	-146190	-43857	
1036	3A土坑287	前期	-146185	-43890	0.32	1104	3A竈44	前期	-146189	-43847	
1037	3A土坑291	前期	-146184	-43885	0.54	1105	3A竈45	前期	-146189	-43844	
1038	3A土坑292	前期	-146185	-43881	0.22	1106	3A竈46(土坑531)	前期	-146194	-43844	
1039	3A土坑299	前期	-146188	-43881	0.26	1107	3A竈47	前期	-146207	-43825	
1040	3A土坑301 a	前期	-146191	-43852		1108	3A竈48	前期	-146197	-43837	
1041	3A土坑301 b	前期	-146186	-43890	0.14	1109	3A竈49	前期	-146206	-43838	

表9 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)3

1110	3A竪50(ピット669)	前期	-146206	-43846		1178	3B土坑106	前期	-146218	-43928	0.14
1111	3A竪51(ピット673)	前期	-146200	-43830		1179	3B土坑110	前期	-146219	-43926	0.14
1112	3A竪52	前期	-146184	-43911		1180	3B土坑111	前期	-146210	-43920	0.10
1113	3A竪53	前期	-146197	-43897		1181	3B土坑114	前期	-146216	-43922	0.14
1114	3A竪54	前期	-146194	-43889		1182	3B土坑116	前期	-146225	-43937	0.08
1115	3A竪55	前期	-146187	-43882		1183	3B土坑117	前期	-146221	-43942	0.29
1116	3A竪56	前期	-146192	-43876		1184	3B土坑122	前期	-146222	-43919	0.07
1117	3A竪57(土坑579)	前期	-146193	-43876		1185	3B土坑133	前期	-146221	-43932	0.22
1118	3A竪58	前期	-146187	-43902		1186	3B土坑135	前期	-146221	-43933	0.32
1119	3A竪59	前期	-146202	-43839		1187	3B土坑139	前期	-146209	-43939	0.16
1120	3A竪60	前期	-146202	-43839		1188	3B土坑140	前期	-146210	-43936	0.17
1121	3A竪61	前期	-146202	-43836		1189	3B土坑141	前期	-146212	-43936	0.12
1122	3A竪62	前期	-146202	-43834		1190	3B土坑145	前期	-146214	-43930	0.07
1123	3A竪63	前期	-146201	-43833		1191	3B土坑148	前期	-146219	-43929	0.10
1124	3Bピット015	前期	-146222	-43930		1192	3B土坑150	前期	-146221	-43924	
1125	3Bピット017 a	前期	-146215	-43941	0.01	1193	3B土坑154	前期	-146222	-43940	0.04
1126	3Bピット017 b	前期	-146224	-43917		1194	3B土坑163	前期	-146210	-43931	0.12
1127	3B塀护表1	前期	-146211	-43927		1195	3B土坑164	前期	-146221	-43906	0.13
1128	3B并戸20	前期	-146225	-43944		1196	3B土坑165	前期	-146212	-43936	0.17
1129	3B并戸22(并戸27・土坑61)	前期	-146225	-43923		1197	3B土坑166	前期	-146212	-43939	0.34
1130	3B并戸23	前期	-146212	-43935		1198	3B土坑168	前期	-146219	-43938	0.30
1131	3B并戸29	前期	-146223	-43925		1199	3B土坑274	前期	-146220	-43919	0.17
1132	3B瓦敷1	前期	-146214	-43937		1200	3B竪1	前期	-146224	-43935	
1133	3B瓦敷2	前期	-146213	-43936		1201	3B竪2	前期	-146221	-43932	
1134	3B建物01	前期	-146212	-43942		1202	3B竪3	前期	-146220	-43929	
1135	3B建物02	前期	-146222	-43937		1203	3B竪4	前期	-146212	-43936	
1136	3B建物03	前期	-146222	-43942		1204	3C并戸1	前期	-146133	-43727	
1137	3B建物04	前期	-146222	-43921		1205	3C并戸2	前期	-146117	-43709	
1138	3B建物05	前期	-146217	-43932		1206	3C并戸3	前期	-146142	-43936	
1139	3B建物06	前期	-146213	-43940		1207	3C并戸4	前期	-146118	-43703	
1140	3B溝10	前期	-146227	-43932	0.27	1208	5Bピット014	前期	-146183	-43845	
1141	3B溝12	前期	-146215	-43940	0.35	1209	5Bピット017	前期	-146190	-43838	0.16
1142	3B溝14	前期	-146220	-43925	0.06	1210	5Bピット018	前期	-146190	-43839	0.14
1143	3B溝15	前期	-146218	-43934	0.21	1211	5Bピット019	前期	-146189	-43836	0.08
1144	3B溝16	前期	-146213	-43931	0.13	1212	5Bピット020	前期	-146186	-43840	0.01
1145	3B溝19a	前期	-146220	-43921	0.17	1213	5Bピット022	前期	-146189	-43840	0.25
1146	3B溝19b	前期	-146212	-43935	0.19	1214	5Bピット024	前期	-146182	-43844	0.20
1147	3B溝20(溝21・土坑94)	前期	-146220	-43935	0.07	1215	5Bピット025	前期	-146180	-43839	0.41
1148	3B溝22	前期	-146211	-43924	0.11	1216	5Bピット026	前期	-146182	-43814	0.22
1149	3B溝23	前期	-146217	-43930	0.14	1217	5Bピット027	前期	-146181	-43817	0.08
1150	3B溝25	前期	-146223	-43924	0.11	1218	5Bピット029	前期	-146182	-43822	0.19
1151	3B溝27	前期	-146214	-43932	0.09	1219	5Bピット031	前期	-146183	-43820	0.01
1152	3B溝32	前期	-146214	-43938	0.22	1220	5Bピット032	前期	-146184	-43818	0.20
1153	3B溝34	前期	-146216	-43934		1221	5Bピット033	前期	-146187	-43820	
1154	3B溝35	前期	-146227	-43934	0.39	1222	5Bピット034	前期	-146179	-43841	0.20
1155	3B溝38	前期	-146213	-43932	0.10	1223	5Bピット040	前期	-146191	-43827	0.21
1156	3B溝44	前期	-146218	-43930	0.12	1224	5Bピット077	前期	-146154	-43821	0.08
1157	3B溝45	前期	-146217	-43927		1225	5Bピット080	前期	-146152	-43821	0.17
1158	3B溝46	前期	-146218	-43921	0.19	1226	5Bピット083	前期	-146159	-43824	0.23
1159	3B溝50	前期	-146212	-43942	0.19	1227	5Bピット084	前期	-146158	-43823	0.22
1160	3B石敷1	前期	-146225	-43935		1228	5Bピット085	前期	-146158	-43824	0.21
1161	3B石敷2	前期	-146214	-43926		1229	5Bピット087	前期	-146161	-43825	0.30
1162	3B石列4	前期	-146228	-43925		1230	5Bピット088	前期	-146147	-43831	0.31
1163	3B土坑056	前期	-146224	-43918		1231	5Bピット090	前期	-146149	-43831	0.36
1164	3B土坑058	前期	-146224	-43933	0.40	1232	5Bピット091	前期	-146151	-43833	0.29
1165	3B土坑059	前期	-146210	-43943	0.10	1233	5Bピット092	前期	-146158	-43832	0.23
1166	3B土坑060	前期	-146225	-43930	0.29	1234	5Bピット093	前期	-146157	-43832	0.33
1167	3B土坑061	前期	-146225	-43923	0.53	1235	5Bピット094	前期	-146157	-43832	0.25
1168	3B土坑063	前期	-146209	-43935	0.10	1236	5Bピット096	前期	-146156	-43832	0.26
1169	3B土坑064	前期	-146212	-43929		1237	5Bピット097	前期	-146155	-43832	0.19
1170	3B土坑069	前期	-146221	-43930	0.06	1238	5Bピット098	前期	-146153	-43832	0.43
1171	3B土坑075	前期	-146216	-43933	0.17	1239	5Bピット100	前期	-146157	-43825	0.29
1172	3B土坑083	前期	-146215	-43922	0.13	1240	5Bピット101	前期	-146156	-43825	0.10
1173	3B土坑086	前期	-146223	-43918	0.11	1241	5Bピット102	前期	-146162	-43812	0.21
1174	3B土坑088	前期	-146216	-43920	0.17	1242	5Bピット103	前期	-146163	-43811	0.30
1175	3B土坑089	前期	-146227	-43936	0.07	1243	5Bピット105	前期	-146163	-43825	0.10
1176	3B土坑092	前期	-146210	-43943	0.07	1244	5Bピット107	前期	-146154	-43832	0.34
1177	3B土坑097	前期	-146220	-43942	0.37	1245	5Bピット201	前期	-146173	-43853	0.16

表9 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)4

1246	5Bピット202	前期	-146172	-43856	0.31	1314	5B土坑225	前期	-146170	-43828	0.44
1247	5B井戸03	前期	-146179	-43856		1315	5B土坑226	前期	-146163	-43850	0.24
1248	5B井戸04	前期	-146172	-43804		1316	5B土坑227	前期	-146165	-43857	0.20
1249	5B井戸06(土坑50)	前期	-146182	-43835		1317	5B土坑229	前期	-146165	-43835	0.21
1250	5B井戸07	前期	-146189	-43839		1318	5B井戸1	前期	-146183	-43850	
1251	5B溝021	前期	-146188	-43841	0.11	1319	5B溝2	前期	-146176	-43826	
1252	5B溝022	前期	-146187	-43838	0.09	1320	5B溝3	前期	-146169	-43814	
1253	5B溝023	前期	-146185	-43839	0.21	1321	6Aピット137	前期	-146137	-43818	0.17
1254	5B溝025	前期	-146186	-43825	0.16	1322	6Aピット142	前期	-146126	-43809	0.25
1255	5B溝026	前期	-146177	-43811	1.04	1323	6Aピット283	前期	-146127	-43824	0.06
1256	5B溝027	前期	-146188	-43829	0.17	1324	6Aピット284	前期	-146126	-43815	0.42
1257	5B溝031	前期	-146187	-43841	0.24	1325	6Aピット546b	前期	-146147	-43858	
1258	5B溝032	前期	-146188	-43842	0.12	1326	6A階坪裏1	前期	-146138	-43820	
1259	5B溝033	前期	-146190	-43839	0.17	1327	6A溝54	前期	-146128	-43815	0.22
1260	5B溝034	前期	-146178	-43836	0.28	1328	6A石列1	前期	-146121	-43809	
1261	5B溝036	前期	-146187	-43832	0.19	1329	6A土坑140	前期	-146127	-43818	0.36
1262	5B溝037	前期	-146189	-43831	0.13	1330	6A土坑141	前期	-146127	-43821	0.17
1263	5B溝038	前期	-146188	-43833	0.15	1331	6A土坑177	前期	-146149	-43864	0.40
1264	5B溝039	前期	-146178	-43841	0.11	1332	6A土師皿1	前期	-146134	-43809	
1265	5B溝040	前期	-146178	-43838	0.09	1333	6A甕1	前期	-146142	-43809	
1266	5B溝041	前期	-146187	-43837	0.38	1334	6A甕2	前期	-146142	-43818	
1267	5B溝042	前期	-146189	-43820	0.29	1335	6A甕4	前期	-146130	-43821	
1268	5B溝044	前期	-146188	-43835		1336	6A甕5	前期	-146130	-43820	
1269	5B溝045	前期	-146187	-43828	0.16						
1270	5B溝047	前期	-146190	-43826	0.04						
1271	5B溝048	前期	-146185	-43819	0.12						
1272	5B溝066	前期	-146150	-43832	0.27						
1273	5B溝070	前期	-146156	-43833	0.31						
1274	5B溝102	前期	-146172	-43857	0.11						
1275	5B溝103	前期	-146171	-43859	0.13						
1276	5B土坑042	前期	-146178	-43838	0.08						
1277	5B土坑043	前期	-146183	-43849	0.14						
1278	5B土坑045	前期	-146191	-43839	0.18						
1279	5B土坑046	前期	-146190	-43842	0.05						
1280	5B土坑047	前期	-146191	-43840	0.18						
1281	5B土坑048	前期	-146186	-43836	0.25						
1282	5B土坑049	前期	-146179	-43852	0.08						
1283	5B土坑051	前期	-146187	-43830	0.21						
1284	5B土坑054	前期	-146181	-43836							
1285	5B土坑055	前期	-146191	-43840	0.30						
1286	5B土坑056	前期	-146186	-43841	0.06						
1287	5B土坑058	前期	-146190	-43834	0.09						
1288	5B土坑061	前期	-146188	-43839	0.37						
1289	5B土坑062	前期	-146183	-43839	0.69						
1290	5B土坑063	前期	-146182	-43840	0.18						
1291	5B土坑064	前期	-146191	-43839							
1292	5B土坑065	前期	-146187	-43831							
1293	5B土坑068	前期	-146190	-43831	0.17						
1294	5B土坑069	前期	-146184	-43813	0.13						
1295	5B土坑070	前期	-146185	-43817	0.15						
1296	5B土坑071	前期	-146180	-43814	0.25						
1297	5B土坑072	前期	-146175	-43813	0.08						
1298	5B土坑073	前期	-146180	-43858	0.15						
1299	5B土坑074	前期	-146173	-43812	0.25						
1300	5B土坑076 a	前期	-146185	-43818	0.36						
1301	5B土坑080	前期	-146191	-43828	0.10						
1302	5B土坑081	前期	-146187	-43826	0.03						
1303	5B土坑083 a	前期	-146191	-43824	0.08						
1304	5B土坑083 b	前期	-146161	-43809	0.07						
1305	5B土坑085	前期	-146189	-43828	0.06						
1306	5B土坑087	前期	-146186	-43826	0.27						
1307	5B土坑154	前期	-146190	-43815	0.21						
1308	5B土坑170	前期	-146162	-43816	0.22						
1309	5B土坑171	前期	-146157	-43840	0.10						
1310	5B土坑174	前期	-146159	-43826	0.12						
1311	5B土坑222	前期	-146166	-43831	0.34						
1312	5B土坑223	前期	-146160	-43836	0.17						
1313	5B土坑224	前期	-146163	-43840	0.56						

A、5 A 調査区以外の遺構

地形と三の丸築造以降の再開発により遺構の大半は、5 B 調査区の南端から3 A 調査区を経て1 A 調査区の北半におよぶ谷の底に限られる。6 A・2 C・4 A・2 B 調査区などの北部高台地区では、部分的に豊臣期の複数の生活面が残っているが、それらと個々の遺構との関係を明確にする条件は乏しく、この時期を単独に抽出し得ない。

また1 B・2 D・3 C 調査区などの東部地区では、5 層の埋積以前におこなわれたおおがかりな削平により、三の丸築造以前どころか三の丸期の遺構も失われ、わずかに井戸の下部を散見するのみである。

以下3 A 調査区を中心に掲載遺構図の説明からすすめる。

2 D 井戸 1 (887) 2 D 調査区の中央に位置する。木枠の円形井戸である。規模は木枠の直径0.75m、堀方直径0.72mで深さは検出面から約4 m掘削して底は未出である。桶形の木枠は5段以上確認されており、最上段は幅6 cmの板が42枚で作られている。1段についてタガは2段設けられ、上部の3箇所穴が空けられている。

埋土は、2段までの部分が砂混じりの暗灰色粘土で遺物はほとんどみられない。3段以下は腐植物を多量に含む層で、特に箸の出土が多い。破片数は1562本をかぞえ、総延長は240mとなるため、予測される基本長さ(24~25 cm)を基準とすれば、およそ1000本の箸が廃棄されていることになる。

2 D 井戸 4 (890) 2 D 調査区の南西に位置する。直径1 mを測る円形の井戸である。検出面から2.5 mほどまでは井戸壁周囲に木枠の抜き取り痕跡がみられ、下部には木製枠が残存していた。埋土は、検出面より1 mまでは11層のシルトを基調とした、2 D堀2の8層に類似したものであるが、それより下層では、焼土、腐植物などを含む層であった。土質などにより複数の分層が可能であるが、それらの層を越えて遺物が接合されており、廃棄は短期間に行なわれていたことがわかる。

3 A 溝36・37・90 (942・943・972) 3 A 調査区の中央を東西に走る。溝36は51m、溝37は80mで8 b 層の時期に設けられ、溝90は94mをはかり8 c 層の時期のみに機能していた。いずれも西端は調査区外へのびる。溝36と37の規模は、幅が下端で0.5m、上端0.75m、深さ0.6m程である。両者の溝は調査区の西端から50mにわたり溝の中心間距離が5.75m(内側の距離は5 m)で平行してはしり、溝36の東端から溝37へつながる。また溝37の一部には杭と横板で土留めした施設もみられる。なお両者の溝にはさまれた部分は表面が堅く締まっていた。

溝90は溝36・37の中央をそれらに先行する形ではしる。掘り方の断面は底の尖った5角形を呈し、その尖底を利用して南よりに土留め用の杭をうつ。掘り方の幅は上端で約2 m、深さは1.2mであり、南面の土留め板より内側の幅は約1 mを測る。先に述べた谷との関係において、この溝はその最深部を流れていたものに復原できる。

3 A 溝77 (966) 3 A 調査区の北西隅に位置する。横板と杭および石組みによる導水樋である。確認された長さは約4 m、幅1 mであり、東から西へ水を導き西に配した集石の土坑262 (1026) に落としている。

5 B 土坑73 (1298) 5 B 調査区の西南に位置する。埋桶である。規模は直径0.5m、深さ0.5mで上端を一段の平瓦で補い、さらに上端の周囲にも平瓦を敷いている。遺物は認められなかった。

6 A 土坑177 (1331) 6 A 調査区の南西隅に位置する。谷をあがった肩部分である。東西に長い隅丸長方形を呈し、規模は東西1.6m、南北0.8m、深さ0.3mである。銭名は不明であるが、10枚の銭貨が

出土している。

1 A 屋敷 1 (853) 1 A 調査区の北西に位置する。1 A 溝 41 (854)、1 A 溝 44 (868) とその北で検出された竈および遺物の集中部を称する。溝 44 は南北長 5.5m の区画で東へ拡張する。溝の壁には杭と横板が設けられ、護岸としている。溝 41 はほぼ東西に軸をとり東部には渡板をもっている。遺物の集中部はさらにその北側にあり、瓦敷、礎石列なども伴っている。東西方向の礎石は 0.75m の間隔をもつ。中央部で北側へ倒れている組み合った材は、垣根などの倒壊した状況と考えられる。なお他の遺物の出土状況も北東方向への倒壊を示しており、谷の傾斜に一致して、三の丸の造成時に短期間で埋没した状況がうかがわれる。瓦、漆器椀、皿、備前窯徳利、土師器釜・甕、中国製梨付、下駄、櫛などが出土した。

1 A 礎石群 (871) 1 A 調査区の東端に近い中央に位置する。東西または南北に軸をあわせ、南北 8m、東西 6m まで確認できた。また南北の礎石間隔は 1.9m である。なお、この礎石群は 1 A 溝 80 (870) の埋積過程に設けられており、そのため三の丸築造以前でもより新しい時期に比定されることになる。

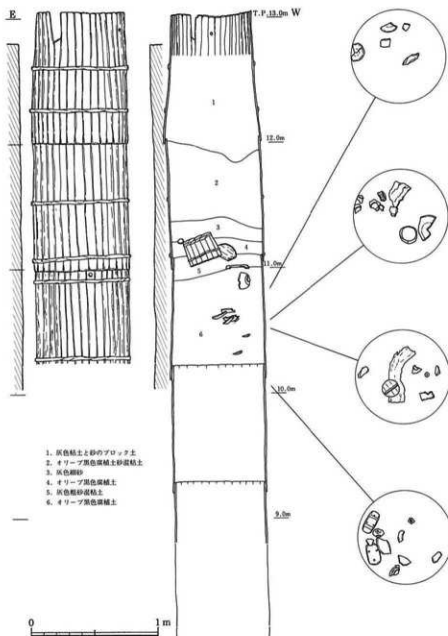


図243 2 D 調査区 井戸 1 断面図

3 A 屋敷 3 ~ 11 (1620 ~ 1628) 3 A 調査区の 8 a 層で北半部に位置する。東西にはしる溝 37 に対して短冊状に配された屋敷地割である。地口の規模は屋敷 3 が 5.7m、屋敷 4 ~ 10 が 3.7m、屋敷 11 が 4.5m であり、奥行きは屋敷 3・4 が 14m、屋敷 5・6 はその間の路地に溝 37 から 14m の位置で溝があるため、やはり 14m の可能性が高い。屋敷 7 は 11m と 14m の位置に区切りがある。屋敷 8 は 10m と 14m の位置に区切りがある。屋敷 10 は 12m、屋敷 11 は 14m である。

屋敷 3 の西と屋敷 5・6 の間と屋敷 7・8 の間に路地がみられる。幅は 1 ~ 1.5m である。

それぞれの屋敷の内部構造は不明であるが、屋敷 5 では東の境に沿って中央に竈状の火処、南と北に瓦敷きがみられ、これは屋敷 7・

8でも同様にみられる状況である。

3 A 屋敷 1・2 (916・917) 3 A 調査区の南西に位置する。溝36の南で礎石列と竈および横板で土留めされた溝35 (941) が並ぶ地区である。ここでは溝36にそそぎ込む蓋板をもつ溝35とさらにそれに平行して設けられた瓦敷きの道路遺構を境界に、その西を屋敷 1、東を屋敷 2 とした。

溝35は杭と横板を土留めにした溝である。幅は0.2~0.3m、深さは0.2mを測る。縦板または横板による蓋が掛けられている。溝35は北から6.8mで途切れ、さらに南は同じ軸ではあるが連続の不明な溝がのびている。

屋敷 1 は、その範囲の東半部に小規模な礎石を配した建物をもち、西に土間と囲炉裏の基礎と思われる方形の遺構および複数の竈と廃棄土坑をもつ。3 A 囲炉裏 1・2 (901・902) はそれぞれ敷地の西南と中央に位置し、囲炉裏 1 は細材により方形に組まれ、囲炉裏 2 は割り箸状の細木を四周に差した状態をみる事ができた。共に灰はみられなかった。

礎石群はトレンチの北半を中心として全面で認められたが、囲炉裏 2 周辺の礎石群は特に密集度が高く、建物を復原できる可能性がある。ほかに、囲炉裏 2 の北側からは金時蒔の施された調度品の一部、溝35の西北部分からは瓦の集積、囲炉裏 2 を中心とした礎石群の南からは倒壊した壁材なども検出された。

屋敷 2 は西端に南北 6m、東西 8m の礎石建物と竈 3 (1069) をもち、東に 3 連の竈 6 と 7 連以上の竈 7 を配する。また竈 6 の北東部には南北軸で締まった面と根太の載る礎石も検出された。

3 A 礎石建物 (981) 3 A 調査区の南中央で、屋敷 2 とした部分の東に位置する。三の丸築造によると思われる盛土 (7 b 層) を除去後、南北 10m 以上、東西 17m の範囲で瓦の破砕された集積が広がり、その下から礎石建物が検出された。破砕された瓦の集積は、その中央に東西方向の溝状のくぼみがみられ、その西端は南北に斜めに分かれる溝につながっていた。

礎石建物は、南北 10m 以上、東西 12m の規模を測り、東西 6 間、南北 4 間以上で、その北西部はさらに内部を区画するように 2×3 間の礎石をもっている。またこの建物を構成する礎石以外に、0.3 m 下がった面で、より小形の礎石

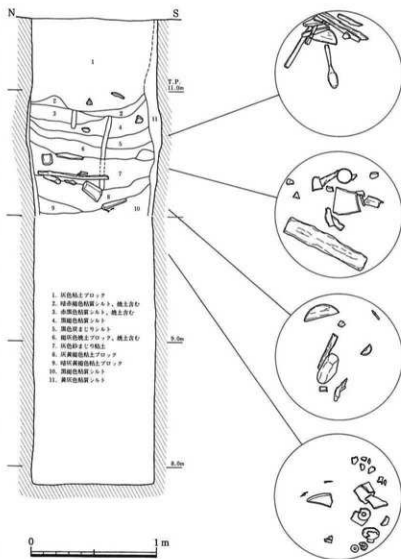


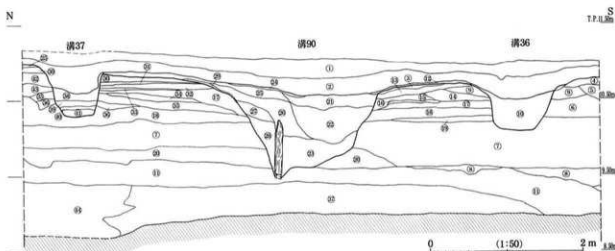
図244 2D調査区 井戸4 断面図

が重複して並んでいる。これらの下層の礎石群も一部は中央南北または東西に軸をもち、建物に復原できる可能性がある。

1 A 屋敷 4 ~ 6 (857~859) と 1 A 竈 1 ~ 4 (883~886) 1 A 調査区の北東部に位置する。1 A 調査区 ~ 5 B 調査区におよぶ谷の南肩に近い部分で、三の丸築造によると思われる盛土を除去する過程で検出された。地形にあわせて南が高く、北に向かって下降しており、狭い面積で盛土による平坦面がつくり出されている。このうち屋敷 4・5 とした部分は、盛土による基盤層が検出された部分であり、屋敷 6 と竈 1 ~ 3 は 3 A 調査区の南西部で見られたと同様な砂層が、調査深度の限界により残されており、



図245 3 A 調査区 溝37・溝90断面図



- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|-------------------------|
| ① 2.5Y 7/6 明黄褐色 (76層) | ③ 5Y 6/3 オリーブ黄色 中粒砂 | ⑩ 10YR 3/1 黒褐色 砂混じりシルト |
| ② 8B 6/1 青灰色 粘土 | ④ 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂混じりシルト | ⑪ 5Y 7/4 灰黄色 中粒砂 |
| ③ 5Y 8/2 灰白色 粗砂 | ⑤ 7.5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト | ⑫ 2.5Y 5/2 暗褐色 砂混じりシルト |
| ④ 5Y 6/1 灰色 砂混じりシルト、中粒砂 | ⑥ 10Y 4/1 灰色 砂混じりシルト | ⑬ 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト |
| ⑤ 10Y 4/1 灰色 砂混じりシルト (炭化物を含む) | ⑦ 10YR 2/2 黒褐色 有機物の堆積層 | (粘土小ブロック含む) |
| ⑥ 5B 4/1 暗青灰色 砂混じりシルト | ⑧ 10Y 5/2 オリーブ灰色 粗砂とシルト | ⑭ 2.5Y 4/1 黄灰色 砂混じりシルト |
| ⑦ 10Y 5/2 オリーブ灰色 砂混じり粘質土 (粘粘土) | (粘土ブロックあり) | (粘土粒含む) |
| ⑧ 2.5Y 7/2 灰黄色 粗砂 | ⑨ 5Y 2/1 黒色 } 堆積層、炭化物多く含む | ⑮ 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト |
| ⑨ 10BG 5/1 青灰色 粘土 (堆積土) | 5Y 7/2 灰白色 } 堆積層、炭化物多く含む | ⑯ 自然成層 |
| 10 2.5Y 7/6 明黄褐色 粗砂 (堆積土) | ⑩ 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂混じりシルト | ⑰ 10Y 4/1 灰色 砂混じりシルト |
| 11 7.5GY 7/1 明緑灰色 シルト | ⑪ 5Y 6/3 オリーブ黄色 粗砂 | ⑱ 5Y 7/2 灰白色 中粒砂 |
| 12 7.5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト | ⑫ 5Y 4/1 灰色 粗砂とシルト (礫含む) | ⑲ 5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト |
| 13 5Y 7/3 灰黄色 粗砂 | ⑬ 10Y 4/1 灰色 砂混じりシルト (中粒砂含む) | ⑳ 5Y 7/3 灰黄色 細砂 |
| 14 10Y 4/1 灰色 砂混じりシルト | ⑭ 5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト | ㉑ 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂混じりシルト |
| 15 5Y 6/2 灰オリーブ色 砂混じりシルト | (粘土ブロック含む、糞での土) | (中粒砂含む) |
| 16 7.5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト (炭化物を含む) | ⑮ 2.5Y 4/2 暗灰黄色 シルト (炭化物を含む) | ㉒ 2.5Y 4/1 黄灰色 砂混じりシルト |
| 17 7.5Y 7/1 灰白色 灰と炭の層 | ⑯ 10Y 7/2 灰白色 中粒砂 | (礫を多く含む) |
| | | ㉓ 5GY 7/1 暗オリーブ灰色 細砂 |

図246 3 A 調査区 溝36・溝37・溝90断面図

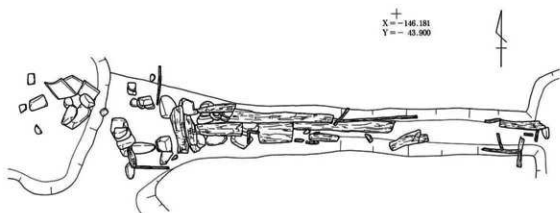


図247 3 A調査区 溝77内石組平面図

明確な屋敷地の範囲は不明である。なお、屋敷4～6についても遺構と遺物の集中状況により、便宜的に付与した名称である。

屋敷4は南北3m、東西4m以上の範囲である。盛土を基盤層としており三の丸築造以前でも新しい段階に属する。範囲の北側で瓦の集積と敷かれた状況が、南側で細材の分布が認められた。

屋敷5は南北3m、東西6mの範囲である。盛土を基盤層としており三の丸築造以前でも新しい段階に属する。中央東より西を挟き口とした単独の竈をおき、その全面に瓦を敷いた面がひろがる。またその背面には細材の組み合わせられた垣根状の構造の倒れた痕跡をもつ。範囲の北と東は段差をもって区画され、南と西は細い溝で区画される。

1 A 井戸13 (852) は屋敷4と5の境界部分から検出された。直径1.5mを測る、検出時は素掘りの井戸である。掘削限界により底は未出であり、遺物もとりあげられていない。

竈1～3はいずれも直径0.3mほどの小規模な竈であり、竈2から竈3の距離は4mを測る。焚き口は北または北西であり、隣接して埋め桶を伴う。粘土と瓦による構築で、個々

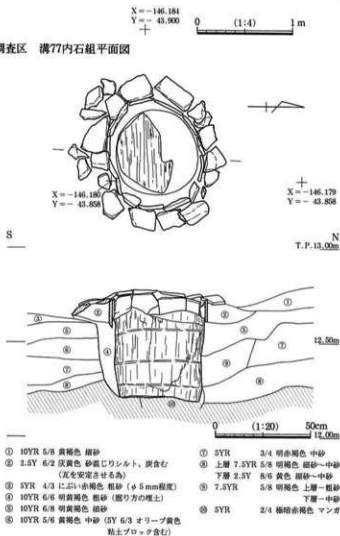


図248 5 B調査区 土坑73平面・立面図

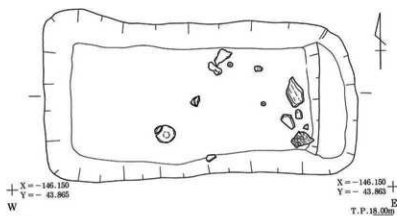


図249 6 A調査区 土坑177平面・断面図

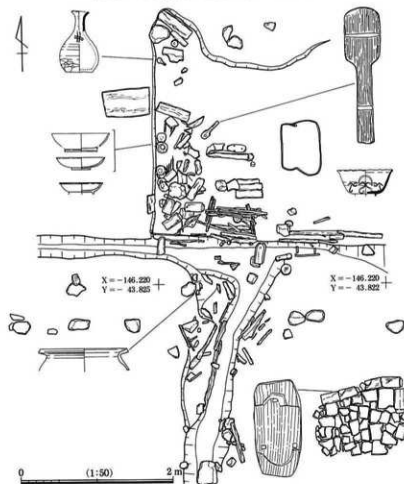


図250 1 A調査区 屋敷1遺物出土状況図

の関係および単・連の別は不明である。

3 A 竈15~18 (1081~1084) 3 A調査区の南東に位置する。先述の3 A 礎石建物が倒壊した後の破砕瓦集積と同一面であり、これらの遺構の基盤層が3 A 溝37を埋めている。約4 m隔てて竈15と竈16が東西にならび、竈16の南東と南西約4 mに竈18と竈17が東西に並ぶ。削平により竈15以外の全貌を知り得ないが、遺構の配置状況からおそらく同様の構造をもっていたものと考えられる。

竈15は東西1.8m、南北0.8mの範囲で、東に2連の竈と西に流し枡をもつ。2連の竈は焚き口を北にもち、直径は0.3mと0.2mである。粘土と瓦による構築であり、内面に煤を残していた。流し枡は底面が瓦敷きで側面は横板による。南西方向に排水口を配し、そのまま溝につながっている。

3 A 鑄造関連遺構

3 A調査区中央北半部では、炉3を中心にして平面方形および不定形の廃棄土坑が広がる。これらの土坑群は複数が切り合って存在しており、多くの土坑から鑄造にかかわる遺物が多数出土した。また、埋土に多量の灰を含むものがあり灰溜り状の土坑も見られた。

また、土間や礎石の存在から建物跡と見られる遺構が東側で2棟、中央部で3棟、西側で1棟検出されている。ピットや礎石は小さく、建物自体の規模も小さいものと考えられる。

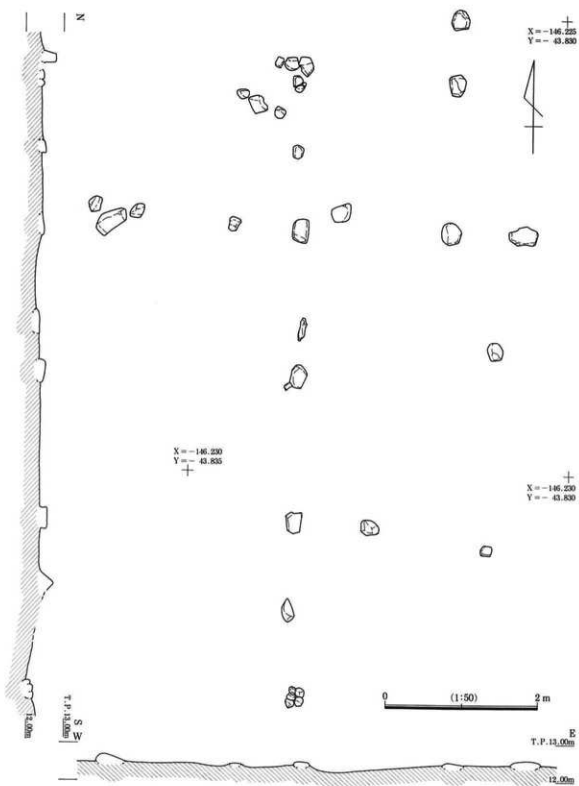


图251 1A調査区 礎石群平面・断面図

溶解炉 2 (1065) は中央北部に位置する。褐色のシルト混じり粗砂層を基盤層として直径0.6mの円形掘り方に溶解炉底部が設置されている。溶解炉は平面形が直径40cmの円形を呈し、残存する器高は22cmを測る。内面に厚くスラグが融着しており内径は28cmを測るにすぎない。深さ0.4mの掘り方内に直接設置されており、下部構造は確認されなかった。

溶解炉 3・4 は直径約50cmの掘り方の中に据え付けられており、基底部のみが残存していた。炉内部や掘り方内からは特に目立つ遺物は無かった。炉 4 は炉 3 の南側に位置し、両者は6.3m程離れている。また、炉の周囲には焼土の分布は認められなかった。

建物 4 (933) は南北4.5m、東西3m以上の規模で平面方形を呈し、5cm程の深さで地面を掘り込んで

ている。礎石は確認できず、周囲にピットを配していた。建物内南東隅では炭の集積が見られた。

建物 5 (934) は南北4m・東西2m・深さ0.6mで北側にやや張り出す平面方形を呈する。北側は2段に東側は3段に掘り込まれている。床面には北西隅に2基、中央に4基、南側に2基の土坑が存在する。それぞれ直径は50cm前後、深さ15cm前後である。北側の土坑と中央の土坑、南側の土坑と中央の土坑との距離はともに0.67mである。また、北側の床面直上からは多量の炉壁片が集中して検出され、南側からは鋳型片の集中部が検出された。埋土からも炭、焼土、鉱滓、バリ、サル状粘土塊、炉壁などが出土している。

建物 6 (935) には明確な礎石などは認められなかったが、瓦敷きの竈が1基検出された。また、建物内部と推定される範囲に1~2cm程度の厚さで微細な炭の堆積がみられた。

東側で検出された建物 8・9 (937・938) は礎石の残りが悪く、礎石の掘り方が検出されたにとどまる。建物 8 は南北3m以上、東西2.3m以上の規模で、建物 9 は南北4.5m以上、東西2.3m以上の規模である。

溶解炉 3 (1066) を中心に廃棄土坑が十数基、炉 4 (1067) の周囲には数

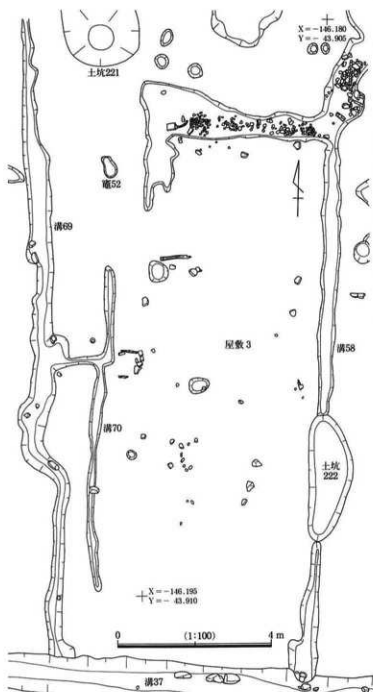


図252 3A調査区 屋敷3平面図

基の廃棄土坑がみられる。

土坑241 (1017) は溶解炉2の西0.5mに位置する。直径0.6mを測る円形の土坑で、内部から煤の付着した、円錐形の窪みをもった方形の石が出土した。

土坑284 (1033) は南北2.4m、東西1.6m規模を持ち平面方形を呈する。炉壁と炭が検出された。土坑285 (1034) は不定形の土坑で規模は南北2.4m以上、東西2.8m以上を測る。鉱滓と数枚の灰層が見られた。土坑286 (1035) は不整形を呈し、南北2m以上、東西2.4mを数える。炉壁が数点出土している。土坑291 (1037) は隅丸方形を呈し、炉壁と炭が見られた。規模は南北1.4m、東西2.4mを計る。

土坑301 (1041) は溝94 (975) に南半を切られており、底面から数点の炉壁が出土した。残存長は南北0.7m、東西0.8mである。土坑306 (1045) は土坑291に切られるが隅丸方形を呈し多量の灰 (灰溜まり) が堆積していた。南北1.7m、東西1.7mの規模である。土坑321 (1053) からは多量の炉壁が検出された。規模は南北0.3m、東西0.5mの小さな土坑である。土坑335・336 (1057・1058) は直径40cmの円形を呈し、多量の灰 (灰溜まり) が充填されていた。土坑361 (1060) は隅丸方形を呈し、炭と鉱滓が検出された。南北1.6m、東西1.7mを計る。

また、溝94からは炉壁と炭、井戸20 (912) からは炉壁が検出されている。

3 A 土坑310 (1048) 3 A 調査区の東部に位置する。規模は約4m四方であり、北西に向かって緩やかに下降している。土師器皿はこの南側斜面に密集して出土した。また、北側からも土師器皿が出土しており、土坑310は不定形な落ち込みとして調査区の北側にのびる可能性が考えられる。出土しているほとんどの土師器皿が完形品もしくは完形品になるものである。またわずかにずれて重なっているものが多くみられることから、重ねていたものがそのまま転落したと考えられる。これ以外の

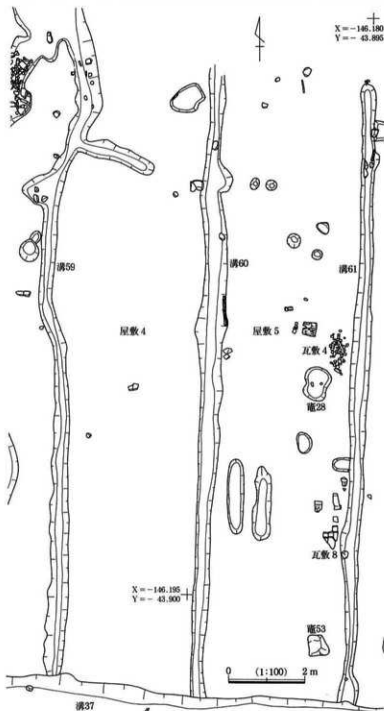


図253 3 A 調査区 屋敷4・5 平面図

部分では黄褐色の砂層が一様に広がっており、土師器皿の廃棄直前段階の盛土と考えられる。一方、土坑310の東側では北西から南東に落ちる谷があり、その埋土として暗褐色の10層が露出している。

3 B 石列 1 (671) 3 B 調査区の南に位置する。調査区南部の11層斜面との境で、調査区の東端から12mにわたって検出された石列部分と、その西にあたる3 B 溝20 (1147)の南側付近を隔て、さらにその西側延長部分から検出された、東西の溝に平行する形の直径約15cmの2本の丸太材の2カ所からなる。その中間部分の3 B 溝20 (1147)の南側付近では石列を確認していないが、硬い11層がこの部分のみ北に張り出してきていることから、当初からこの部分には石列が築かれなかったと考えられる。したがって

石列の東部分と丸太材の西部分は直接つながっているわけではないが、すぐ北に位置する3 B 溝15 (1143)に平行する関係から、両者は同一時期のものと考えている。

西側の丸太材の長さはそれぞれ約2mと約1.7mであり、一部に面取りの痕跡がみられる。またこの木材の下層から石列の東部分と連続すると思われる石列が検出された。

石列は西部分・東部分ともに基本的には1段積みであるが、部分的に3段に積んでいるところもある。使用している石はほとんどが自然石で、鑿痕の残っているものもみられる。石の大きさは直径20~80cmで、石材は生駒系のものが多く、西部分では六甲系のものも混ざっている。

なお石列の時期についてであるが、石列が検出されたのは8 b層上面の段階であり、しかもその当初、この位置には8 b層と南側の11層の斜面を削りこんだ溝のみが設けられていた。しかしすぐに南側斜面からの流出土によって溝が埋まり、その後その埋土上面に石列が構築され、11層斜面との間に裏込めがなされている。またこの裏込めの上面にもう1層南側斜面からの流出土が堆積していることから、石列の存続期間は、8 b層上面に始まり、8 a層の古い段階まで続いたことが考えられることになる。そして、最終的には8 a層上面の段階で南側斜面からの流出

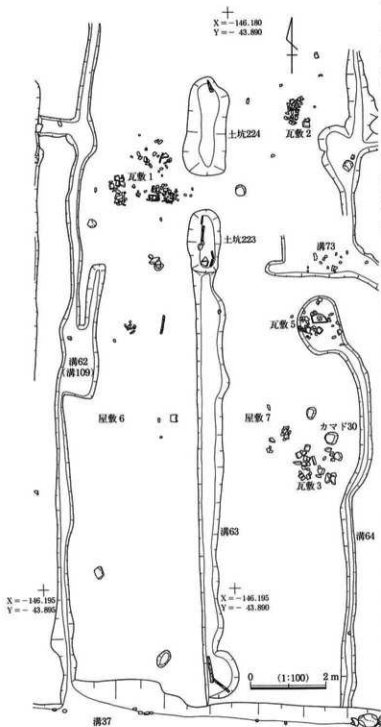


図254 3 A 調査区 屋敷6・7 平面図

土によって埋没してしまい、三の丸築造直前の段階では、この石列は地上に姿を見せていなかったようである。

以下詳細図以外の遺構についてのべる。

3 A 溶解炉 1 (1064) 3 A 調査区の南西隅で検出された。下部構造は無い。

3 A 竈 12 (1078) 3 A 調査区の南中央で検出された。焚き口を西にもち、その側壁を石で補強している。

3 A 竈 14 (1080) 3 A 調査区の南中央に位置する。焚き口を東にもち、底部に平瓦を敷いている。底

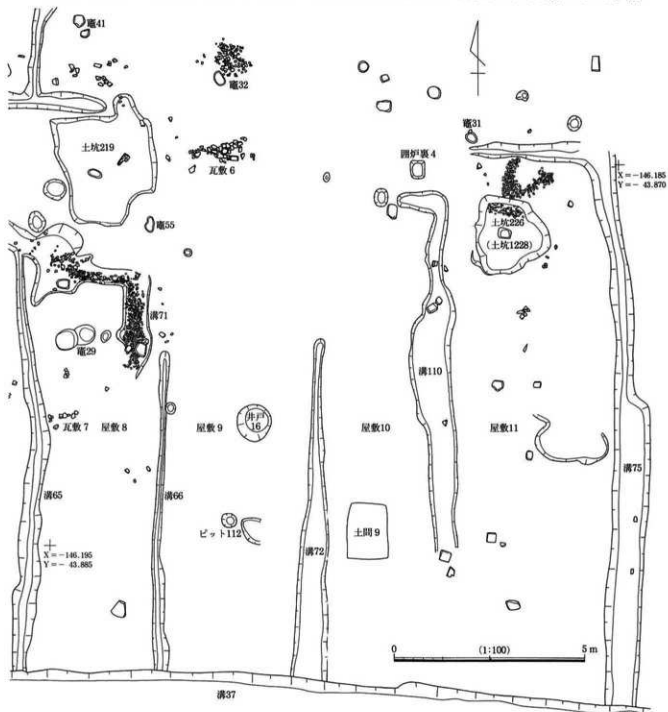


図255 3 A 調査区 屋敷 8～11 平面図



图256 3A調査区 屋敷1平面図

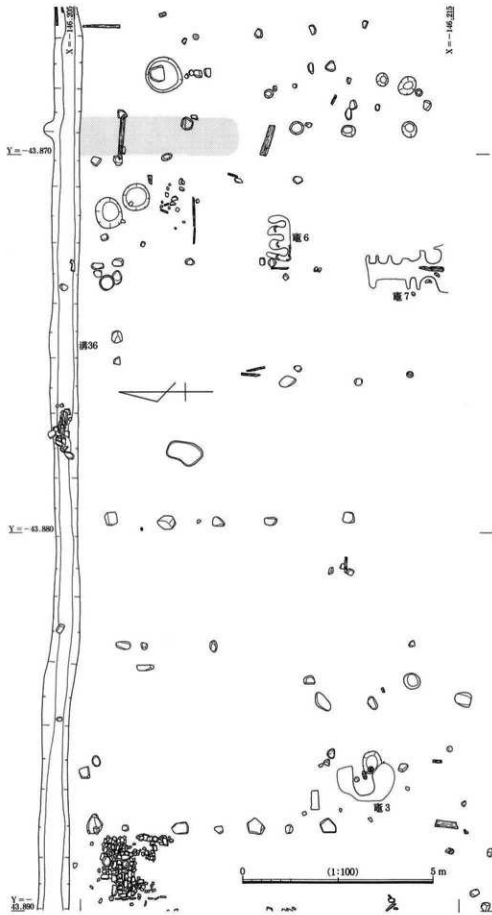


図257 3 A調査区 屋敷2 平面図

部のみを検出である。

3 A 土坑151 (997) 3 A 調査区の南中央東よりに位置する。南北に長い楕円形の土坑であり、漆器碗、桶蓋、柄杓形鉄製品、柄杓、材などが廃棄されていた。

3 A 竈59~63 (1119~1123) 3 A 調査区の東部に位置する。9・10層上面での検出である。いずれも

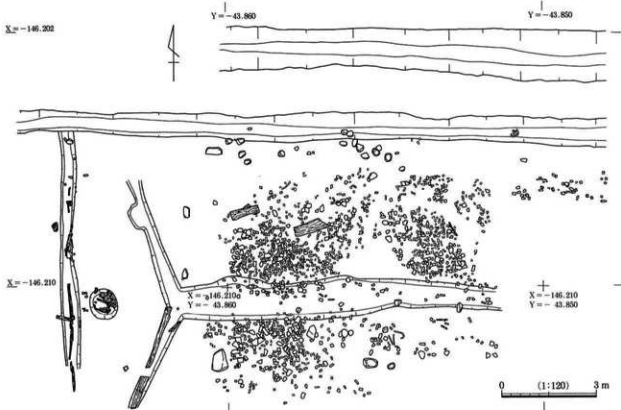


图258 3 A 調査区 礎石建物平面図

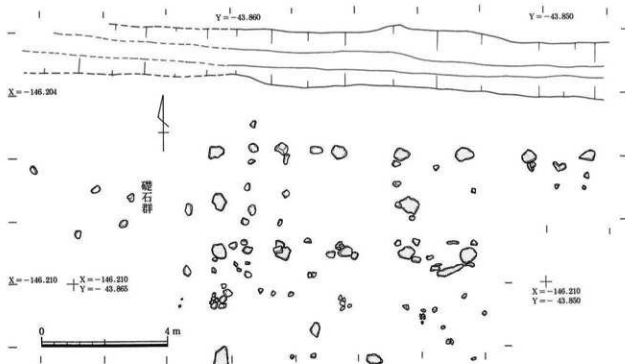


图259 3 A 調査区 礎石建物平面図

幅0.3m以下の小規模な竈であり、上部は削平され、煤の残った底部のみの検出である。焚き口方向は確定し得ない。

3 A 竈 8 ~ 11 (1074 ~ 1077)、竈 14 (1080)、竈 19 ~ 21 (1085 ~ 1087)、竈 42 ~ 51 (1102 ~ 1111) 3 A 調査区の東半部に位置する。いずれも直径0.3m程度の小規模な竈で、竈 8 が 2 連であり、竈 8・9・



図260 1 A 調査区 屋敷 4 ~ 6 平面図

21・20の焚き口が北であり、竈19が平面方形で焚き口が西である以外、削平により詳細は明らかにできなかった。この地区一帯に4～5m間隔で密集している点に特徴がある。いずれも三の丸築造以前でも新しい段階に比定されるであろう。

3 A建物3 (932) 3 A調査区の東端に位置する。7層除去後の状況としては、北西部で砂層の露出がみられ、それ以外の部分はおおむね8 a層が堆積している。このうち北西部の砂層は鉄分の凝着によって酸化がみられるものの、ほぼ均一なもので、周囲に対して比高差1m程度の高まりを呈する。とくに遺構などは検出されなかった。これに対して南側では溝と方形に区画された遺構面を検出し、これを建物3とした。溝95 (976) は長さが東西約5.3mと南北約4.0mにわたって検出され、建物側を板材によ

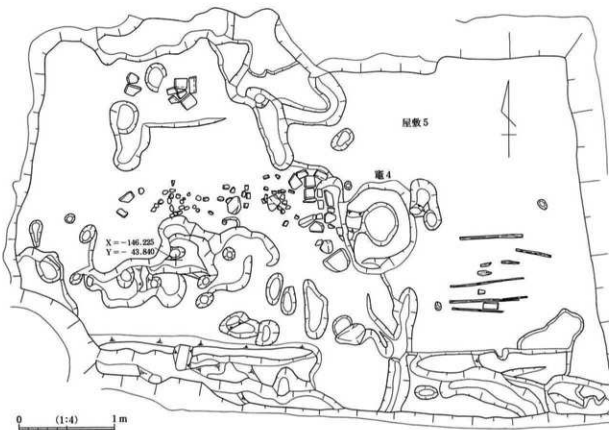


図261 1 A調査区 屋敷5平面図

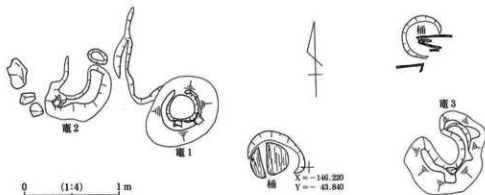


図262 1 A調査区 竈1～3平面図

て土留めしている。遺物は備前甕・瓦・漆器碗・木製品などがある。建物3では石組遺構・土坑・ピットが検出されているが、礎石列などの建物を示すものは確認できなかった。石組遺構は建物3の北側中央に位置し、直径20cm前後の石を5個ほど円形に集積している。トレンチ東側では南北方向の短い溝86・87（969・970）と土坑・ピットが検出された。

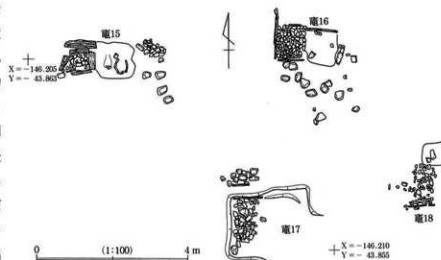


図263 3 A調査区 電15～18平面図

3 A土坑305（1044） 3 A調査区の東端に位置する。東西1.7m・南北約0.7mの長方形で北・西側からそれぞれ電36・37（1096・1097）を検出した。

3 A土坑306（1045） 3 A調査区の東端に位置する。直径約1.0m・深さ約0.6mの円形で、土師器皿が出土した。

3 B調査区

7層除去後の状況としては、南側の11層を除いて全体的に8 a層の堆積がみられた。8 a層上面の遺構としては、東西の溝3条・南北の溝6条・電7基・土坑58～61・井戸4基・囲炉裏2基・ピット列・礎石列などがある。

3 B溝15（1143）は9トレンチ南側で東西にのびており、長さ約25m・幅約0.6mである。南側11層の高まりとの境に掘られたもので、そこからの雨水が流れ込まないように作られたものにあたる。また調査区北西部分の中央にある溝15は長さが東西約11.2mあり、南北の溝に交わる。南北の溝15は調査区のほぼ中央を長さ約18mにわたって検出された。

8 a層上面の遺構は直交するこれら3本の溝によって大きく区画されている。南北の溝15の西側はさらに細い溝によって区画され、その中であってとくに北西部分では礎石列らしきもの

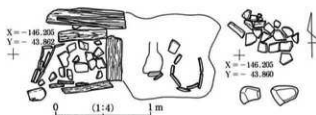


図264 3 A調査区 電15平面図

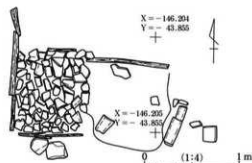


図265 3 A調査区 電16平面図

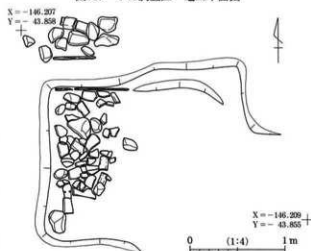


図266 3 A調査区 電17平面図

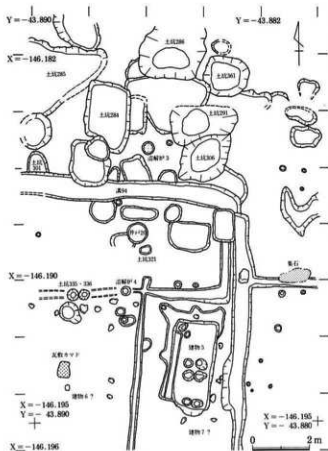


図267 3 A 調査区 鋳造関連遺構群配置図

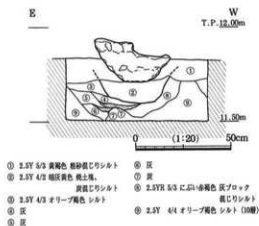


図268 3 A 調査区 溶解炉 3 断面図

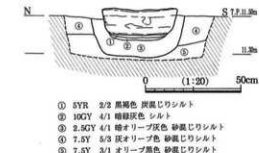


図269 3 A 調査区 溶解炉 4 断面図

がまとめて検出された。礎石の直径は15~20 cmが多く、移動しているためか、建物の復原は困難である。礎石建物の東側では東西に並ぶピット列が検出されたが、これに対応するピットが検出できなかったため、建物の規模の推定は困難である。南西部分についても同じような様相を呈している。

これに対して調査区の東部分は土坑や井戸の規模も大きく、竈・囲炉裏もみられる。また東側突出部では低い土塁状の高まりを検出した。その結果おそらく溝15と土塁までの範囲が屋敷の単位ではなかったかと思われる。また南側の崖沿いに3基の土坑が検出され、このうち東側の土坑61から備前焼の大甕が出土している。これらは直径が2 m以上と規模が大きく、この屋敷地の廃棄土坑と考えられる。

8 a 層除去後の状況としては、調査区の南西部分で厚さ約0.1mの粘土ブロックの堆積があり、それ以外はほぼ均一な8 b層が露出している。8 a 層上面では南北には溝15しか存続して

いなかったが、8 b 層上面の段階では溝14・20が存在していたことがわかった。この時期にはこれらの溝によってこの調査区が東西に大きく3つに区画され、その中に各遺構が存在することになる。

このうち溝20は溝15に隣接する形で幅約1.4 m・南北約10 mにわたって検出された。この溝の埋土上面では小石敷遺構が幅約0.5 m・南北約19 mにわたって検出されており、溝20は短い期間のうちに埋没し、その埋土上面は小石敷による道として利用されたことになる。しかし、これも8 a 層上面の段階までにはその機能を失っている。溝14はトレンチの東側に南北約19 mにわたって検出され、溝15・20との距離は約10.7 mである。

建物3は調査区の中央列西側に位置し、東西約2.6 m・南北約4 mの規模である。三方を幅約0.2 mの溝に囲まれているが、ピットなどは確認できなかった。建物4は調査区北東部に位置している。礎石の西側一部だけが残存しているものの、炭化物の検出状況から東西約1.7 m・南北約2.6 mの規模と推定される。

土坑83は建物4の南側に位置し、東西約1.7m・南北0.7mの長方形を呈する。南北の壁面には横板がみられる。

建物6は調査区北西部に位置し、東西約2.1m・南北約3.1mの礎石建物である。2×2間の建物と考えられるが、北側にのびる可能性もある。この建物の東側には平瓦を平坦に敷詰めた瓦敷1と竈2基があり、一連の屋敷遺構となる可能性が高い。またトレンチ中央部には南北の細い溝23に区画された中に土坑・ピット群、その外側にも土坑・小石敷遺構などがみられる。しかし、明確な建物の存在は確認できなかった。南北溝以外の溝は、各区画内の建物及び屋敷内部の施設であり、8a層上面に比べて建物の規模が大きく、整然と配置されている。

8c層では南北に走る溝を数条、東西に走る溝を4条、土坑、ピット、瓦敷き、竈2基などを検出した。溝34は幅80cm・深さ30cmの南北に流れる溝である。埋土中からは陶磁器、土師器、漆器、木材片、箸などが出土している。

また、西側壁の土留めのために長さ2.5m前後の焼けた1辺8~10cmの角材を数本使用している。

南端を東西に走る溝35からは材木片、箸、漆器、陶磁器などが出土している。土坑の大半は廃棄土坑であり、平面形は不定形なものが多い。埋土には腐植物や陶磁器片、箸、漆器片、木片が多く含まれている。中でも土坑94・97・108・110・111などが典型的なものである。土坑114は北側を板材で東側を角礫で囲ったものである。平面形は方形を呈する。性格は不明である。

土坑116は糞を使用した便所である。埋土には腐植物が見られ、瓦を非常に多く含んでいる。溝34北側部分に接して2基の竈が存在する。それぞれ30~40cmの径を計る。

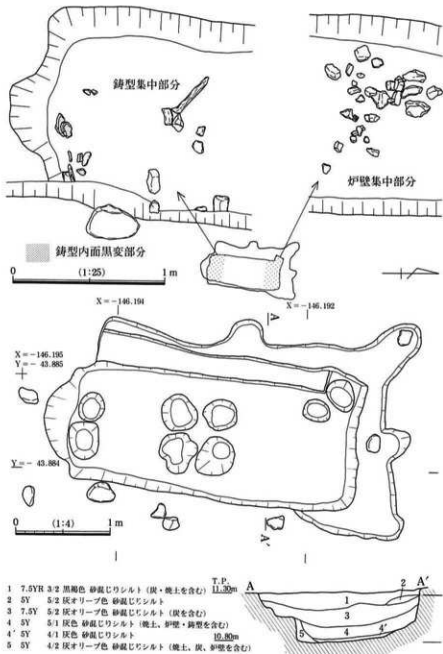
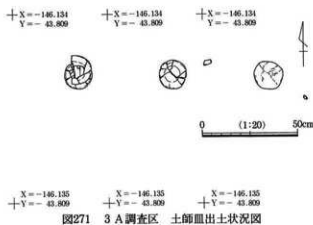


図270 3A調査区 建物5平面・断面図、鑄型・炉壁



西側に向かって開口している。

8 d 層では、土坑、南北に走る溝が 8 条、東西に走る溝が 9 条、瓦敷き、井戸がある。溝は細く短いものが多い。土坑には大きな不定形のものがある。廃棄土坑とおもわれ、埋土には多くの腐植物、材木片、サザエなどの貝類などが含まれている。土坑 117・140・141・150 などが典型である。また、トレンチ中央北側で検出された土坑には灰が相当量含まれていた。

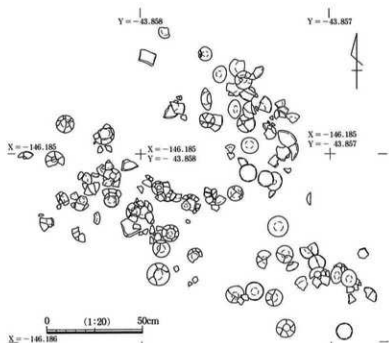


図272 3 A 調査区 土坑310周辺土師器皿出土状況図

南側で東西に走る溝は 11 層 (地山) との傾斜変換点に作られている。この溝はトレンチ東側で南北に走る溝 46 に接続する。トレンチ中央部や東寄りでは 2 箇所「目」の字状になった溝が検出された。溝 44・45・46 が相当する。東西・南北の各溝は幅 40 cm 前後で、深さは 10~15 cm ほどである。溝 44・45 に挟まれた東西方向の溝は長さ 2 m である。一方、溝 46 に付属する東西方向の溝は長さ 2.2~2.5 m を測る。

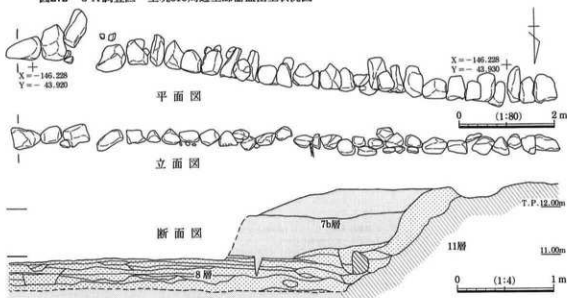


図273 3 B 調査区 石列平面・断面図

B、遺物

現在、明確に豊臣大坂城築造以降で三の丸築造以前の時期として認められうる遺物は、大半が三の丸築造に依ると推定できる造成盛土が確認され、その下から検出された一群に限られる。出土した位置は、いずれも1 A調査区の北半部から3 A調査区の全域および5 B調査区の南半部にかけて確認された谷地区である。これまで述べてきたように、この盛土は、さきの谷地形を埋める形で覆っている。この盛土がおこなわれる以前、大坂城をめぐる町並みは、あくまで自然地形にしたがって形成されており、一方この盛土がおこなわれた以後は、自然地形を無視した、あくまで人為的な規範によった都市計画が、この地区では進められている。この盛土工事には、それ以前にはみられなかったそのような都市計画者からの意図が込められているのであって、その点で、大坂城下町遺跡でのここ以外の調査地点で見つかっている、いわゆる三の丸築造によると推定されている盛土と違った意味をみせている。

そして、この盛土のおこなわれた年代であるが、そのような大規模な町割り変更を伴った造成は当然限られてくるのが想定され、文献史料を照らし合わせるならば、その候補は文禄3年(1594)からおそらく4年(1595)にかけておこなわれたとされる惣構築造、あるいは慶長3年(1598)におこなわれた三の丸築造があげられることになる。厳密に言えば現時点でこれらの大規模造成のどちらがこの谷を埋めた工事にあたるのかを決定する考古資料は準備されていない。最も直截な方法により考古学でこの点を決定付ける要件は、これまで三の丸築造によるとされている盛土を除去した面に、慶長元年(1596)以降の資料が存在しないという証明であるが、おそらくその条件をみたすことは永遠に不可能であろう。現在は、文献史料に描かれたその工事の表現を、どちらかと言えば三の丸築造に近いものと解釈している段階にすぎないのである。

おそらく平城京のような古代宮都を除いてこれまでにない、自然地形を克服するといった大きな都市景観の変更が、惣構段階でおこなわれたのか、三の丸築造段階でおこなわれたのかは、ひとり大坂城下町だけの問題ではすまされない大きなテーマに関わっている。今後はこれまで以上に慎重な検討が必要である。

とは言え今回の調査では、6 A調査区の南西隅から大坂夏の陣以前で豊臣大坂城築造以降に発生していた地震の痕跡が、その後生じた地層のズレにより確認され、記録よりその地震が慶長・伏見の大地震(1596年)にあっている可能性の強いことが、考察編の寒川旭氏の論考によって明らかにされた。そして、3 A調査区からは7層にあたる厚さ1.5m以上の盛土を除去した最初の面から、短期間の使用としか考えにくい簡易な屋地群と、さらにその下層から倒壊したと思われる大量の瓦と礎石建物が見つかった。

これらの点は、前半が惣構築造以降に上町台地の一部にダメージを与えるほどの地震があったことを示すものであるが、それを前提として後半をみれば、7層の盛土の下で見つかった大形の礎石建物とそれを覆っていた大量の瓦は、慶長・伏見の大地震をその原因の一端としており、短期間しか使われていない簡易な住宅群は、その後の復興に伴うものという解釈が成り立つ可能性がでてくるのである。そうであるならば、3 A調査区で確認されたこの盛土は、慶長・伏見の大地震以後におこなわれたことになり、少なくとも惣構工事によるものではないという評価をあたえることができることになる。

そこで本稿ではこの観点にたち、とくに1 A調査区の北半部から3 A調査区の全域および5 B調査区の南半部にかけて確認された盛土の下から検出された遺構と遺物について、その下限を1598年におくこ

とにしている。したがって、それ以外の出土状況による遺物については、かならずしもその規定が保証されたものではない場合がある。ご了承いただきたい。

また漆器碗については別に詳しい観察表を取録している。

a、漆器・土器・陶磁器

① 2 D 井戸 1

遺物の構成は、土器（土師器皿・瓦器火鉢・瓦器鉢・土師器羽釜）、陶磁器（瀬戸美濃窯・備前窯・中国製染め付け・青磁・白磁）、木器（漆器碗・箸・桶または曲物・栓・蓋・柳2点・脚状の漆塗り加工材・下駄・将棋駒・燈明台・加工材）、瓦などである。

1は漆器碗である。全面に黒色漆が施され、内底面に赤色で紋様が描かれている。

4・5・6・9は中国製磁器である。

4は体部内面に型押しした紋様が施された染め付けである。6は五彩の皿である。全面に釉が施され、外面の底部際には砂粒が付着する。他に「玉堂佳器」紋様の皿もみられる。9は輪花の青磁皿である。白色の高台内面を除き、比較的厚く薄い灰緑色の釉が施されている。他に菊花状に内面を彫った青磁皿、白磁端反皿もみられる。

7・8・10は瀬戸美濃窯製品である。7の外面は被熱により煤が付着している。8の露胎部には薄い鉄化粧が施される。10は黄瀬戸菊皿である。底部内面は釉がかきとられており、外面は全面施釉で輪トチンの痕跡が残る。ほかに灰釉丸皿の底部・小杯もみられる。

12・13は土師器皿である。底部際が薄く体部中位が厚いために断面が紡錘形を呈するものである。内面の底部周縁にみられる横ナデは、凹線状の整形に至っておらず、口縁端部のつまみあげは弱いものとなっている。体部の一部に煤が付着する。ほかにへそ皿も出土している。

11・14は備前窯製品と考える。14の調整は極めて丁寧であり、器面の凹凸はほとんどみられない。

なお箸は総延長で23928cm出土し、25cm平均として958本となる。

② 2 D 井戸 4

遺物の構成は、土器（土師器皿・盤・瓦質火鉢）、陶磁器（瀬戸美濃窯・備前窯・丹波窯・中国製染め付け）、木器（漆器碗・下駄・箸・栓・桶または曲物・刀子柄・しゃもじ2点・加工材）、金属器（包丁・鎌状製品・円盤の一部）瓦、獣骨・魚骨類である。

15は漆器碗である。内外面ともに赤色漆が施されている。

17～21・23～25は瀬戸・美濃窯製品であり、このうち19～21・23～25鉄釉および鉛釉で17・18は灰釉製品である。20の露胎部には薄い鉄化粧がみられる。口縁端部内面には平坦面が形成され、体部上半の屈曲は比較的明瞭である。17は灰釉丸皿、18は灰釉内はげ皿である。前者は全面施釉であり、後者は内底面が露胎である。

22は中国製染め付けである。口縁端部は小さな玉縁状に成型され、体部上半の内面に紋様が描かれる。ほかに輪花の製品もみられる。

26は丹波窯掘り鉢である。丸く仕上げられた口縁部の端部に沈線を有する。備前窯製品は甕と掘り鉢が出土している。

28～31は土師器皿である。このうち28・29はいわゆるへそ皿と称されるもので、30の口縁部には煤が

付着している。31は内面の底部周縁に横ナデによる凹線状の調整を施す。口縁端部にはつまみあげはみられない。

なお箸は総延長で8308cmとなり、25cm平均で333本となる。

③ 3 A 溝39 (45~59)

43・44は漆器である。43は内面が赤色漆で外面には金箔が貼られ、底部を持たない器形である。組み合わせ式の台であろうか。

57は丹波窯播鉢、55・56・58・59は備前窯播鉢である。

45は瀬戸・美濃窯鉄釉稜皿である。全面に褐色釉が施され、底部内面の3カ所にトチン痕、外面に輪ドチン痕が残る。

46は透明度の高い黒色釉の瀬戸・美濃窯天目茶碗であり、口縁部は褐色釉がみえる。なお底部際には薄い錆が施される。47は器面の荒れた暗褐色釉の瀬戸・美濃窯天目茶碗である。

48は瀬戸・美濃窯灰釉丸皿である。底部外面に輪ドチン痕が残り、ガラス質の釉が底部内外面に溜まる。

50は明るい褐色釉の瀬戸・美濃窯天目茶碗であり、体部下半に厚い釉が溜まる。52は褐色釉の瀬戸・美濃窯折縁皿である。外面の底部際は釉が薄く、褐色の錆釉の施された器壁がみえる。内面には黒色の斑をもつ。薄く低い輪高台を有する。

④ 3 A 溝37 (61~63)

61・62は漆器である。内外面赤色漆で、62には外面に動物と草花を組み合わせた吉祥文様をもつ。

63は瀬戸・美濃窯灰釉折縁皿である。底部内面は露胎で外面に輪ドチン痕が残る。

⑤ 3 A 溝67 (64~67)

64は瀬戸・美濃窯灰釉丸皿、65は底部際に錆を施した瀬戸・美濃窯褐色釉天目茶碗、66は瀬戸・美濃窯灰釉丸碗である。

⑥ 3 A 溝90

漆器は皿と椀に分けられる。皿の92・93は共に赤色漆を内外面に施したもので、特に93の色調は朱を呈する。無文である。94・95は低器高の椀、96~98は高器高の椀と考えられる。95は内外面赤色漆、97は内外面黒色漆で、それ以外は外面が黒色、内面が赤色漆である。なおいずれも破片資料であるが、96と97の外面には草花文の装飾が確認された。

100は内面に丸ノミ状工具による刻文(ソギ)のみられる瀬戸・美濃窯灰釉折縁皿であり、100の口縁部は鈍く底部内外面に輪ドチン痕を残す。

101は瀬戸・美濃窯大窯期の灰釉丸皿であるが被熱により釉は灰白色に変色している。

102は灰釉で内面に丸ノミ状工具による刻文(ソギ)の入った瀬戸・美濃窯折縁印花皿である。

103は瀬戸・美濃窯灰釉丸皿である。釉はガラス質を呈し、貫入をもって底部に溜まる。

104は瀬戸・美濃窯灰釉折縁皿、105は瀬戸・美濃窯灰釉内禿皿、106は瀬戸・美濃窯鉄釉(褐色釉)稜皿輪花である。底部内面にトチン、外面には輪ドチンと読解不明の線刻がみられる。

107・108・110は瀬戸・美濃窯灰釉丸皿である。110は底部外面の段をもち、全面施釉、107は全面施釉で底部外面に輪ドチン痕をもつ。108は底部外面の中心部が露胎である。

109は瀬戸・美濃窯鉄釉丸皿であり、全面施釉で底部内外面に輪ドチン痕を残す。貫入が目立つ。

111~114は瀬戸・美濃窯灰釉内禿皿であり、113は熱を受け、底部外面に輪ドチン痕を残す。

115~123・126~128・132・134は中国製染付磁器である。

115は口縁部内面に圏線、底部内面に2重圏線と花文を配す。釉調は鈍い。117は鮮明なコバルトで底部内面に鱗状の文様を描く。高台端部には砂が付着する。118は鈍い釉調で体部内面に花文と口縁部内面に圏線を描く。119は底部内外面が露胎で薄いコバルトの圏線をもつ。120は体部内面上半に斜格子文、底部には圏線を配す。また高台際に釉の溜まりがみられる。121は高台内が露胎で、底部内面は輪状のかきとりと外面に逆「V」字の連続文がみられる。122は底部内面に「長命富貴」と圏線、外面に「大明年造」と2重の圏線を描く。

126は内面に2重圏線と花文、高台内に鉋ケズリの痕跡がみられる。127は鮮明なコバルトで底部内面に花文と2重圏線、底部外面に方角の文字文を記す。128は底部がやや盛り上がり底部内面と体部外面に、鮮明なコバルトで玉取獅子が描かれる。

132は底部内面に圏線、外面に大柄の花文が描かれる。高台内は露胎でコバルトは鈍く、内面には炭素が付着している。

129は備前窯盤である。体部外面下半は丁寧なケズリで仕上げられ、内側へ折り曲げられた口縁部をもつ。

138～142・144～146・147・148・151～154・156・157・160・161は瀬戸・美濃窯天目碗である。138は黒色釉、140は褐色釉、141は黒色釉で口縁部のみ褐色を呈する。142・144・151・153・157は褐色釉、146・156は黒色釉で体部下半の露胎部には錆を施している。154は褐色釉で体部下半の露胎部には錆を施している。また145は暗い褐色の釉で内面全体に漆がこびり付き筥先で掻きとった痕跡がみえる。148は透明度の高い黒色釉、139は褐色釉で161は透明度のある褐色釉である。160・148は黒色釉であり148はとくにその透明度が高い。

149・150は共に褐色釉で体部下半に錆釉を施した瀬戸・美濃窯小天目碗である。

155・159は瀬戸・美濃窯灰軸丸碗であり、155は内面の貫入がめだつ。158は瀬戸・美濃窯黄天目碗である。163は瀬戸・美濃窯鉄（黒色）釉丸碗である。

166・169・172・171・168・170は備前窯搦鉢である。いずれも断面板状の口縁部をもち、その内端部には、凹線による段が、外面には沈線または幅の狭い凹線が数条巡る。口縁部の外縁下端の形状により、171のように体部からそのまま「L」形に成形されるもの、169・168・166のように体部と口縁部の境に平坦面をもつものとその中間の形態（170）そして、172にみられるような下端部の発達したものに分けられる。

173・174は大和で生産された瓦器搦鉢、175は京都でみられる瓦器搦鉢、189は瓦器香炉である。175の類例は京都の烏丸線内遺跡№15濠1や内膳町遺跡のSD164などでみられ、丸みを帯びて仕上げられた口縁部と内面に施された磨きを特徴とする。

181は瀬戸・美濃窯大窯第3段階または第4段階の鉄軸徳利である。黒色と褐色の釉が重複している。

185・162は瀬戸・美濃窯黄瀬戸丸碗である。

187は筒型の備前窯容器である。内外面に轆轤による凹凸が残る。

183は備前窯徳利の底部、184は備前窯小壺の上半である。

188・190～201は土師器皿であり、191・200を除きこの時期に京都で出土する同器種と形態が類似する。197は底部を上押し上げたいわゆる「ヘソ皿」に類似するが、同時期の京都での出土は知られていない。188は丸底で内觸気味の体部と、尖らせて口縁端部内側につまみ上げによる凹線を巡らせた形態をもつ。京都では16世紀第3四半期に比定される山科本願寺石室内資料より出現する。

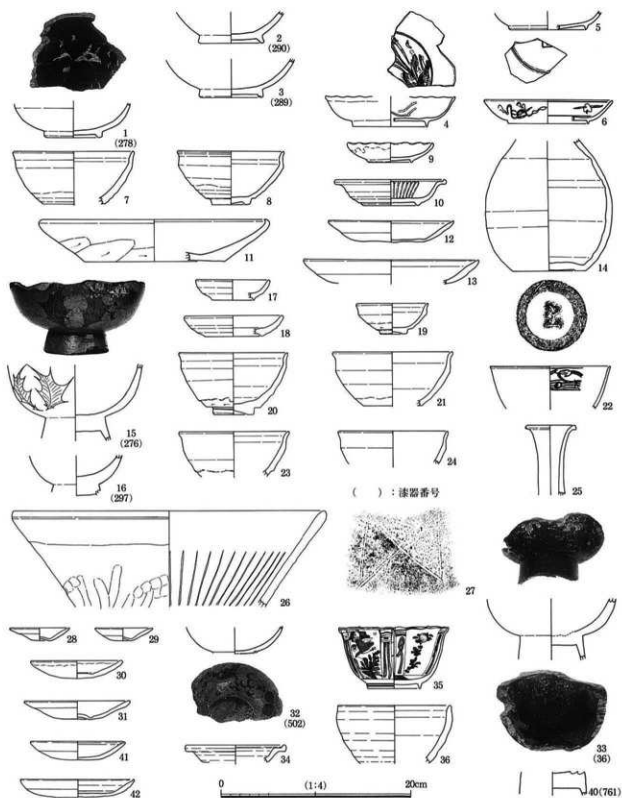


図274 漆器・陶磁器・土器 1

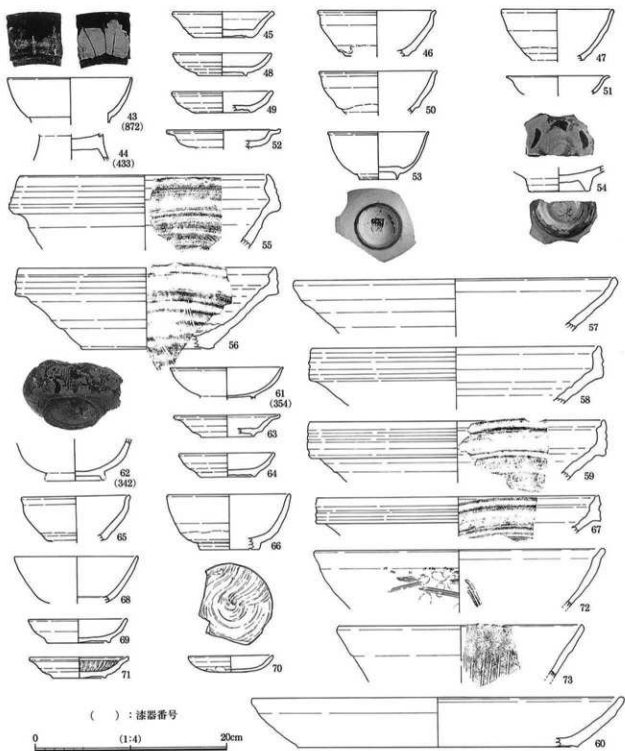


图275 漆器·陶磁器·土器2

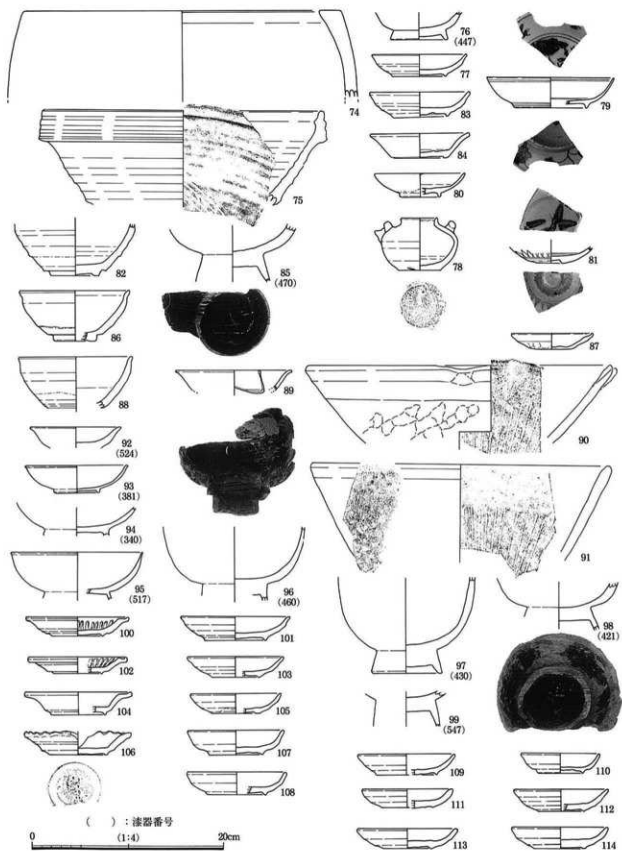


图276 漆器・陶磁器・土器 3

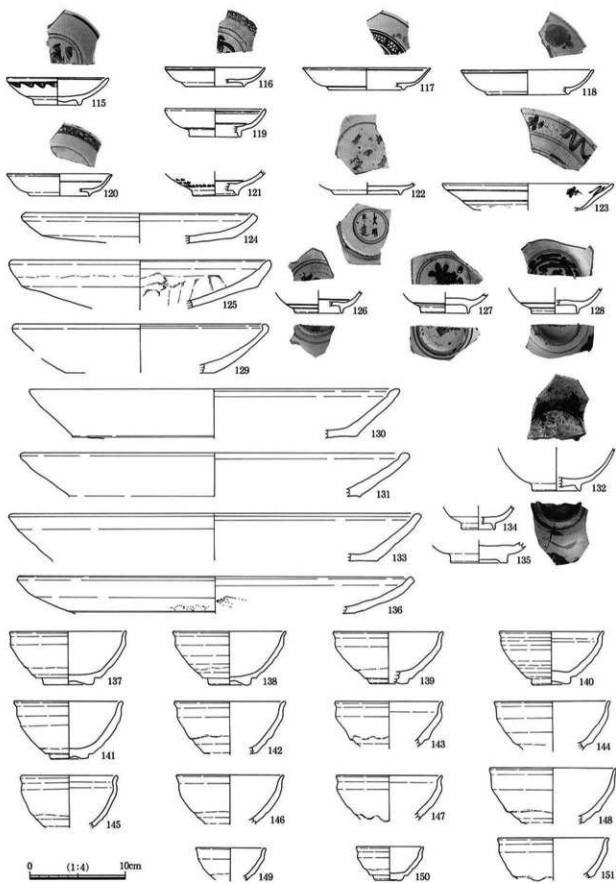


图277 漆器·陶磁器·土器 4

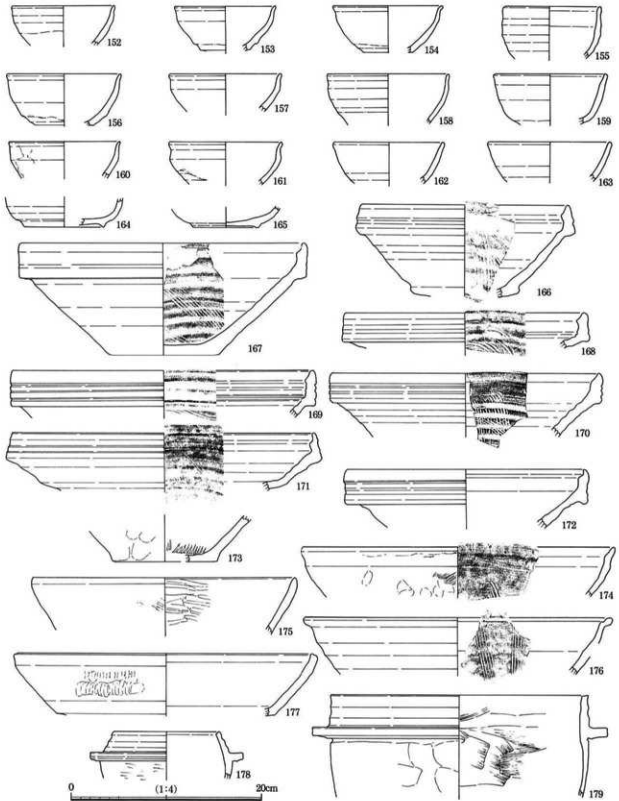


図278 漆器・陶磁器・土器 5

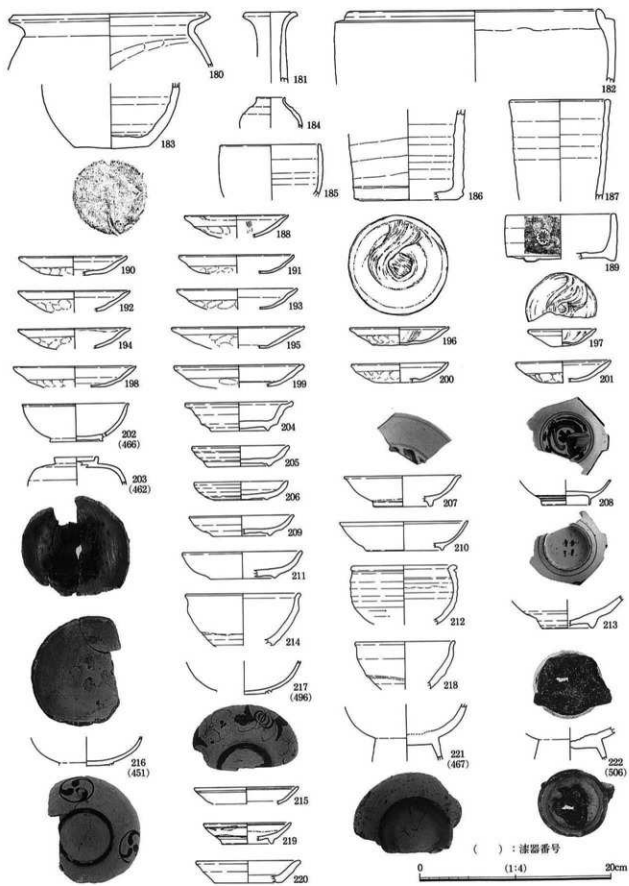


图279 漆器·陶磁器·土器6

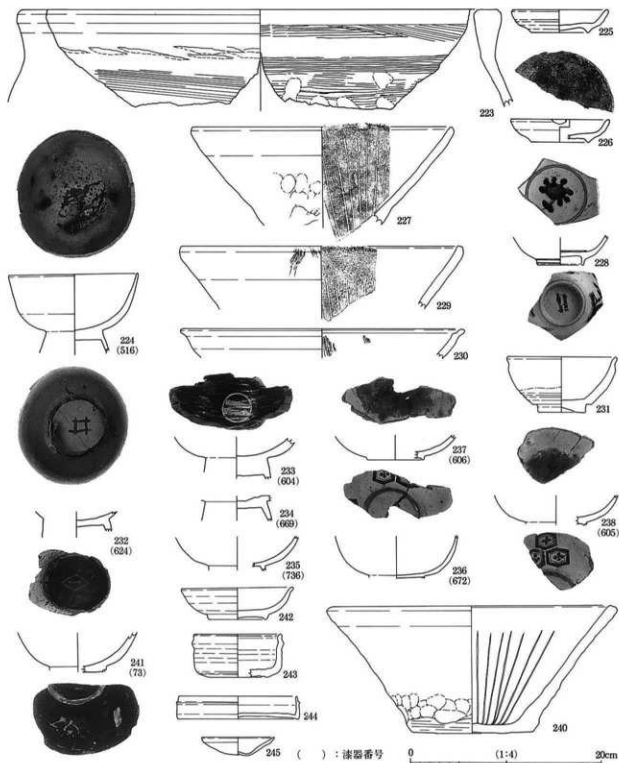


図280 漆器・陶磁器・土器 7

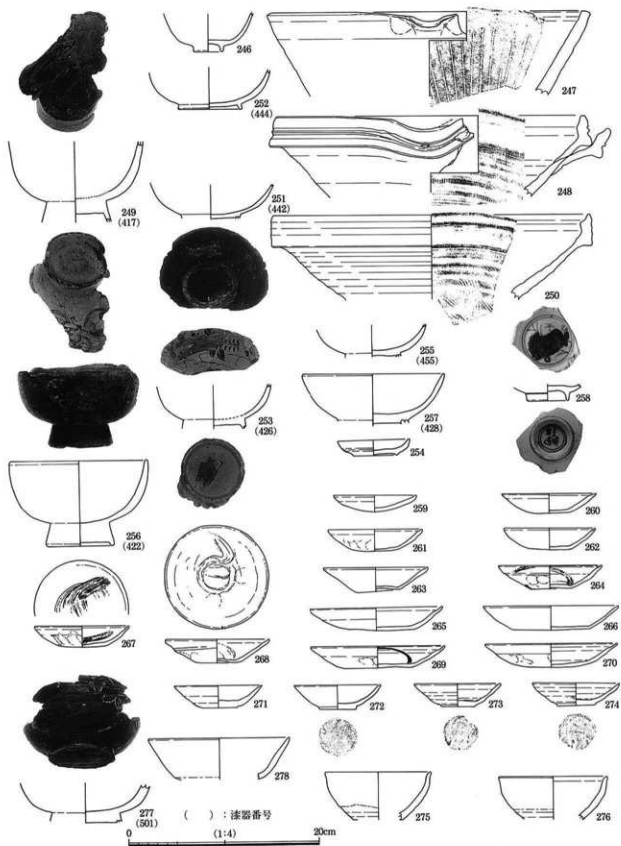


图281 漆器·陶磁器·土器 8

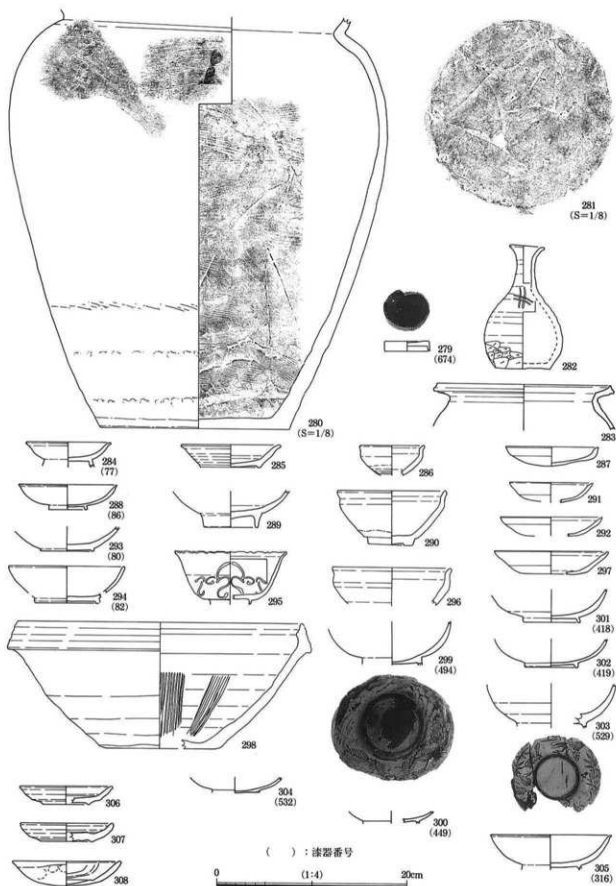


图282 漆器・陶磁器・土器 9

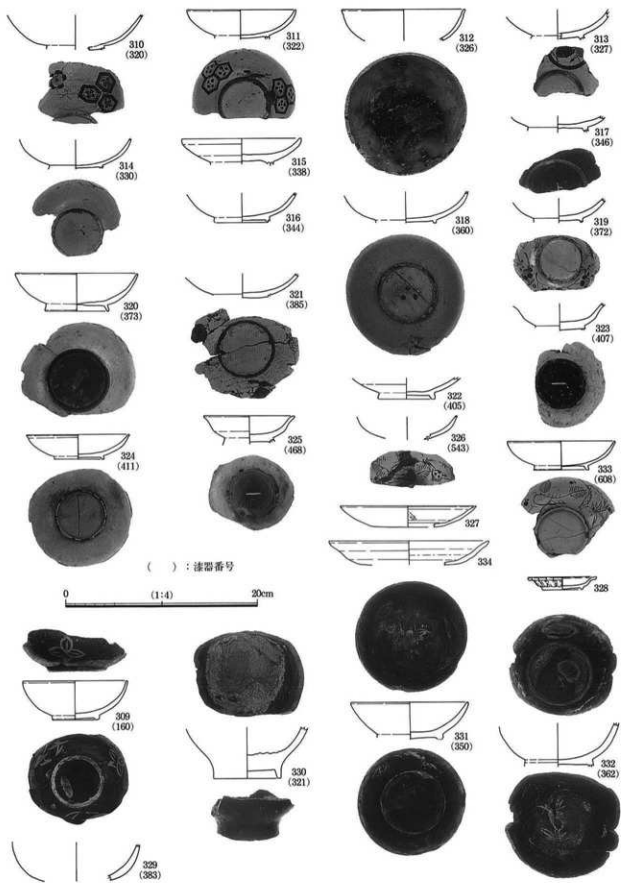


图283 漆器·陶磁器·土器（包含层）10

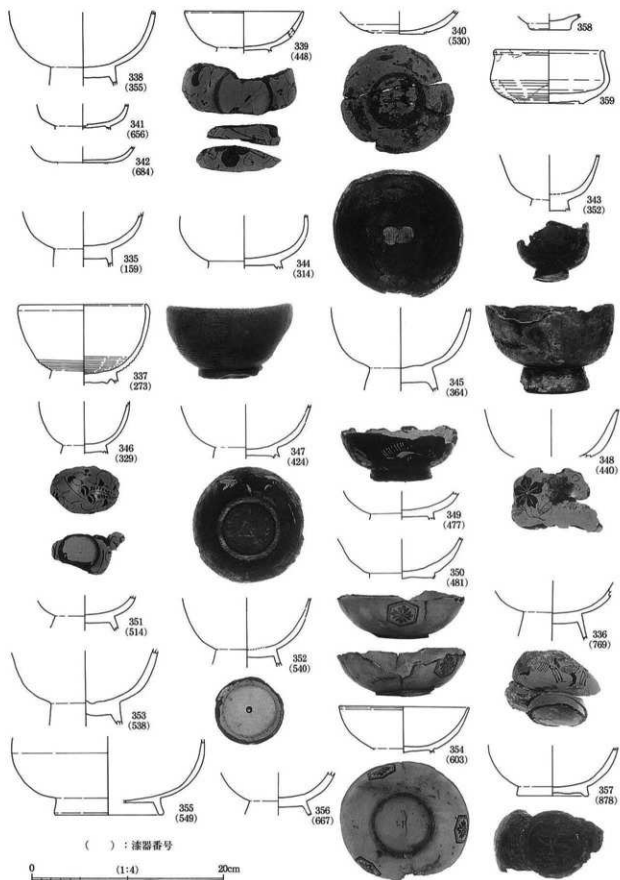


图284 漆器・陶磁器・土器（包含層）11

なお、京都では体部上半が外反気味に成形されるのを一般的なものとしており、その点で内彎形態をとり底径の広い191と200は大坂で製作されたスタイルと言えよう。

178は土師質に焼成された小形釜である。その形態的特徴は和泉を中心として、出現が13世紀後葉に遡る瓦器釜の後裔に類似するが、法量は著しく異なる。

180は大和で生産された土師器釜である。124・125は土師質焼成の壺または蓋である。胎土は178に似た砂粒の多い粗いもので、内面に煤の付着するものもみられる。外面は口縁部がナデ、底部が不調整であり、内面はナデにより、一部に刷毛状調整痕のみられるものもある。

177は丹波窯の盤、176と186は信楽窯のそれぞれ播鉢と水指と考える。

3 A 土坑310周辺

遺物は土師器皿・陶器碗・埴塼が出土している。

259・260・262・263・265・266・271・272は土師器の皿である。形態としては全て大きく開く皿形を呈し、器壁はかなり薄手である。

262・259・265・266・260・263の成形は手づくねによる。胎土は精緻である。262・260・263は口径13～14.4cmであり、口縁内面に指当てによる沈線を施している。259の口径は11.6cmで口縁は直立気味に丸く仕上げられており、丸底である。265・266は口径19cmの大型の土師器皿である。265は口縁内面に浅い指当ての痕跡がある。266は直線的に外に開き、端部を丸く仕上げている。

271・272はロクロの成形によるもので、底部に糸切り痕のある高台がつく。胎土は粗く、石英を多く含む。271は口径12.4cmで、ほぼ直線的に外に開いている。高台は低く体部との区別が不明瞭で、器壁が比較的厚い。272は口径12.4cmで、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁はやや外反気味に外に開いている。

278は瀬戸・美濃窯の丸碗である。口径は約13cmでロクロによる成形である。内外面に灰釉または黄瀬戸釉を施しているが、被熱のために詳細は不明である。

⑦ 5 A 土器溜まり

一括に廃棄された状態で、土師器皿が200点以上出土した。これらは、豊臣期の生活面および包含層中で最下位に位置するため、三の丸築造以前で、大坂城の城下町造営に際し最も初期に近い段階に比定できるものである（377を除く）。

分類は、法量と成形、調整、胎土、焼成、色調によりおこなった。成形は、377以外はすべて手捏ね

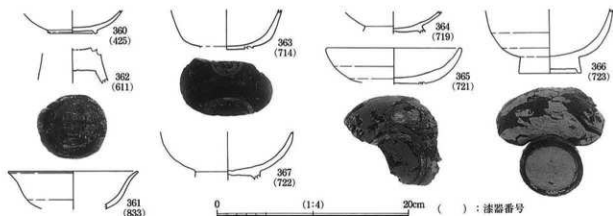


図285 漆器・陶磁器・土器（包含層）12

による。調整はいずれも共通で、口縁部をヨコナデ、体部外面下部にユビオサエ、底部内面には一方ナデを施す。また、内面の底部と体部の境には、ヨコナデによる凹線がめぐる。

次に法量と形態に注目し分類をおこなうと、法量は、6.4cm～10.7cmの小形器（Ⅰ群）、11.8cm～13.8cmの中形器（Ⅱ群）、15.0cm～16.6cmの大形器（Ⅲ群）の3つに分けられる。一方形態は、底部、体部、口縁部の特徴を手がかりとして、体部が内彎するもの（A類）と、外反するもの（B類）に分けられ、口縁部はつまみあげの程度により、明確なもの（a）、弱いもの（b）、ほとんどみられないもの（c）に分けられる。底部は平底と丸底に分けられる。なおB類はすべて平底であり、Ⅱ・Ⅲ群はB類のみである。以下法量を最初の基準として分類をおこなう。

Ⅰ群（368～395）

A・B類から構成される。B類はいずれも胎土がやや粗く、1mm以下の砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色を呈す。

①A-a類（368・374・380・369・375）底部形態により、平底のもの（368・374・380）と丸底のもの（369・375）に分けられる。胎土は、密である。色調は前者が明黄褐色、後者が浅黄橙色を呈す。374は口縁部に煤が付着している。369は内面全体に黒灰色と赤褐色の付着物が見られる。

②A-b類（381・370・376・382・371・377）377以外は他はすべて平底である。胎土は376・377がやや粗く、3mm以下の砂粒を多く含むが、他はすべて密である。色調は381・370・376・382・371が浅黄橙色、377が黄褐色を呈す。370は口縁部が指圧され、注口部がつくられている。376は口縁部のヨコナデが特に強い。376は内・外面全体に、382は底部内外面に赤褐色の付着物が見られる。

③A-c類（383・372・378）胎土は密で、色調は乳白色を呈す。372は、内面全体が付着物により灰赤色を呈す。

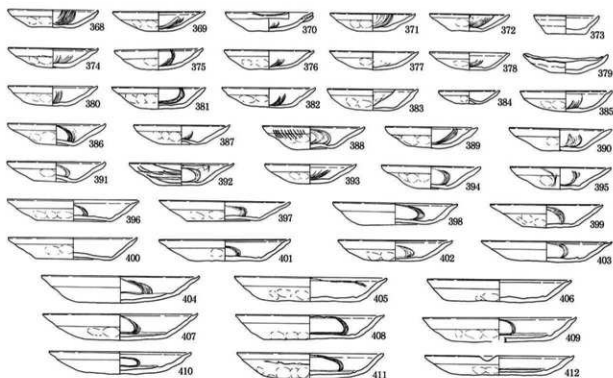


図286 漆器・陶磁器・土器（包含層）13

④B-a類 (386・391・387) 391の外全体には、赤褐色の付着物が見られる。

⑤B-b類 (392・388・393・389) 底部中央が指圧によって上方に盛り上がっている。392・388の体外外面には、成形後土器を据えたものの痕跡と思われる沈線が見られる。392・393は、内面全体に赤褐色、暗赤褐色の付着物が見られる。

⑥B-c類 (394・390・395) 390は内面全体、395は外面全体に赤褐色と茶褐色の付着物が見られる。

なお、これらの分類に当てはまらない資料が4点ある。384は、いわゆるヘソ皿である。底部から、斜め上方へ反気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。胎土は密である。色調は、灰白色を呈す。16は、底部糸切りの皿である。底部から、斜め上方へ反気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。胎土は緻密である。色調は明赤褐色を呈す。内面の口縁下部には沈線がめぐる。379・385は、丸い底部から斜め上方へ内彎気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。胎土は17が非常に緻密で、385は密である。色調は379が明赤褐色、385が黄褐色を呈す。

II群 (396~403)

いずれも胎土は密で、色調はB-a・b類が浅黄褐色、B-c類が明黄褐色を呈す。

①B-a類 (396・400・397) II群の中でもっとも器壁が薄い。400・397の底部内外面には黒斑が見られる。400は内外面全体、397は内面全体に赤褐色の付着物が見られる。

②B-a類 (401・398) 401は、内外面全体、398は外面全体に赤褐色の付着物が見られる。

③B-c類 (402・399・403) 399は、他に比べて口径に対する底径の比が小さく、I群のB類と同形態である。402・403は口縁部に煤が付着している。399は口縁部の粘土板の結合痕が確認できる。

III群 (404~412)

胎土はB-a・b類が密で、2mm以下の砂粒を含む。B-c類は非常に緻密である。色調は、いずれも浅黄褐色を呈す。

①B-a類 (404・407・410) III群の中でもっとも器壁が薄い。410は器高が低い。407は内面全体、404・410は内外面全体に赤褐色の付着物が見られる。

②B-b類 (405・408・411) 411は体部上半部と下半部の粘土板の結合痕が確認できる。

③B-c類 (406・409・412) 412は他のIII群に比べて器高が低い。口縁部の一端に欠損部がある。

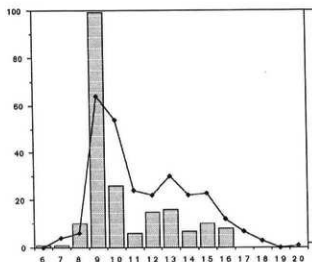


図287 5A調査区出土土器器口口径ヒストグラム



図288 木製品 1

409・412は、底部中央部に黒斑が見られ、内外面全体に赤褐色の付着物が見られる。

以上の分類をまとめると、平底で体部の外反するB類が中心となり、I群のみ内彎するものが見られた。またつまみあげの細分が各類で共通して見られ、これらは時期差、あるいは工人差を表すものと考えられるが、II・III群のB-a類に共通する器壁の薄さは、生産地の違いを表している可能性がある。しかしここで最も重要な点は、いずれも擦痕などの著しい使用痕は見られないが、赤褐色の付着物が多く見られることや煤が付着しているものなど、一時期に廃棄された土師器皿の使用法を知る大きな手がかりを得たことである。これらは、これまであまり進展していない土器・陶磁器の用途論的研究に対しても、基準になりうる新資料である。

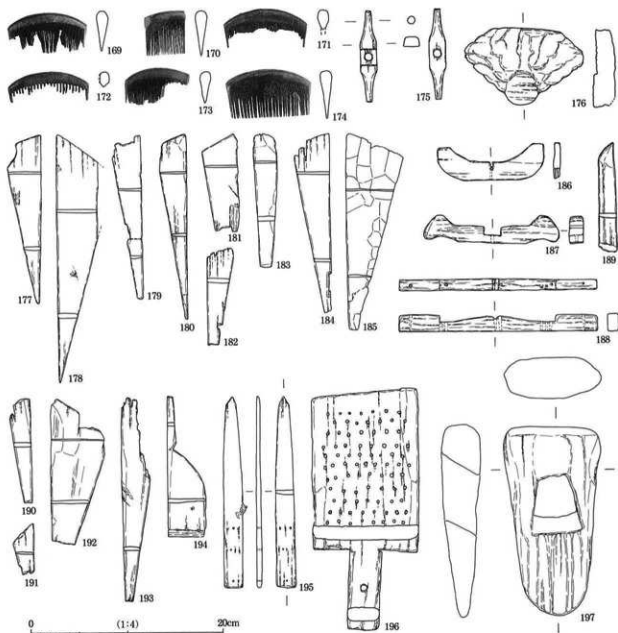


図289 木製品 2

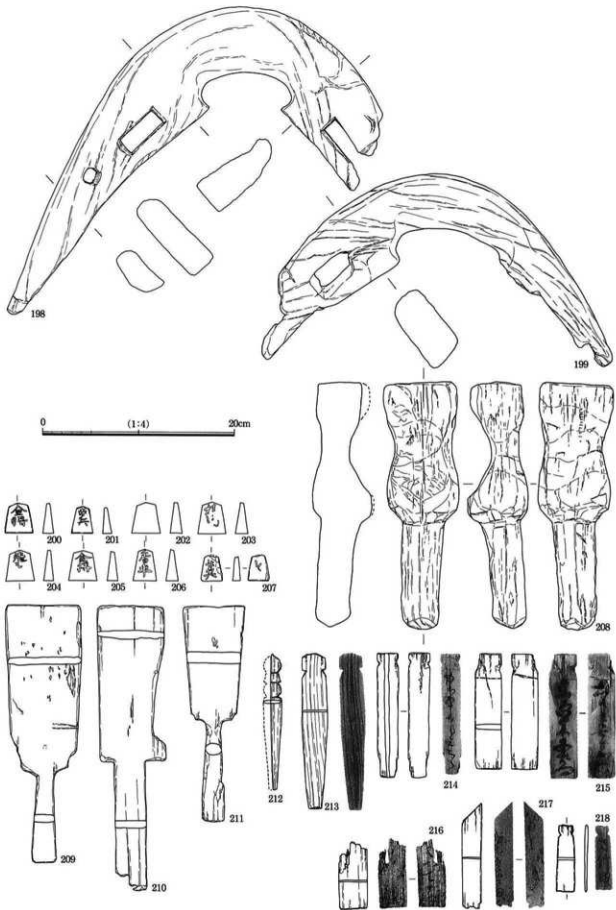


図290 木製品 3

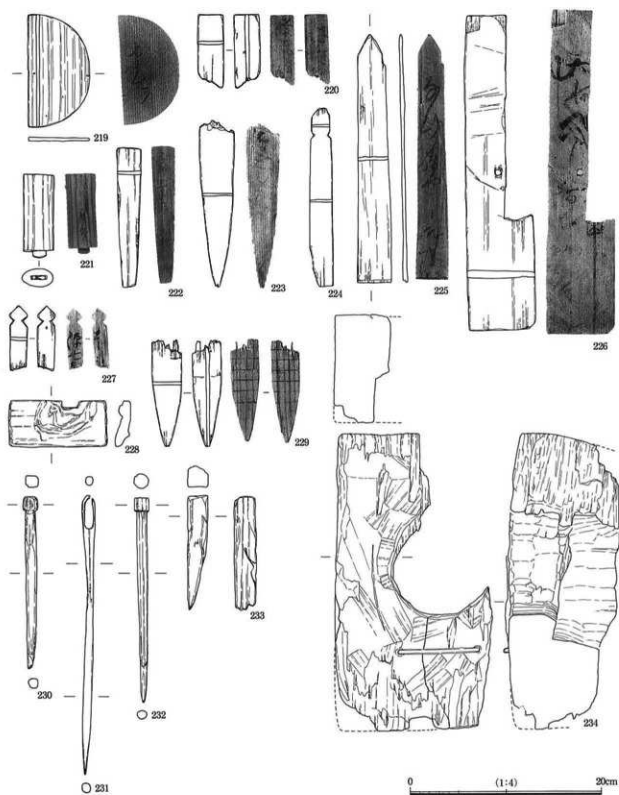


图291 木製品4

b、木製品

141は黒色漆の箸である。端部は共に漆が剝離している。

142～145・148～150・162・163は杓子および杓子状木製品である。

142と162は柄の断面形が半球を呈し楕円の身をもつ。142は柄の先端がやや幅を広げ両隅が面取りを受け、中央に孔をもつ。144は方形、145は円形、それ以外の身は隅丸長方形を呈する。また143は身の先端を削りだしてあり、篋の可能性があり、163は柄が細く、羽子板状を呈するが、先端部に磨耗がみられる。

使用痕跡は144では先端部が磨耗しており、145は先端部から側面上の2/3部分が磨耗し、148は先端部と側面の先端に近い一部に磨耗が著しくみられる。149・150・163は先端部のみである。

146は漆塗りの膳である。縁が赤色漆、それ以外の部分は黒色漆である。側面は凹線が彫られ、組み合わせのための釘孔がみえる。

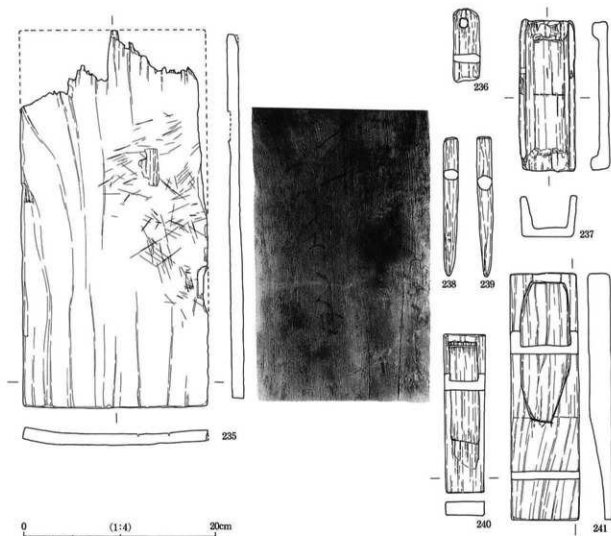


図292 木製品5

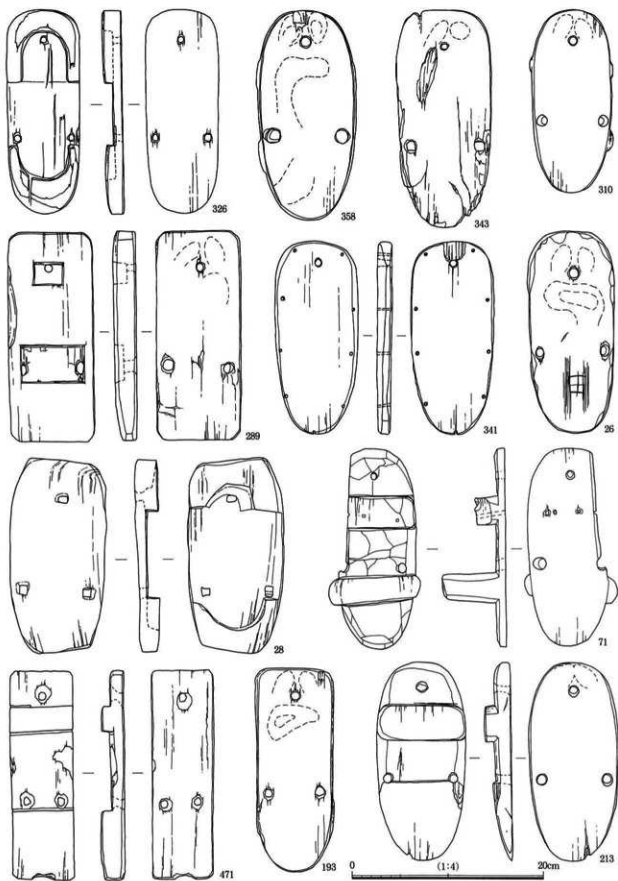


图293 下款 1

147は平面が変形の5角形を呈する。下端の側面と上面の4カ所に釘孔を配する。また上面に材が付着している。

151～156は篋状木製品である。ただしこのうち152は断面の形状から膳の脚の可能性があり、156は欠損部位の多い他製品の可能性もある。

157・158は柄、159～161は栓、164～168は蓋類である。このうち165には黒色漆が残り、168は全面漆塗りの組み合わせ式把手付蓋である。166の把手部分には釘が残っている。また167は把手の釘以外に、2枚の板を横につなぐための木釘が、側面で観察される。

175・176は不明の組み合わせ式木製品であり、176には花文に似た装飾が施される。186・187は組み合わせ式の灯明台、188は下面を除いて漆が塗られており、穿孔する孔がみられるところからも、蓋の把手と考えられる。

177～185・190～195は漆工具の篋および刷毛である。183を除く全てに漆が付着している。177・178・180・181・184・185・191～193は黒色、179・182・190は赤色の漆である。また184には漆に混じて木屑がみられる。194・195は1枚板を割り、刷毛先を挟み込んだもので、194は縦軸に対して半部が欠損している。195は固定用の小孔が3段に並ぶ。

196はブラシ状、197は鍼先状であり、198・199は鞍の一部と考える。断面は、外面が丸みを帯び、内面は角をもつ。共に彎曲する内側で楕円の削りこみをもち、それを挟んで対称する位置に長方形の孔とその後ろに円形の孔を配する。漆は施されていない。

200～207は将棋駒である。形は底辺の広い5角形で、断面形は駒先が薄く、駒尻が厚い。文字は「香車」以外は駒尻に余白をもち駒先に詰めてかかっている。文字は漆で書かれ、202のみ墨痕は残るが判読ができない。

208は碁状の木製品である。柄と身に分けられ、身はその中央が細く削り込まれ、その一部がとくに面をもって加工されている。またその部位に限って被熱により炭化した部分をもつ。

234は建築材または工具の一部と思われる。段をもちながら円形にくり抜かれた部分を中心にして、粗い削りで角柱をつくりだしている。円形部分のくり抜きも粗く、顕著な擦痕はみられなかった。なおこの円形部分より派生した亀裂を拡大させないために鋸が打たれている。

237・240・241は箱状の木製品である。このうち237は平面長方形のくり抜きをおこなっているが、

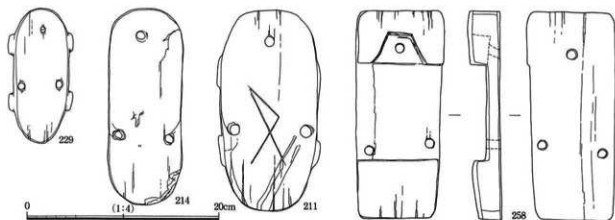


図294 下駄2

240は一方の辺が不整形におさまり、241は平面が舟形を呈し、さらにその位置も厚さが薄くなる部分で止まっている。いずれも顕著な使用痕は認められない。

262～266はこけら（柿）経である。以下『大坂城跡発掘調査概要』3より北川央氏（大阪城天守閣学芸員）の解説を転載する。

こけら（柿）経とは、木簡写経の別称があるように、頂部を圭頭状（山形）もしくは五輪塔状に刻んだ、通常、長さ25～30cm内外、幅1.5～3cm内外、厚さ1mm程度の木片に経文を墨書したものをいう。現存遺品や文献史料によって、既に平安末～鎌倉初頭頃には多様な写経形態の一つとしてこけら経の成立していたことが確かめられているが、以後中世を通じて盛んに行われ、江戸時代前半の元禄年間（1688～1704）頃まで存続したらしい。こけら経は、原則として20本1組を単位とし、手本とした版本に準拠してこけら1枚に1行17字づつ書写されたが、その成立期から室町前半頃までは、まずその表面に20行書写して、次にこれを翻して裏面に20行書写するという両面写経の形態をとった。それが1450年前後の室町後半頃からこけらの片面のみに写経する様式へと変化し、こけら自体も鉤に類する刃物によって削り割られた幅広で表面仕上げのなめらかな薄手のものへと変化を遂げた。

今回大坂城跡より出土したこけら経は、「知尔時轉輪聖王所將衆中八万億人見十」（264）、「六王子出家亦求出家王即聽許尔時彼佛」（262）、「受沙弥請過二万却已乃於四衆之中說是」（265）、「大乘経名妙法蓮花（教脱）（菩薩）法佛所護念説」（266）、「是経已十六沙弥為阿耨多羅三藐三（菩薩）」（263）という、『妙法蓮華経（法華経）』卷第三化城喻品中の連続する経文を書写したもので、五枚が重なっていたという出土状態はそれまで原状を留めていたゆえと判断される。266に1字、こけら経にはつきものの脱字が見られるほかは、いずれも原則どおりこけら1枚に1行17字づつ書写しており、

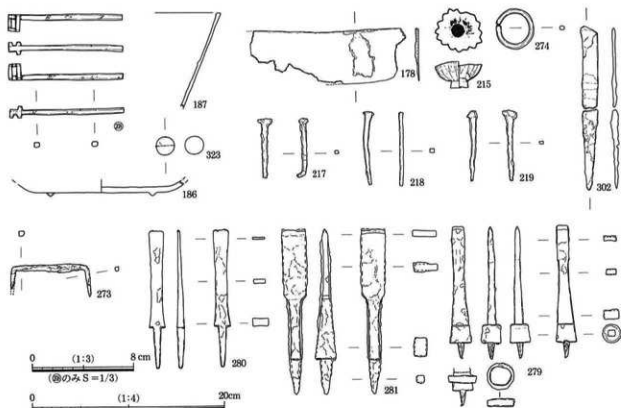


図295 金属製品 1

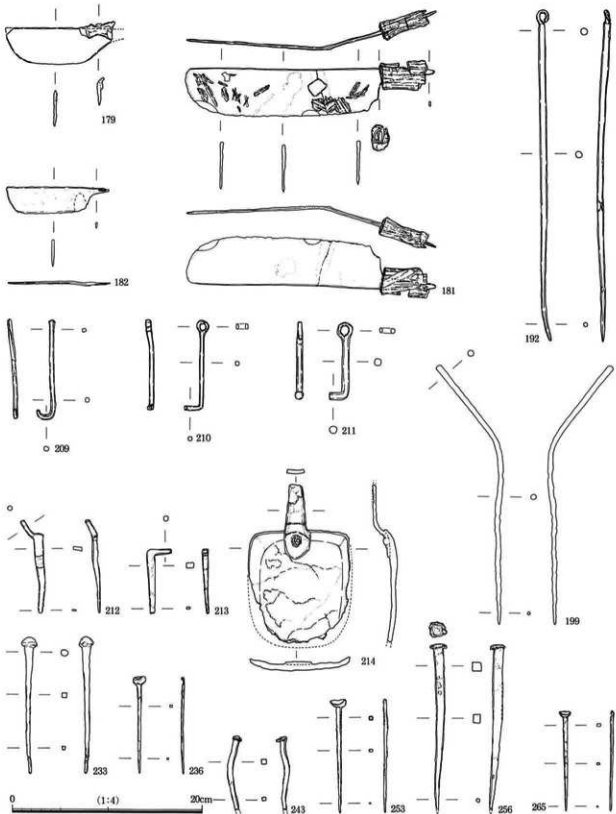


図296 金属製品 2

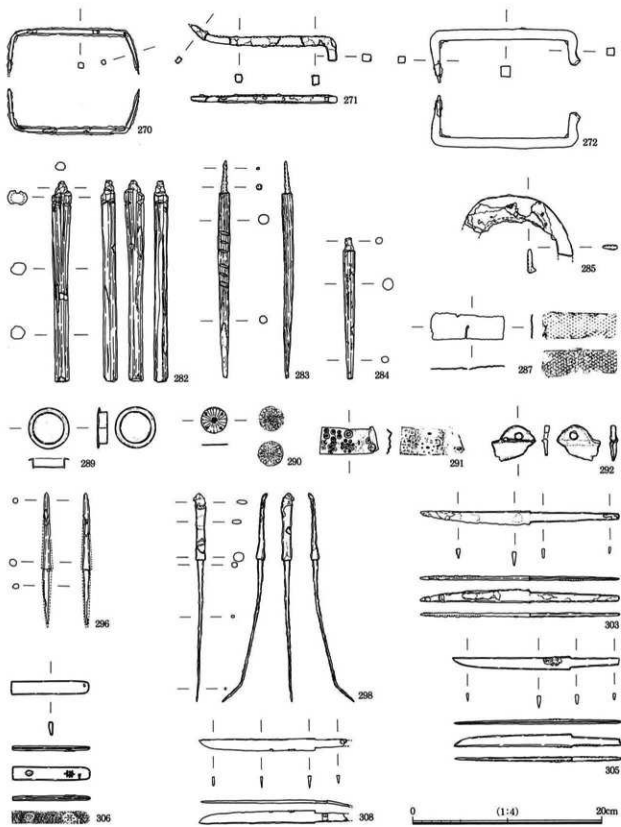


图297 金属製品 3

その片面写経の様式は、頂部を圭頭状に刻んだこけらが長さ47.9cm、幅4.75cm、厚さ0.5mm未満という幅広で薄手の形態をとることと相俟って、このこけら経が室町後半以降に書写されたものであろうことを示している。

c、金属製品

金属186・187・金属292は鉄鍋である。186は小さな足の付く底部である。187は口縁部から体部にかけての部位である。口縁から底部に向けて真直ぐ伸び、内面に1条の細い突線を巡らせる。292は吊り手を取り付ける耳の部分である。

金属215は銅製の菊花形容器である。非常に薄い作りになっている。紅皿であろう。

金属214は火熨斗である。一体成形ではなく、柄と皿を鋳留めしている。皿部は周囲の欠損が著しく、本来の形態ははっきりしない。柄は断面長方形の板状である。鋳は径0.7mm長さ0.6cm以上で、頭部は丸く作られる。

金属178・金属181は庖丁である。178は欠損が著しく刃先や茎の形状などは判然としない。181は刃先を丸く収めたもので、茎には木製の柄が遺存する。刃先から2/3の辺りで屈曲し、身部には木質や炭化合物が付着している。庖丁の茎は木製の柄に差し込まれ、柄の関側に三日月状の鉄製の留め具（楔か）を2枚円形に打ち込み固定している。

金属192・199は金箸である。192は円環状の頭部と断面正円形を呈する本体部からなる。本体部は先端に向けてやや先細りになり、先端部付近で屈曲している。頭部は本体部の頭部側約4cmほどを鍛打して細くし、それを曲げて作っている。199は断面正円形を呈し、頭部は細工せず丸く収めている。錆による剝落が著しい。

金属285は鉄製の鎌もしくは鉞である。茎と刃先を欠損する。全体的に酸化土砂の付着が著しく、形状は明瞭ではない。刃部は直線的ではなく内彎する。また、刃部と茎の境には鈍い関状の段が存在する。

金属179・182は筥状鉄製品である。179は先端及び茎を欠損し、錆が著しくかなり脆くなっている。182は茎に僅かに木質が遺存する。両者ともに刃部が明瞭でないことから筥状鉄製品としたが包丁の可能性も考えておきたい。

金属217～219・金属233・236・243・253・256・265は鉄製の釘である。217～219・243は断面正方形で、頭部を「L」の字状に曲げたものである。217と218には赤色顔料が付着している。236・253・265は先の釘に比べやや薄手であり、断面は長方形を呈する。頭部の形態も前者とは異なり、本体部の頭部側を径1cm程度の薄い円形に叩き延ばし頭部としたものと考えられる。これは253・265のように使用によって半円形に潰れたものや、236のように僅かに曲がった程度のものが存在することから窺えよう。長さは3寸強である。233は頭部を丸く収めた大型の釘である。頭部付近は断面円形に、それ以下は断面方形に作られている。先端は欠損するが長さは約5寸ある。256は非常に大型で重量感のある釘である。先端部を欠損するも遺存状況は極めて良好である。頭部は使用による打撃で潰れ四周に広がり垂れ下がる。長さは5寸強である。互留め用の釘であろうか。

金属273・金属270・271・272は鉞である。270・273は錆が著しくかなり脆くなっている。272は非常に大型の重量感のある鉞である。分析の結果から丁寧に鍛造されて製作されていることが判っている。一方の先端は曲がり、折れている。271は錆による表面の剝落が著しい。頭部はほぼ直角に曲がり、先

端部は頭部と逆方向に緩やかに彎曲する。釘もしくは鍔の類と思われる。

金属210・211は建築部材の煽止めである。「L」の字状に屈曲し、頭部が円環状を呈する。頭部は本体の頭部側をやや薄く叩き延ばし丸く曲げて本体に接合し環を作り出している。鉄製鍛造品である。

金属209は鉄製の吊り具である。鉤部は短く屈曲する。頭部はやや扁平に鍛打されている。

金属212・213は平面「L」字状を呈する鉄製品である。212は本体部が断面長方形を呈し、先端に向かって先細りとなる。先端から2/3のところまで折れ曲がる。柄は円柱状である。213は本体部が断面長方形を呈し、先端に向かって先細りとなる。先端は欠損。柄は面取りをしており、断面隅丸方形を呈する。性格ははっきりしないが錠前の鍵であろうか。ともに鍛造品である。

金属274は環である。

金属279～281は鑿である。造作作業に用いる追入鑿の一種と考えられる。いずれも薄く華奢な作りとなっている。鑿により穂先や裏透きなどの様子は不明であるが、281は穂先と首が直交してつくられること、280は穂先と首の区別がみられないことなどを特徴とする。279は口金や冠（柄の端に付く金属輪）を伴っている。

金属282～284は錐である。282は鉄製錐部分の大半が欠損しており、僅かに基部が残るだけでもとの形状は不明。木製の柄の遺存状態は良好である。柄の頭部には溝が削り込まれ、鉄錐を挟み込んだ後、この溝に紐などを巻き付け固定したものと考えられる。また、柄は面取りが行われ、不整六角形を呈する。283の鉄製錐部分は断面方形を呈する。木製の柄にはほぼ中央付近に6箇所の窪みが付けられており、滑り止めを施したものと思われる。柄の断面は正円形を呈する。284は鉄製錐部分の大半が欠損しており、僅かに基部が残るだけでもとの形状は不明。木製の柄には褐色の漆が塗布されている。柄の断面は正円形を呈する。

金属289は平面正円形を呈する。筒部には接合痕が認められることから、薄い金属板を円形に曲げて成形したもの。また上部の円環部分には接合痕が観察できないので筒部とは別作りのものと考えられる。底板は筒部にはめ込んでいる。素材は不明。性格もはっきりしないが、現在も襖の引き手に使用される部分に似ている。

金属287・290・291は飾り金具である。287・291は非常に薄い銅板を型に乗せ打ち出したもの。287の文様は径0.3cm・高さ0.2cmの半球体の回りに径0.1cm・高さ0.1cmの小さな半球体が配されるもので、それが連続してみられる。文様1単位の配置は大半球体の上・下方に小半球体が各2個ずつ、左右に各1個ずつとなっている。291は右側が折り畳まれた状態で文様が判らない。中央から左側にかけては円形を基調とした文様が配されている。290は薄い銅板製である。4箇所に径0.2cm程度の小孔を持ち、花卉数20弁の菊花紋を刻んでいる。表裏ともに金箔が貼られている。

金属323は鉄製の弾丸である。中央に鉤型の合わせ目の痕跡が残る。

金属302・303・305・306・308・311・313・314は小柄である。303・305・308・314はほぼ完存しており、柄が無く鉄製の本体のみの出土である。両関作りになっている。311・313は鋼製の柄が装着されたもの311の柄の片面には文様が陽鋳される。中央に五三の桐が、その両側に六角形が配される。表面は長軸に平行な研磨痕がみられる。313の柄の片面には細い線で文様を刻む。非常に稚拙な文様である。306は鋼製の小柄の柄である。片面に2箇所文様を陽鋳する。ともに花を意匠としたものであろうか。

金属318は小刀である。両関作りである。小柄に比べて全体的に作りが大きい。切先側を大きく欠損する。

金属321は銅製の切羽である。平面形は長楕円形を呈し、両側辺の中央部をカットする。孔は後から三角形に切り抜いたものである。

金属322は鈔である。小型の割に重量感がある。材質は不明。鋳造品であろう。

金属296・298・319は鉄鍔である。296は尖根系鍔である。鍔身部は円錐形を呈し、関部付近での径は0.8cmである。茎は断面方形を呈する。全体的に錆による剥落が著しい。298は尖根系の鑿前式鍔に分類されるものか。鍔身部は断面扁平な楕円形を呈し、関部に近づくにつれ太さを増し方形になる。鍔身部の先端は緩やかに屈曲する。茎部は断面方形を呈し、長さ16.1cmを測る非常に長いものである。319は平根系鍔の長三角形式鍔であろうか。鍔身部は平面二等辺三角形を呈し、関部は面取りが行われ断面形は不整八角形を呈する。茎部は断面方形を呈する。鍔身部の先端は折れ曲がる。

金属320は槍状鉄製品である。全体的に緩やかに彎曲している。関部は鍛打により折り返して簡単に作り出されたようである。茎部は身部に比して非常に短いため折れている可能性がある。

金属373は鉄製の柄付き皿である。柄と皿が一体成形である鋳造品。皿部は平面正円形を呈し、口縁端部はやや下方に垂れるように尖り気味に仕上げている。皿部外面の剥落が著しい。柄は断面渾錐形

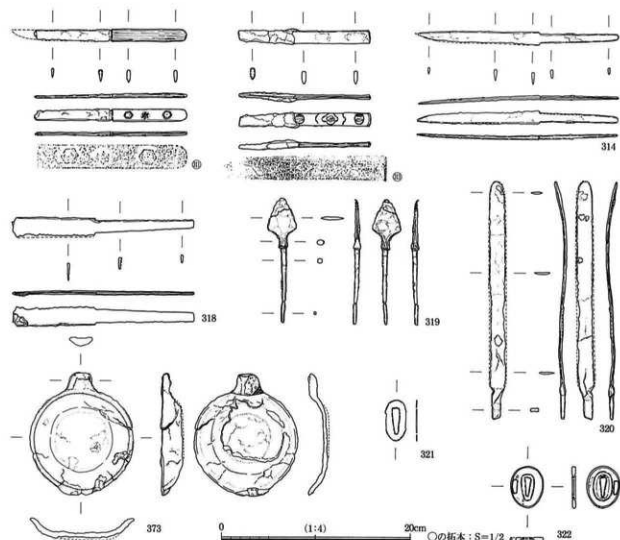


図298 金属製品4



图299 鉤型 1

を呈しており、長さは1.8cmを測る。

d、鋳型

鋳型は3 A建物5と3 A土坑321からの出土である。大半のものが細片であり、その中でも残りの良い資料を図示した。

36・38・46・52は雄型と考えられ、残りは雌型と見られる。雄型は幅広の凸部を持ち、外彎している。雌型は上げ真土が見られず粗真土のままである。また、雄型には黒変した部分はほとんどみられず、部分的に灰色を呈する箇所のみみられる。雌型は粗真土の上に上げ真土をひき、2～3層で構成される。上げ真土はほとんど砂粒を含まず精良なものである。粗真土には粒径1～5mmの小石やササを含んでいる。雌型の内面は黒～黒灰色を呈する。雌型には1～2段の断面凹形の屈曲部が見られる。

4は浅い凹部が2箇所みられる。

16は1箇所の平坦部分と2箇所の屈曲部がある。平坦部分には細い凸線が2条走る。鋳型外面の復原径は約32cmを計り、内面凹部での推定復原径は28cmを計る。

36は凸形の屈曲部が1箇所みられ浅い凹線状の溝が2条走る。

37は浅い凹部と深い凹部があり、両者の変換点での復原径は25.8cmを数える。

38は2箇所の平坦部と深く入り込む屈曲部がある。

39は浅い凹部と深い凹部がある。41は浅い凹部と深い凹部がある。43は幅広の凹部が3箇所みられる。

44は浅く幅広の凹部が2箇所みられる。45は浅く緩やかに彎曲した屈曲部を持つ。屈曲部から平坦部への変換点での復原径は33.6cmを計る。48は屈曲部のみみられず平坦である。

51は深く緩やかな凹部を2箇所持ち、両者の変換点も緩やかな凸部である。変換点での復原径は36.8cmを数える。52は緩やかに外彎する部分と平坦面を持つ。53は緩やかに彎曲した平坦部が2箇所ある。

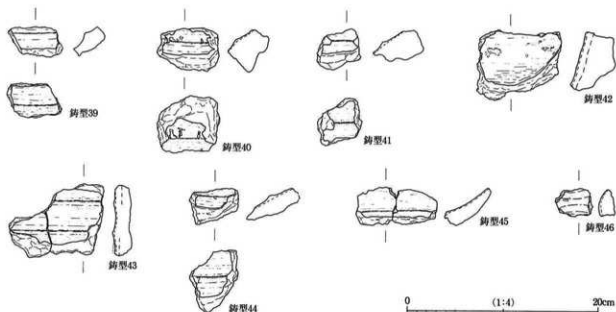


図300 鋳型 2

57には非常に浅い凹線状の溝が1条みられる。

e、羽口

鍛冶用羽口と鋳造用羽口の2種がみられる。後者は9でそれ以外が鍛冶用である。

羽口9は炉内に突出した部分で全面にガラス質の金属滓が付着する。形態的には基部から先端に向け細くなり「ハ」の字状を呈する。胎土は粒径1mm前後の白色砂粒を含むが精良なものが内側に使われ、外側にはスサや白色砂粒を含む粗いものを使用され、2段階の成形過程のあったことが推測できる。鍛冶用羽口に比べて通風孔の径が大きいのが特徴的である。

羽口63・98は他の鍛冶用羽口に比べ外径が大きく器壁が厚い。形態は先端から基部に向けて真っ直ぐ伸びる円柱状を呈する。ともに炉壁に据えられた部分から炉内に突出した先端部にかけての部位である。先端はほぼ全面にガラス質状の滓が付着し、それが通風孔を塞ぐかたちになっている。胎土は長石などを多く含み、やや粗いものが使われている外面には丁寧なナデ調整が施される。98の挿入角度は24度である。

羽口17・20・22・32は基部から先端に向け細くなり「ハ」の字状を呈する形態である。前者に比べて細く、器壁が薄い。これらは炉壁に据えられた部分から炉内に突出した先端部にかけての部位である。先端にはガラス質になった鉄滓が付着する。中央部から先端にかけては還元を受けて青灰色・灰白色を呈する。胎土は長石や赤色砂粒を含む精良なものを使用する。外面には強いナデ調整を施し、面取り状

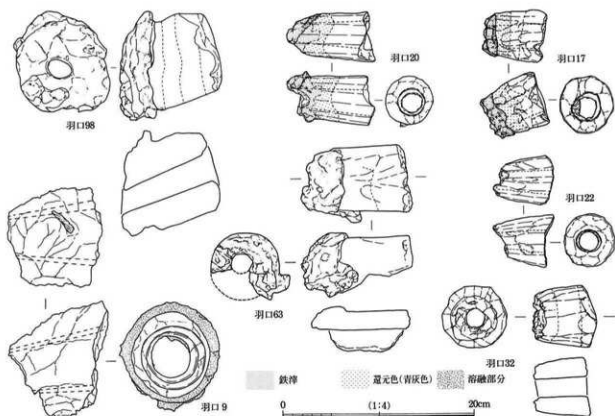


図301 羽口

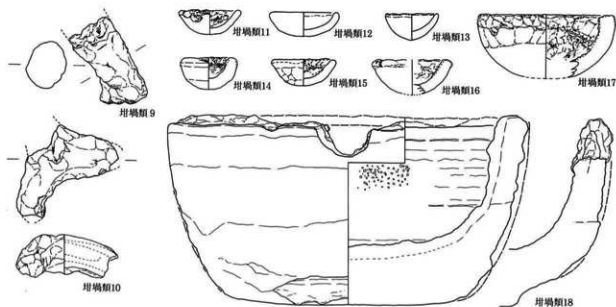


図302 埴塼類

になるものが多い。

羽口17は最大径5.8cm、孔径1.6～3.0cm、残存長6.8cmを測る。先端にはガラス質状の鉄滓が付着している。中央から先端にかけては還元を受け青灰色・灰白色を呈する。胎土は長石を僅かに含む精良な黄色粘土を使用する。外面には強く粗いナデ調整を施し、部分的に面取り状になっている。形態は先端から基部に向けて「ハ」の字状になると思われる。

羽口20は最大径5.3cm、孔径2.0～3.0cmを測る。残存長は9.9cmである。先端にはガラス質状の鉄滓が付着している。この結果先端下半が欠損したものと考えられる。中央から先端にかけては還元を受け青灰色を呈する。胎土は長石や赤色砂粒を多く含む黄色粘土を使用している。外面は強いナデ調整による面取り（幅1cm）がみられる。

羽口22は最大径5.1cm、孔径1.7～2.3cm、残存長6.4cmを測る。先端から基部に向けて「ハ」の字状にひらく形態である。先端にはガラス質状の鉄滓が僅かに付着する。中央から先端にかけては還元を受け青灰色を呈する。

胎土には微細な白色砂粒（長石か）を多く含む黄色粘土を使用している。外面は縦方向のナデ調整を施しており、面取り状になっている。また、通風孔は基部側から先端にむけストレートにのびるのでは

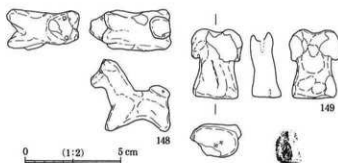


図303 土人形

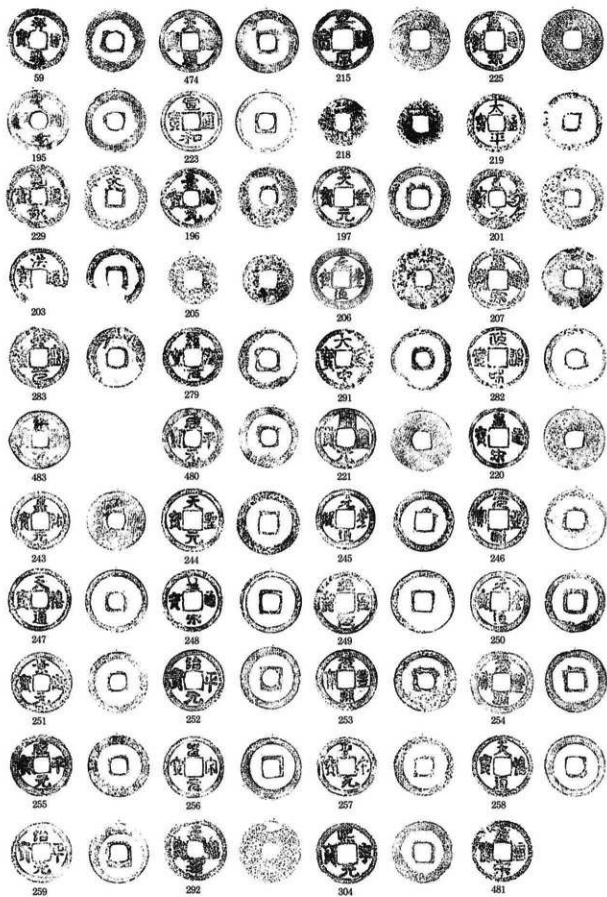


图304 钱 1

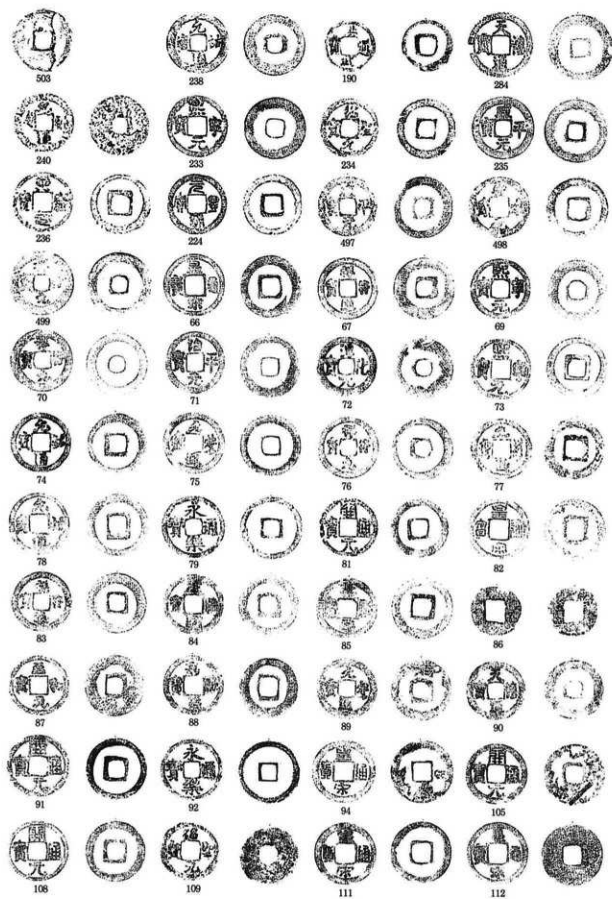


図305 銭2

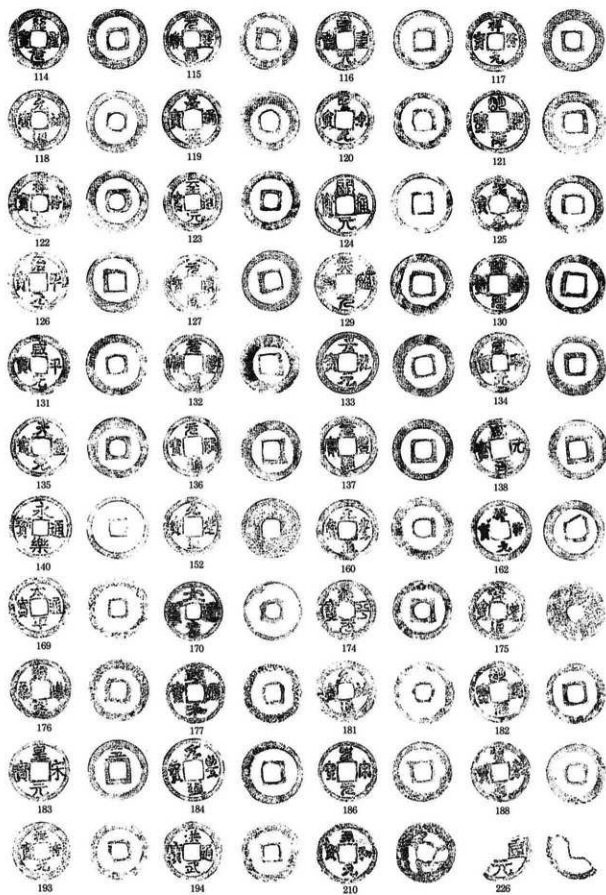


图306 錢 3

なく、縦長の「凸」の字状に作られている。段の持つ意味は明確ではないが、粘土の継ぎ目に当たると考えられる。

なおこれらは、形態や大きさと胎土などの点から、古代の羽口かとも思われる。

f. 埴塼類

9・10は手捏ねの土製品である。酸化焰により硬質に焼き上がっているが、成形は手捏ねで粗い。緩やかにカーブしながら立ち上がり、復原形は三足の支脚状を呈する。いわゆるサルと呼ばれる製品に類似する。

12は口径約9cm・器高3.4cmと小型で、胎土は粗い。内面には口径近くまでガラス状に熔融した金属滓が付着している。外面は被熱によって灰色に変化している。

13は埴塼である。3A7トレンチ8b層から出土した。微細な白色砂粒や金雲母を若干含むが非常に精良な胎土を使用している。内面にはガラス質状の黒褐色付着物や金の含有率の高い細粒（径1mm）がみられる。口径は5.6cm、器高は2.7～2.8cmをはかる。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。

溶解炉は、破片を含めて5基分検出された。いずれも、基底部のみの出土であり、形態は鉢型を呈する。

炉1は3A6トレンチ8c層の出土である。口縁部を欠き炉底部のみ検出された。底部内径は28cm、外径は34cmを計る。炉壁厚は壁立ち上がり部で4cm、底部で約6cmを数える。底部外面には2箇所に長さ20cm、幅3cmの削り込みがある。

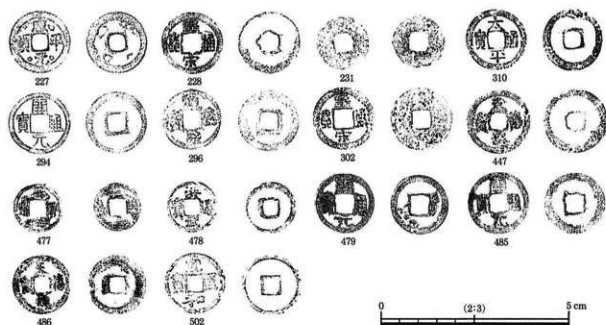


図307 銭4

炉2は3 A12トレンチ8 b層の出土である。口縁部内径は29cm、外径は39cm、底部内径は24cm、外径は30cmを数える。器高内法は13.5cm、外法は22cmを計る。炉壁厚は口縁部で4cm、底部で6cmである。また、底部外面には2箇所に長さ20cm、幅6cmの割り込みがみられる。

炉3(18)は4 A12トレンチ8 C層出土である。口縁部内径は32cm、外径は38.2cmを計る。底部内径は22~25cm、外径は25cmを計る。器高内法は13.7cm、外法は20cmを数える。炉壁厚は口縁部で約3cm、底部では4~4.5である。底部外面には2箇所に長さ20cm、幅3cmの割り込みがみられる。

炉4は3 A12トレンチ8 c層出土である。口縁部内径は29cm、外径は37cmを計る。底部内径は22cm、外径は30cmである。器高内法は13.7cm、外法は19cmを計る。炉壁厚は口縁部で4cm、底部で5cmである。底部外面には2箇所に長さ20cm、幅4cmの割り込みがある。

炉9は土坑276から出土した口縁部の破片で、約1/6残存している。口縁内径は29cm、外径は39cmを数える。炉壁厚は5cmである。いずれの炉の内部にも熔融金属が口縁部には1cm、底部には2cmの厚さで付着している。また、いずれも胎土にはスサや粒径が0.5~1cmの小石を多く含み、粗い粘土が使用されている。

なお炉3・4の口縁部には直径4.5cmの半円の孔が1箇所みられる。孔は外面から内面に向け約15度の傾斜角を持って穿たれており、木呂孔であると考えられる。

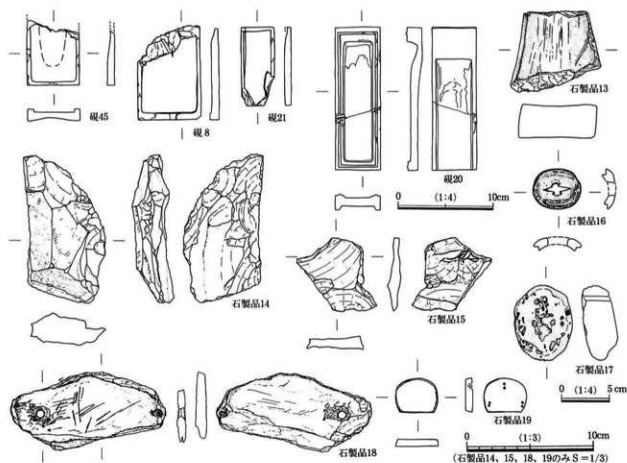


図308 硯・石製品

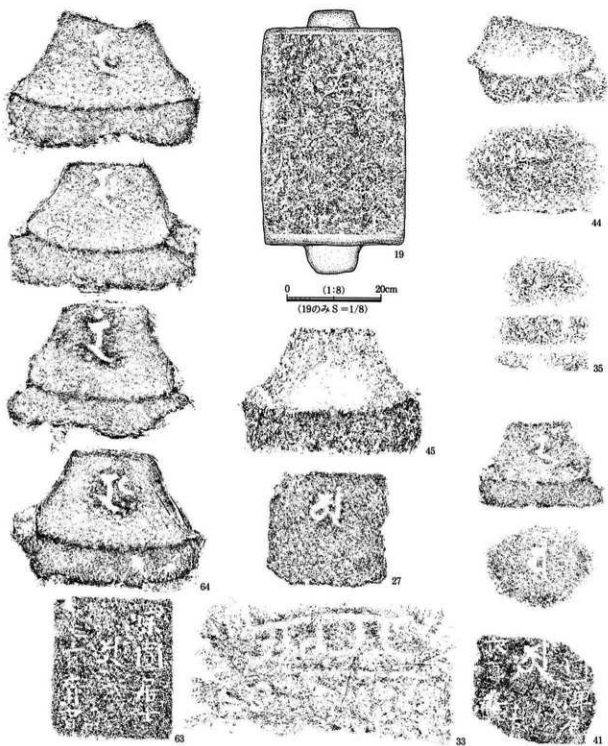


図309 石塔 1

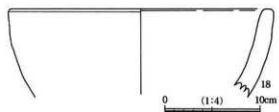
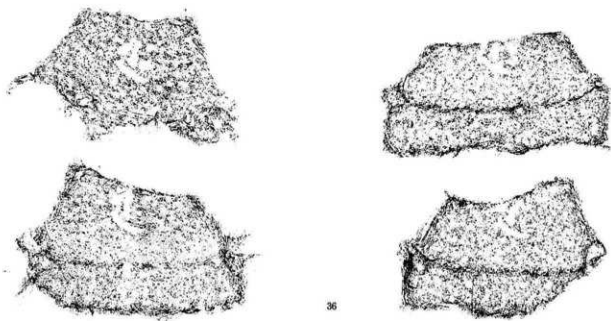


図310 石鉢



36

図311 石塔2

g、土人形

148は大形、149は人形である。いずれも手捏ねで、全長は約4cm程度である。大形は折れた耳と巻いた尾を特徴としており、人形は体部断面が扁平で、外形は鼓形を呈する。頸部は窪み、小穴が穿たれている。頭部はこの孔に差し込む組み合わせ式になっていたものと思われる。

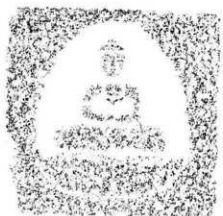
h、銭貨

該期に比定される出土状況の銭貨は33種類以上の209枚以上である。内訳は多い順で、元豊通寶22枚、皇宋通寶16枚、開元通寶15枚、熙寧元寶14枚、祥符元寶12枚、元祐通寶10枚、無文錢8枚、聖宋元寶・咸平元寶7枚、紹聖元寶・天禧通寶6枚、嘉祐元寶5枚、治平元寶・洪武通寶・天聖元寶4枚、永樂通寶・景祐元寶・至道元寶・元符通寶・太平通寶・政和通寶・宣和通寶3枚、乾元重寶・景德元寶・至和元寶・明道元寶2枚、聖宋通寶・皇宋元寶・淳化元寶・大觀通寶・大中通寶・大定通寶・咸淳元寶1枚、およびその他不明である。なお寛永通寶とも読める銭貨が2枚入っているが、これは土留め工事の際などによる混入品である。

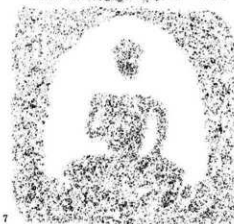
i、石器・石製品・石塔

石製品12は4A調査区の井戸2から出土した安山岩の自然礫である。全長8.5cm、幅5.3cm、厚さ3.1cm、重量は150gである。風化が著しく表面が荒れている。図に表われている剝離の内面も著しく風化が進んでおり、人工的な剝離痕とは考えにくい。

石製品18は2孔タイプの大型石庖丁の未製品と思われる。残存長12.2cm、最大幅5.5cm以上、最大厚



8



7

図312 石塔3

0.9cm、紐孔間9.5cmを測る。紐孔の直径は0.6cmである。2つの紐孔は敲打により、両側から穿孔を施している。一方のものは穿孔の途中でやめている。これは敲打の際、紐孔のすぐ脇が折れたためと考えられる。この敲打痕は擦痕を切るかたちでみられるため、体部を一定程度磨いた状態で紐孔を穿っているようである。明確な刃部は認められない。なお、背部には緩やかに突出した部分（紐か）がみられ、なで肩風の製作になっている。この突出部分には敲打痕がみられ、刃部側の一边には磨きかと思われる調整痕が残っている。石材は鑑定していないが粘板岩系のもと思われる。形態は下條信行氏の分類（下條1991）によるC式に近いものであろう。

石製品19は多量の瓦と共に1 A溝15から出土した。宝塔の軸にあたるものとされる。現位置は遊離している。石材は豊島石と呼ばれる角礫凝灰岩で、重さは65kgを測る。豊島石は、香川県小豆郡土庄町豊島家浦、唐櫃から産出されるもので、耐火性に富むことから、瀬戸内沿岸の石塔に多く使われている。高さは46.3cm、胴部は中位がややふくらんでおり、最大径は30.7cmである。上下の面には直径8cm前後でそれぞれの長さが4cmと7cmのほぞが設けられている。

表面には銘文が彫られており、1字約5cm程度の大きさで5行23文字の漢字と阿弥陀三尊をあらわす3文字分の梵字が認められる。銘文は、右から「天正十九年 念佛一結衆 右志者 為逆修敬白 二月 時正日」と読むことができる。意味は、「天正十九年、春の彼岸会に念仏を講とする人々が逆修（生前に、死後極楽往生するために善根を修める作法）の為にたてたもの」となる。梵字のうち、中央は阿弥陀をあらわすキリーク、右は観世音菩薩をあわさすサ、左は勢至菩薩をあらわすサクとみられる。

石塔41・63は共に一石五輪塔の地輪である。41は「○國(国) 禪尼 (梵字) 長享元(丁未) 十二月」、63は「宗国居士 (梵字) (大永) 二年六月七日」の銘文がある。

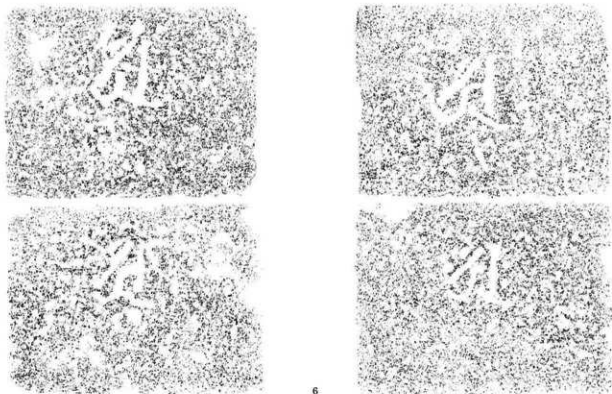


図313 石塔4

1、瓦

三の丸築造以前の遺構および包含層より出土した瓦は、軒平瓦・軒丸瓦・飾り瓦など多種にのぼるが、軒先瓦で家紋などを配した瓦は、菊以外みられない。

3は8葉+8葉の二重菊で、主弁には突線で稜を描く。直立縁は1.7cmと幅広く、瓦当と丸瓦部の接合面に弧と縦位の刻みが施され、内面の補充粘土は少ない。凸面は縦方向のヘラナデがみられる。

12は唐草文軒平瓦であり、中心飾りの3葉は断面が三角形で菱形を呈する。



図314 瓦 1

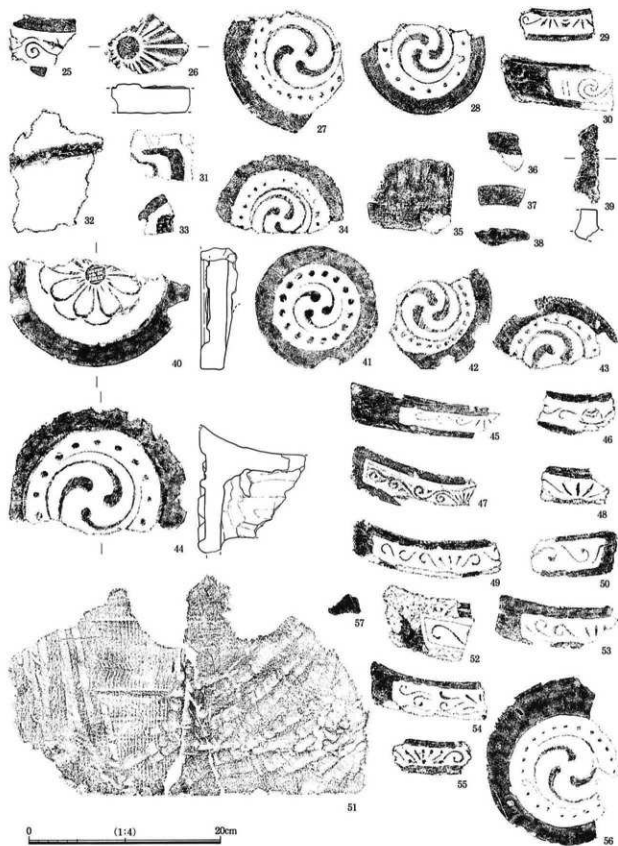


图315 瓦 2

13は桐文飾り瓦の一部である。釘孔をもつ。中心軸の葉脈は断面三角形の凸線で、その他の葉脈は筧描きの沈線である。立体的な意匠であり、左上は組み合わせのために直線で切られている。

31は長方形の飾り瓦の一部で中心文様を囲む枠である。下部の釘穴の直径は0.7cmを測る。

15・32・263は飾り瓦の一部であり、一本の筋状の凸文がある。

33は桐文または菊文の一部である。

39は丸瓦の玉縁の一部と考えられ、外面全体に金箔が施されている。

51は組み合わせ式の飾り瓦の一部である。側面に赤色漆と金泥が施される。把手が付き、表面は指押さえと筧などが、裏面には外周に枠が付き、内側を指押さえて仕上げている。

57は飾り瓦の一部であり、表面に金箔が施されている。60は軒丸瓦の周縁の一部で全面に金箔が施されている。63は巴文軒丸瓦の一部である。64は軒平瓦の下縁であろう。金箔がみられる。

61は軒先飾り瓦であり、中心が宝珠で外周の上半に炎のほどこされた類であろう。

79は組み合わせ式飾り瓦の一部あるいは磚であろう。断面は台形を呈し、辺の長い面に赤色漆が、長軸と平行する刷毛塗りで施される。またその面を下にして立てたときの両側辺は共にやや内側へ弧をえ

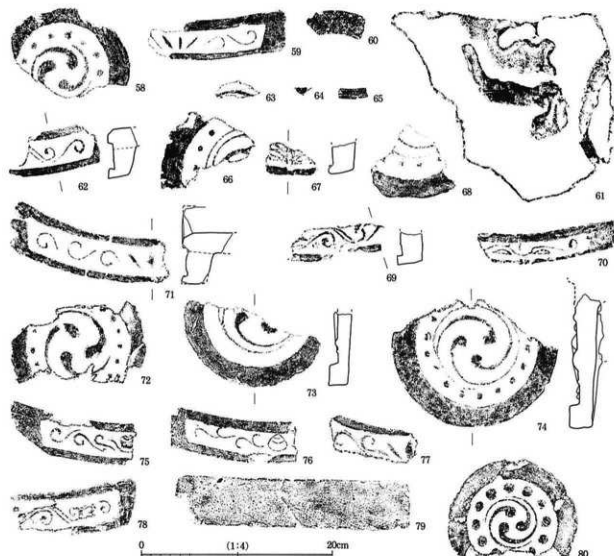


図316 瓦 3

がく。胎土は粗く砂粒も多く見られる。また焼きも粗雑である。

83は赤色漆塗りの軒丸瓦である。瓦当直径が17.2cmと大形の左巻き三つ巴文である。外縁と文様の凸部に朱漆が塗られ、ハケメが明瞭に残る。巴文の頭部は偏平にナデられている。

88の中心飾りは二葉である。周縁はやや丸みがある。浅い段頸。

102は花狭間の一部である。108は唐草文の中央部が凹んだ部分にも金箔が施されている。

109は組み合わせ式の桐文飾り瓦である。釘孔をもつ。外周に縁をめぐらせ、それより浮き上がった位置で桐文がつくりだされる。花は3つの頭をもち、中央にV字の篋描き沈線が施される。葉脈は太く深い篋描きの沈線である。下辺が斜めに切られているが、これは組み合わせによる接合位置を示す。胎土は粗く、成形も粗雑である。



図317 瓦4

116は飾り瓦であり、立体的につくられた花卉または葉の意匠である。中央に篋描きの沈線がはしる。

117は花狭間の一部である。

131は釘孔が2カ所みられ、表面には平行沈線と平行の弧線が切り合う。裏面には平行して幅のひろい凹線がみられる。瓦であるかどうか不明である。



図318 瓦5

132は軒先飾り瓦の一部である。内側に彎曲する面とその周囲をめぐる二重凸線およびそれに挟まれた珠文があり、外周には炎に模された波形がみられる。

149は花狹間の一部である。葉の描かれている基盤から竹の節状の意匠が作り出されている。

143・153・158は飾り瓦の一部であろう。板状の瓦製品である。143は側面から裏面の一部にかけて漆と金箔が押され、表面に篋描きで「御？」の文字が彫られる。153は花菱の文様が複数スタンプされている。158は片面の一部にT字またはL字状に金箔がみえる。

163は飾り瓦の一部である。166は飾り瓦の一部で装飾部が剥がれたものである。167は彎曲したL状に外枠が立ち上がる。



図319 瓦6

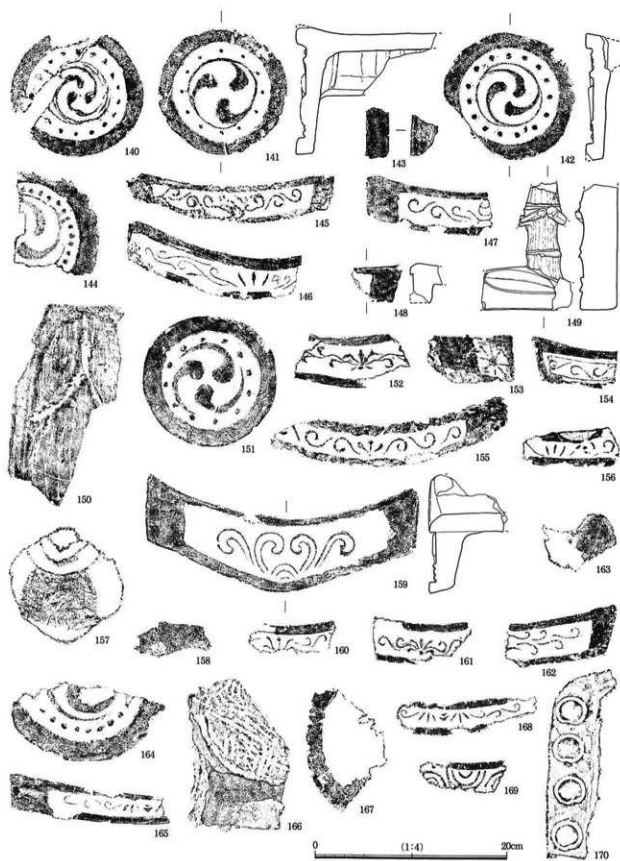


図320 瓦 7

173は桐文飾瓦の一部で、金箔は文様部と瓦当面凹部に見られる。

179は釘穴があり、飾瓦の無文様の部分と思われるが、両面共凹凸が激しく作りが粗い。

180の中心飾りである三葉には、縦2.6cm、横0.9cmの長方形の金箔が押されている。また、外縁上部は面取りされ、全体に粗雑なつくりでヘラナデが多く残る。

189は中心飾りがわずかに稜をもつ3弁の花文で、下にある2つの横線は考であろう。

190の文様は後231と類似するが、中心飾り脇の弧線はない。

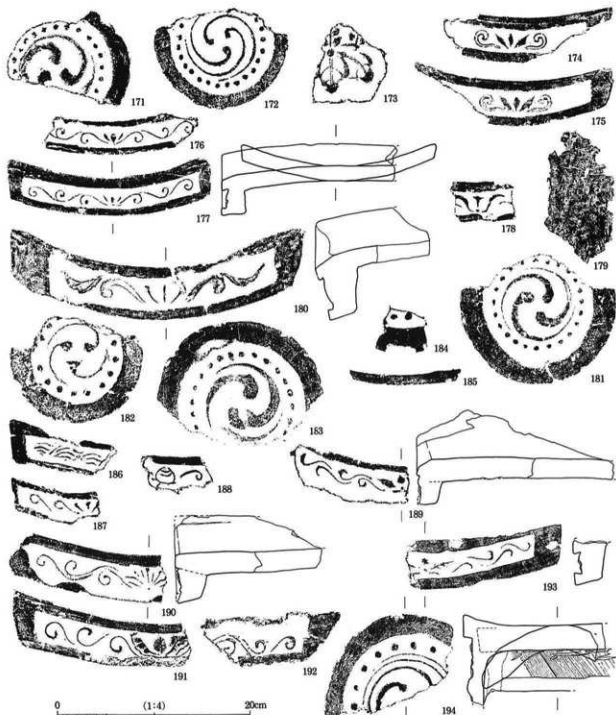


図321 瓦 8



图322 瓦（包含層）9

193は花文と萼の中心飾りで花卉には葉脈状の稜線がはしる。外縁が高く、内区の上下幅は文様面で2.5cmと比較的狭い。また型から離すときの粘土のたるみのせいか外縁面では2.0cmと、上下断面形は台形を呈する。

194~221は包含層を中心とした軒丸瓦である。212を除き全て連珠をともなった巴文であり、瓦当面の文様構成から、巴文と連珠の間に圏線を描くもの(220・221)、尾の先端がつながって圏線を描くもの(215~219)、およびそれ以外に分けられ、巴と尾の関係から、頭と尾の間にくびれをもつもの(194・200・203・210・218)と、それらの区別のあまり明瞭でないものに分けられ、定量的には後者が多いものとなっている。

199・222は丸瓦の凹面であり、199は粗い切り離し痕跡が長軸と直交~斜位に残る。222は吊り紐の痕跡の一部である。

223~261は包含層を中心とした軒平瓦である。ほとんどが唐草文を配し、おそらく257以外は中心飾



図323 瓦(包含層) 10

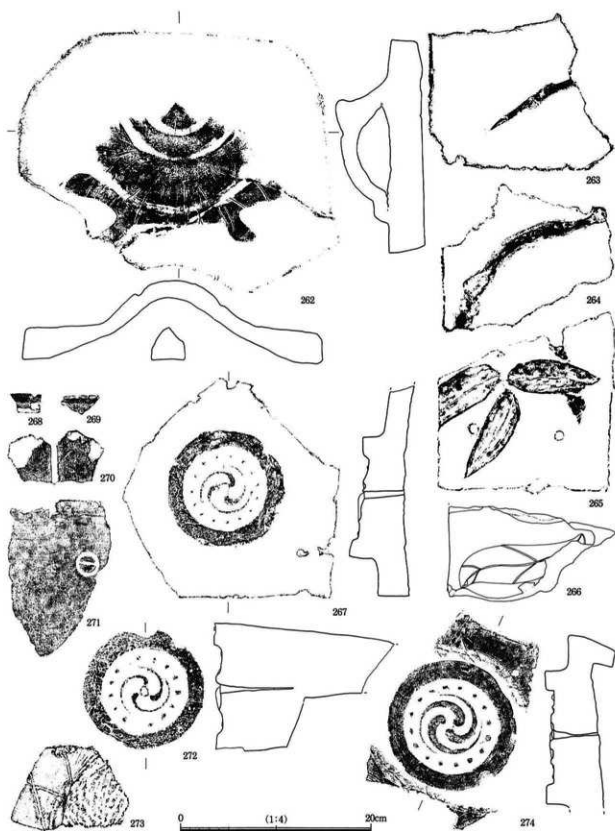


図324 瓦（包含層）11

りをもつ。なお、224・231・261は波文の軒平瓦である。上下に孤立した3重の弧線が連続して描かれる。

中心飾りは248を除き基本的に3葉のバリエーションでとらえられ、それを下向きに配するもの(227・228・231・239・241・242・251)、3葉に装飾を付加したもの(232~234)、3葉の先端を強調して稜線が3筋にわかれるもの(256)などがみられる。

248は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは桐文である。瓦当上端部に広い面取りをもつ。浅い段顎で瓦当裏面は反る。

262は軒先飾り瓦である。意匠は脚付きの台上に宝珠を配したもので宝珠の先端は外上方へ突出する。立体的な造形である。宝珠の裏面は中空で、その部分を利用して把手が付けられている。

263・264は平瓦である。ただしその凹面側に、端部から緩やかに彎曲する凸帯(断面三角形)が貼り付けられ、その面を画する。凹面側はナデにより平滑に仕上げられているが、凸面側は不調整で粗い。263には釘孔があるが、飾り瓦か道具瓦かの識別はできない。

265は飾瓦である。意匠は竹または笹であろう。葉は断面が三角形を呈するほどに、貼り付け立体的に作り上げられ、船底状にくぼんだその中心部に沈線で葉脈が描かれている。釘孔をもつ。

266は飾り瓦である。左辺と下辺の一部が生きている。傾きは不明であるが、左辺が水平位置にくる可能性もある。左辺は浅く外彎し、下辺は内彎~端部に向かって外反して、それらの先端は尖り気味に仕上げられる。いずれも裏面に脊を有する。文様は断面三角形に貼り付けられた細長い葉形であり、その稜線にあたる中心軸の葉脈と枝の葉脈を篋で描いている。また同様な装飾の痕跡が上辺にもみえる。

270は厚さ最大4.6cmで、裏面はナデ調整がみられる。断面形は輪花状に復原される可能性があり、中央の沈線はその界線となる。

268・269は赤色漆を塗布し金箔の付いた飾り瓦の一部である。271は平瓦の凹面に押された丸に一文字の深いスタンプである。

267・272・274は獅子口である。このうち272は経の巻の部分であり、瓦当に貫通していない穿孔がある。

267は粗いつくりの板状瓦に巴文瓦当が貼り付けられている。瓦当面は他より風化が激しい。貼り付けは粘土とナデでおこなわれ、その痕跡が瓦当の周囲をめぐる。板瓦の成形は粗く、下面はとくに凹凸

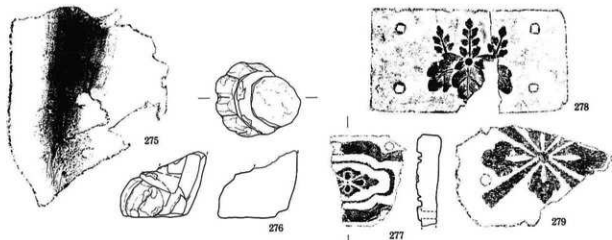


図325 瓦(包含層) 12

が著しい。表面は縦横のナデで比較的平滑に仕上げられているが、裏面は斜位のヘラナデがその単位を凹凸に残したままである。

272は瓦当の風化が著しい。体部は、瓦当上面に半円に貼り付けられた丸瓦部があり、さらにその下面から隣接する横の部位へつながる板瓦が貼り付けられ、最後に残った瓦当裏面の下半部に厚さを増すための粘土が貼り付けられている。外面の調整は丁寧であるが、裏面はヘラナデなどの痕跡がそのまま残り、とくに瓦当裏面下半の追加部分の下降は粗雑である。

274は右上の辺が生きている。緩やかに内彎して裏面に枠をもつ。風化はそれほどみられない。

273は鬼瓦などの軒先飾り瓦の中心飾りが剥離した部分とその周囲をめぐる格子沈線である。

275は鬼瓦の下部と考えられる。厚さが最大で7.7cmあり、下部は丸みを帯び、表面にはヘラナデ、裏面には突帯がみられる。基盤となる瓦より独立した意匠である。

276は足先である。手捏ねにより4本以上の指をつくりだしている。金箔が凸面の一部に付けられる。

277～279は家紋系飾り瓦である。277は方形の板状飾り瓦であり、2重に囲まれた内側に花菱が配される。278は桐文、279は剣花菱である。また277の右上部の釘穴の直径は0.7cmである。

(5) 豊臣大坂城築造以前

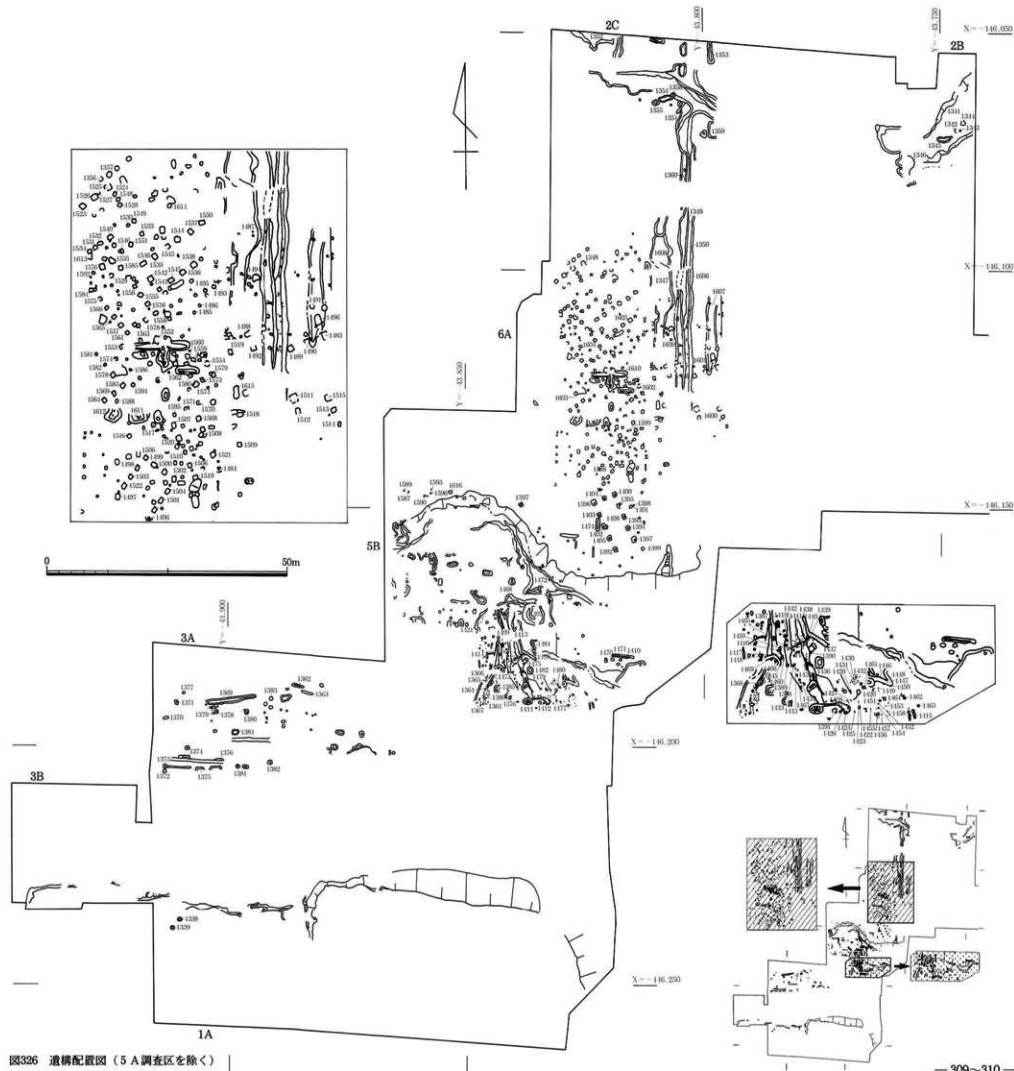


図326 遺構配置図 (5 A調査区を除く)

表10 遺構掲載番号表(5A調査区を除く) 1

番号	遺構名	時期	X座標	Y座標	深さ			年代		
1337	3B井戸28	中世	-146211	-43940		1407	5B井戸16(井戸17)	古代	-146172	-43836
1338	1A土坑179	古代	-146236	-43910	0.23	1408	5B建物1	古代	-146153	-43818
1339	1A土坑180	古代	-146238	-43912	0.36	1409	5B溝043	古代	-146177	-43843
1340	2B旧土坑2	古代	-146074	-43754	1.17	1410	5B溝049	古代	-146181	-43817
1341	2B各1	古代	-146068	-43746		1411	5B溝050	古代	-146190	-43837
1342	2B土器群1	古代	-146071	-43746		1412	5B溝051	古代	-146190	-43834
1343	2B土器群2	古代	-146071	-43745		1413	5B溝052	古代	-146180	-43838
1344	2B土器群3	古代	-146069	-43745		1414	5B溝117	古代	-146173	-43843
1345	2B土器群4	古代	-146073	-43749		1415	5B石列	古代	-146191	-43844
1346	2B土坑8	古代	-146078	-43756		1416	5B土器群01	古代	-146182	-43824
1347	2C溝02	古代	-146099	-43808	0.06	1417	5B土器群02	古代	-146183	-43843
1348	2C溝03	古代	-146099	-43825	0.29	1418	5B土器群03	古代	-146183	-43845
1349	2C溝04	古代	-146095	-43804	0.32	1419	5B土器群04	古代	-146182	-43841
1350	2C溝05(溝08)	古代	-146095	-43803	0.13	1420	5B土器群05 a	古代	-146188	-43829
1351	2C溝06	古代	-146067	-43805	0.43	1421	5B土器群05 b	古代	-146173	-43846
1352	2C溝10	古代	-146051	-43822	1.36	1422	5B土器群06	古代	-146190	-43831
1353	2C土坑01	古代	-146054	-43798	0.55	1423	5B土器群07	古代	-146189	-43831
1354	2C土坑07	古代	-146064	-43808	0.34	1424	5B土器群09	古代	-146191	-43833
1355	2C土坑08	古代	-146065	-43810	0.46	1425	5B土器群10	古代	-146190	-43832
1356	2C土坑11	古代	-146098	-43828	0.19	1426	5B土器群12	古代	-146190	-43833
1357	2C土坑26(ピット06)	古代	-146098	-43827	0.15	1427	5B土器群13	古代	-146189	-43832
1358	2C土坑46	古代	-146063	-43806	0.35	1428	5B土器群14	古代	-146189	-43833
1359	2C土坑48	古代	-146070	-43798	0.44	1429	5B土器群15	古代	-146188	-43832
1360	2C土坑52	古代	-146080	-43804		1430	5B土器群16	古代	-146186	-43832
1361	3A溝105	古代	-146190	-43846	0.13	1431	5B土器群17	古代	-146187	-43832
1362	3A溝107	古代	-146188	-43885	0.39	1432	5B土器群18	古代	-146186	-43831
1363	3A溝108	古代	-146189	-43884	0.17	1433	5B土器群19	古代	-146189	-43841
1364	3A殿治炉5	古代	-146188	-43846		1434	5B土器群20	古代	-146186	-43839
1365	3A殿治炉6	古代	-146187	-43845		1435	5B土器群21	古代	-146185	-43839
1366	3A殿治炉7	古代	-146186	-43845		1436	5B土器群22	古代	-146184	-43838
1367	3A殿治炉8	古代	-146191	-43847		1437	5B土器群23	古代	-146181	-43837
1368	3A土器溜まり1	古代	-146188	-43845		1438	5B土器群24	古代	-146180	-43839
1369	3A土器溜まり2	古代	-146191	-43900		1439	5B土器群25	古代	-146181	-43837
1370	3A土坑338	古代	-146194	-43913	0.24	1440	5B土器群26	古代	-146181	-43839
1371	3A土坑339	古代	-146191	-43911	0.14	1441	5B土器群28	古代	-146182	-43840
1372	3A土坑340	古代	-146205	-43913	0.15	1442	5B土器群29	古代	-146181	-43840
1373	3A土坑341	古代	-146204	-43913	0.28	1443	5B土器群30	古代	-146183	-43840
1374	3A土坑342	古代	-146202	-43909	0.14	1444	5B土器群31	古代	-146183	-43841
1375	3A土坑343	古代	-146205	-43906	0.11	1445	5B土器群32	古代	-146183	-43842
1376	3A土坑344	古代	-146203	-43902	0.34	1446	5B土器群35	古代	-146186	-43829
1377	3A土坑345	古代	-146189	-43909	0.41	1447	5B土器群36	古代	-146187	-43828
1378	3A土坑346	古代	-146193	-43903	0.32	1448	5B土器群37	古代	-146186	-43827
1379	3A土坑347	古代	-146193	-43903	0.22	1449	5B土器群38	古代	-146188	-43828
1380	3A土坑349	古代	-146193	-43896	0.41	1450	5B土器群39	古代	-146187	-43827
1381	3A土坑350	古代	-146204	-43898	0.37	1451	5B土器群41	古代	-146189	-43828
1382	3A土坑351	古代	-146203	-43891		1452	5B土器群42	古代	-146189	-43828
1383	3A土坑353	古代	-146190	-43891	0.39	1453	5B土器群44	古代	-146190	-43827
1384	3A土坑355	古代	-146197	-43899	0.47	1454	5B土器群45	古代	-146190	-43828
1385	3A土坑359	古代	-146188	-43844	0.13	1455	5B土器群46	古代	-146190	-43829
1386	3A土坑360	古代	-146190	-43846	0.10	1456	5B土器群47	古代	-146191	-43829
1387	5Bピット037	古代	-146180	-43842	0.15	1457	5B土器群48	古代	-146191	-43828
1388	5Bピット038	古代	-146184	-43841	0.07	1458	5B土器群49	古代	-146191	-43827
1389	5Bピット039	古代	-146184	-43840	0.11	1459	5B土器群52	古代	-146182	-43842
1390	5Bピット054	古代	-146182	-43838	0.04	1460	5B土器群53	古代	-146182	-43842
1391	5Bピット055	古代	-146190	-43834	0.20	1461	5B土器群54	古代	-146188	-43830
1392	5Bピット117	古代	-146158	-43819	0.06	1462	5B土器群55	古代	-146189	-43825
1393	5Bピット120	古代	-146151	-43817	0.10	1463	5B土器群56	古代	-146190	-43823
1394	5Bピット121	古代	-146154	-43816	0.04	1464	5B土器群57	古代	-146190	-43827
1395	5Bピット122	古代	-146149	-43818	0.12	1465	5B土器群58	古代	-146182	-43841
1396	5Bピット124	古代	-146148	-43823	0.32	1466	5B土器群62	古代	-146183	-43842
1397	5Bピット125	古代	-146156	-43815	0.05	1467	5B土器群65	古代	-146186	-43840
1398	5Bピット126	古代	-146149	-43815	0.07	1468	5B土器群90	古代	-146169	-43841
1399	5Bピット135	古代	-146158	-43813	0.03	1469	5B土器溜まり1	古代	-146182	-43842
1400	5Bピット156	古代	-146147	-43819	0.13	1470	5B土坑069	古代	-146182	-43820
1401	5Bピット157	古代	-146149	-43815	0.06	1471	5B土坑090	古代	-146181	-43819
1402	5Bピット158	古代	-146153	-43821	0.07	1472	5B土坑231	古代	-146167	-43835
1403	5Bピット159	古代	-146151	-43822	0.11	1473	5B土坑256	古代	-146184	-43843
1404	5Bピット161	古代	-146147	-43821	0.11	1474	5B溝1(土坑180)	古代	-146152	-43822
1405	5Bピット162	古代	-146156	-43820	0.05	1475	5B溝3	古代	-146182	-43838
1406	5Bピット206	古代	-146145	-43822	0.10	1476	5B溝4(伊9)	古代	-146188	-43842
						1477	5B溝5	古代	-146189	-43831

表10 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)2

1478	5B#06	古代	-146182	-43838	1549	6Aビツ299	古代	-146105	-43824	0.16	
1479	5B#07	古代	-146184	-43837	1550	6Aビツ401	古代	-146105	-43814		
1480	5B#08	古代	-146188	-43831	1551	6Aビツ402	古代	-146108	-43824	0.06	
1481	5B#10	古代	-146180	-43838	1552	6Aビツ411 b	古代	-146121	-43820	0.10	
1482	5B#11	古代	-146183	-43834	1553	6Aビツ418	古代	-146125	-43824	0.17	
1483	6Aビツ017	古代	-146119	-43806	1554	6Aビツ448	古代	-146124	-43814	0.17	
1484	6Aビツ022	古代	-146139	-43812	0.10	1555	6Aビツ450	古代	-146115	-43823	0.15
1485	6Aビツ097	古代	-146117	-43815	0.09	1556	6Aビツ451	古代	-146114	-43824	0.12
1486	6Aビツ098	古代	-146116	-43814	0.07	1557	6Aビツ452	古代	-146119	-43826	0.15
1487	6Aビツ102	古代	-146106	-43805	0.10	1558	6Aビツ454	古代	-146117	-43821	0.12
1488	6Aビツ106	古代	-146120	-43808	0.02	1559	6Aビツ460	古代	-146124	-43815	0.11
1489	6Aビツ108	古代	-146122	-43802	0.05	1560	6Aビツ464	古代	-146124	-43826	0.14
1490	6Aビツ109	古代	-146121	-43800	0.13	1561	6Aビツ468	古代	-146120	-43825	0.03
1491	6Aビツ110	古代	-146116	-43799		1562	6Aビツ477	古代	-146125	-43817	0.70
1492	6Aビツ111	古代	-146122	-43807	0.01	1563	6Aビツ478	古代	-146119	-43823	0.14
1493	6Aビツ117	古代	-146114	-43813	0.15	1564	6Aビツ484	古代	-146130	-43826	0.10
1494	6Aビツ126	古代	-146112	-43807	0.04	1565	6Aビツ489	古代	-146118	-43827	0.32
1495	6Aビツ127	古代	-146114	-43814	0.07	1566	6Aビツ491	古代	-146116	-43826	0.23
1496	6Aビツ128	古代	-146118	-43798	0.07	1567	6Aビツ492	古代	-146116	-43823	0.35
1497	6Aビツ159	古代	-146143	-43826	0.10	1568	6Aビツ494	古代	-146132	-43815	0.06
1498	6Aビツ162	古代	-146139	-43823	0.10	1569	6Aビツ496	古代	-146129	-43827	0.08
1499	6Aビツ168	古代	-146138	-43821	0.19	1570	6Aビツ500	古代	-146130	-43815	0.14
1500	6Aビツ172	古代	-146139	-43820	0.15	1571	6Aビツ501	古代	-146131	-43816	0.08
1501	6Aビツ173	古代	-146143	-43820	0.14	1572	6Aビツ504	古代	-146127	-43815	0.27
1502	6Aビツ175	古代	-146140	-43818	0.11	1573	6Aビツ505	古代	-146126	-43814	0.15
1503	6Aビツ176	古代	-146140	-43824	0.13	1574	6Aビツ507	古代	-146124	-43826	0.08
1504	6Aビツ177	古代	-146142	-43819	0.13	1575	6Aビツ508	古代	-146115	-43828	0.07
1505	6Aビツ186	古代	-146137	-43816	0.11	1576	6Aビツ509	古代	-146111	-43828	0.13
1506	6Aビツ192	古代	-146138	-43822	0.18	1577	6Aビツ512	古代	-146118	-43822	0.13
1507	6Aビツ201	古代	-146134	-43818	0.14	1578	6Aビツ516	古代	-146126	-43827	0.09
1508	6Aビツ204	古代	-146133	-43814	0.09	1579	6Aビツ518	古代	-146126	-43813	0.12
1509	6Aビツ208	古代	-146136	-43809	0.33	1580	6Aビツ527	古代	-146126	-43816	0.04
1510	6Aビツ221	古代	-146137	-43817	0.08	1581	6Aビツ530	古代	-146123	-43829	0.03
1511	6Aビツ226	古代	-146129	-43801	0.07	1582	6Aビツ532	古代	-146124	-43828	0.10
1512	6Aビツ227	古代	-146131	-43801	0.06	1583	6Aビツ534	古代	-146127	-43825	0.33
1513	6Aビツ228	古代	-146131	-43796	0.07	1584	6Aビツ535	古代	-146114	-43830	0.59
1514	6Aビツ229	古代	-146133	-43795	0.09	1585	6Aビツ536	古代	-146112	-43827	0.10
1515	6Aビツ230	古代	-146129	-43796	0.06	1586	6Aビツ538 a	古代	-146126	-43823	0.09
1516	6Aビツ232	古代	-146135	-43825	0.21	1587	6Aビツ538 b	古代	-146146	-43863	0.27
1517	6Aビツ241	古代	-146133	-43821	0.11	1588	6Aビツ539 a	古代	-146130	-43826	0.07
1518	6Aビツ251	古代	-146131	-43809	0.04	1589	6Aビツ539 b	古代	-146146	-43863	0.30
1519	6Aビツ256	古代	-146140	-43815	0.07	1590	6Aビツ540	古代	-146147	-43858	0.03
1520	6Aビツ262	古代	-146135	-43818	0.14	1591	6Aビツ542	古代	-146123	-43814	0.14
1521	6Aビツ267	古代	-146137	-43813	0.08	1592	6Aビツ544 a	古代	-146112	-43829	0.20
1522	6Aビツ271	古代	-146141	-43825	0.13	1593	6Aビツ544 b	古代	-146146	-43857	0.06
1523	6Aビツ288	古代	-146103	-43831	0.29	1594	6Aビツ546 a	古代	-146127	-43824	0.14
1524	6Aビツ289	古代	-146101	-43826	0.22	1595	6Aビツ547 a	古代	-146131	-43818	0.07
1525	6Aビツ290	古代	-146010	-43827	0.37	1596	6Aビツ547 b	古代	-146146	-43857	0.08
1526	6Aビツ292	古代	-146101	-43829	0.06	1597	6Aビツ577	古代	-146149	-43838	0.13
1527	6Aビツ293	古代	-146101	-43828	0.26	1598	6A建物2	古代	-146142	-43822	
1528	6Aビツ295	古代	-146102	-43826	0.17	1599	6A建物3	古代	-146135	-43816	
1529	6Aビツ323	古代	-146111	-43826	0.29	1600	6A建物4	古代	-146130	-43799	
1530	6Aビツ330	古代	-146105	-43825	0.39	1601	6A建物5	古代	-146120	-43802	
1531	6Aビツ335	古代	-146108	-43829	0.54	1602	6A建物6	古代	-146125	-43815	
1532	6Aビツ336	古代	-146108	-43828	0.21	1603	6A建物7	古代	-146127	-43826	
1533	6Aビツ345	古代	-146106	-43823	0.43	1604	6A建物8	古代	-146116	-43825	
1534	6Aビツ346	古代	-146109	-43830	0.23	1605	6A建物9	古代	-146110	-43818	
1535	6Aビツ348	古代	-146110	-43827	0.31	1606	6A#01	古代	-146110	-43803	0.76
1536	6Aビツ349	古代	-146112	-43817	0.24	1607	6A#27	古代	-146112	-43798	0.30
1537	6Aビツ353	古代	-146106	-43816	0.19	1608	6A#28	古代	-146105	-43809	0.12
1538	6Aビツ354	古代	-146111	-43815	0.24	1609	6A#30	古代	-146113	-43805	0.20
1539	6Aビツ358	古代	-146109	-43821	0.42	1610	6A#32	古代	-146122	-43818	0.22
1540	6Aビツ367	古代	-146107	-43827	0.28	1611	6A土坑107	古代	-146132	-43823	0.05
1541	6Aビツ369	古代	-146114	-43830	0.36	1612	6A土坑108(土坑106・土坑163)	古代	-146131	-43827	0.31
1542	6Aビツ370	古代	-146113	-43822	0.27	1613	6A土坑152	古代	-146109	-43830	0.33
1543	6Aビツ375	古代	-146108	-43819	0.10	1614	6A墓2(ビツ308)	古代	-146102	-43818	0.24
1544	6Aビツ377	古代	-146107	-43818	0.21	1615	6A墓3(土坑121)	古代	-146129	-43810	0.61
1545	6Aビツ382	古代	-146113	-43819	0.30	1616	6A墓4(土坑188)	古代	-146146	-43853	0.05
1546	6Aビツ386	古代	-146110	-43823	0.41						
1547	6Aビツ387	古代	-146109	-43825	0.29						
1548	6Aビツ390	古代	-146102	-43826	0.17						

A-1、5 A 調査区以外の遺構

調査区の大半が豊臣期以降の再開発によって削平を受けている中、1 B・2 D・3 C 調査区などの東部地区以外の全ての地区で、僅かながらでも古代に遡る時期の包含層と遺構が検出され、この地域が古代以来西からの玄関口として重要な役割を果たしていたことを改めて知ることができる。

なかでも 2 C から 6 A 調査区は基盤層が浅いにも関わらず墓と溝と掘立柱建物が多数検出され、5 B 調査区の谷斜面部からは難波宮に近接した位置として意味のある鍛冶工房がみつかった。以下はこれらを中心に、詳細図掲載遺構から説明をすすめる。

6 A 溝 1・30 (1606・1609) 6 A 調査区の北東部から 4 条の溝が検出された。4 条の溝は、いずれも軸を南北にとり、長さは溝 1 と溝 30 がトレンチの範囲を越える 25m 以上、溝 27 はトレンチの南端で止まり、溝 28 はトレンチの中央南で攪乱により不明となっている。幅は溝 1 が 1.5m、溝 30 が 1.3m、溝 27 が 2 m、溝 28 が最大 4.5m である。遺物は溝 1 から多量に出土した。出土状況は部分的に集中するかたちが見え、時期はおおむね 8 世紀後半に比定される。

2 C 溝 8 (1606) 2 C 調査区の東に位置する。6 A 溝 1 につながる溝である。遺物は主に炭化物を含む埋土中から出土し、6 A 溝 1 と同様に、土師器皿・坏が完形に近い形で数個体出土するほか、土師器高坏・甕、須恵器甕、瓦などが多数出土した。

1 A 土坑 170・180 (1339) 1 A 調査区の西端に位置する。3 A 調査区につながる谷へ下降する斜面の肩付近に位置し、これらの柱穴以外は見つからない。規模は一辺が 0.6~0.7m の隅丸方形で、深さは 0.3m を測る。柱間の距離は 2.25m である。

2 B 土坑 8 (1346) 2 B 調査区の北西に位置する。後述する 2 B 谷 1 が南西方向に上がってきたその先端に位置し、調査区境界で包含層として確認された部分である。自然堆積の可能性もあるが、遺物の集中区もみられ、新羅系緑釉蓋の出土したのもこの地点である。

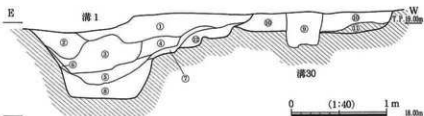
2 C 土坑 1 (1353) 2 C 調査区の北東隅に位置する、南北に長い溝状の遺構であるが、その南端から須恵器などが比較的集中して出土した。規模は南北 4.3m、東西 1.2m、深さ 0.2m である。遺物は上層中位に多くみられる。

2 C 土坑 8 (1355) 2 C 調査区の北中央に位置する。1 辺 1.0~1.1m を測り、底面では 1 辺 0.5m の方形を呈する。大形の柱穴の可能性もあるが、周囲に同類の遺構はみられない。遺物は須恵器瓶子・坏、土師器皿・把手・長胴甕、軒丸瓦などである。

6 A 土坑 107・108 (1611・1612) 6 A 調査区の西南に位置する。東西に隣接する長方形土坑である。土坑 107 は東西 2.5m、南北 1 m 以上で、深さは削平により 0.1m を測るにすぎない。土坑 108 は東西 1.7 m 南北 0.6m 以上で深さは同様に 0.2m にみえない。遺物の出土状況も共通し、遺構の中央に須恵器などの大形の破片が 1 点配され、その周辺に細片が散財する。特異な遺構である。

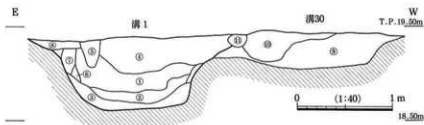
6 A 土坑 152 (1613) 6 A 調査区の北西に位置する。北東-南西に軸をもつ不整形な土坑、または 1 辺 0.5m 程度のピットが結合したものか明かでない。深さは 0.2m 程で、土器がまとまって出土している。

6 A 建物 2~9 (1598~1605)、5 B 建物 1 (1408) 6 A 調査区の全面と 5 B 調査区の北半に位置する。このうち建物 5 は溝 1・27・30 などに切られており、これらの建物群が 8 世紀後半より古いことを示している。



- ①~⑧、⑩、⑪：溝1 ⑫：溝30
- | | |
|---|-----------------------------|
| ① 10YR 6/6 明黄褐色 砂混じりシルト (炭酸鈣・土団粒を含む) | ⑩ 2.5Y 6/4 に近い黄色 シルト |
| ② 10YR 4/4 褐色 粗砂混じりシルト | ⑪ 10YR 5/6 黄褐色 砂混じり粘質シルト |
| ③ 10YR 4/3 に近い黄褐色 粗砂混じりシルト (炭酸鈣・土・炭化物を多く含む) | ⑫ 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト |
| ④ 10YR 5/6 黄褐色 砂混じりシルト | ⑬ 10YR 5/6 黄褐色 砂混じりシルト |
| ⑤ 10YR 5/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト (土・炭化物・鉄屑をわずかに含む) | ⑭ 10YR 7/8 黄褐色 砂混じり粘土 (11層) |
| ⑥ 7.5YR 4/6 褐色 粘質シルト | ⑮ 10YR 6/8 明黄褐色 砂混じりシルト粘土 |

図327 6 A調査区 溝1・溝30断面図 (北端)



- | | |
|--------------------------------|--|
| ① 7.5YR 4/3 褐色 シルト | ⑩ 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト |
| ② 7.5YR 4/2 灰褐色 シルト (炭少量混じる) | ⑪ 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト (やや暗い) |
| ③ 10YR 7/6 明黄褐色 シルト (炭混じる) | ⑫ 10YR 7/8 黄褐色 粘土 (上の方は10YR 6/4 に近い黄褐色シルト) |
| ④ 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト (炭少量混じる) | ⑬ 10YR 5/2 黄褐色 シルト |
| ⑤ 10YR 6/6 明黄褐色 シルト | ⑭ 10YR 5/1 褐灰色 シルト |
| ⑥ 10YR 6/6 明黄褐色 砂混じりシルト | |

図328 6 A調査区 溝1・溝30断面図 (南端)

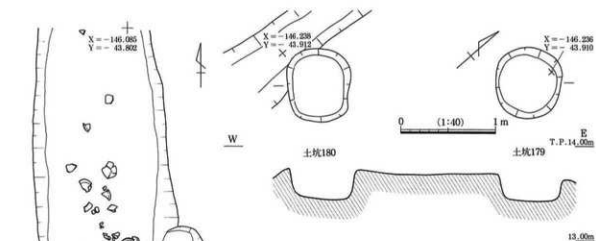


図330 1 A調査区 土坑170・土坑180平面・断面図



図329 2 C調査区 溝8平面・断面図

- | |
|--|
| ① 5YR 4/1 褐灰色 粘質シルト (黄褐色シルトブロック状に入る、酸化鉄含む) |
| ② 7.5YR 5/1 褐灰色 粘質シルト (炭化物含む) |
| ③ 7.5YR 4/4 褐色 シルト (灰色粘土混じる 炭化物含む) |
| ④ 10YR 5/1 褐灰色 シルト (10YR 7/6 明黄褐色 砂質土、炭化物を僅かに含む) |
| ⑤ 2.5Y 6/2 灰黄色 粘土 (10YR 7/6 明黄褐色 砂質土) |
| ⑥ ⑤の粘粒を溜したものの |
| ⑦ 2.5Y 5/1 黄灰色 粘土 (10YR 7/6 明黄褐色 砂質土 僅かに混じる) |
| ⑧ 10YR 6/6 明黄褐色 シルト (下位は灰色粘土) |
| ⑨ 10YR 7/6 明黄褐色 シルト (10YR 4/6 褐色 シルト混じる) |
| ⑩ 2.5Y 5/1 黄灰色 粘土 (土団粒含む) |
| ⑪ 7.5YR 5/3 に近い褐色 シルト (黄色シルトブロック、土団粒片含む) |

建物の規模はそれぞれ建物1が2×4間、建物2が4×3間、建物3が4×2?間、建物4が3以上×2間、建物5が4×2間(10×4.5m)、建物6が、2×2間、建物7が3以上×2間、建物8が5×3間(8×5m)、建物9が5間以上×2間(10~×4.3m)であり、柱握り方の規模は最小で0.5mで0.7m以上が大半を占める。なおそれぞれの軸・面積・柱間は別表のとおりである。

5 B 調査区金属生産関連遺構群

5 B 調査区の南中央に位置する。9 c 層を除去すると緩やかに南東に向かって開く小規模な谷状地形が現れ、茶褐色の砂混じりシルト(10層)がそれを埋める。この谷状地形に沿うように焼土坑(炉3~11)(1475~1482)および土器溜まりが確認された。

検出された大半の炉の上部は削平されており、下部が確認されたにとどまる。炉の平面形は円または隅丸方形を呈する。規模は最小(炉10:1481)で長軸0.6×短軸0.5m、最大(炉7:1479)で長軸2.4×短軸1.8m、深さは概ね15~30cm程度を測る。多くの炉内部には炭層や鉄滓が入っており、いずれも

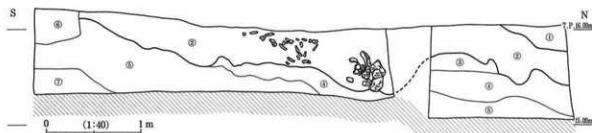


図331 2 B 調査区 土坑8断面図

- ① 7.5YR 5/8 明褐色 砂混じりシルト (炭化物・Fe・Mn含む、土器器小片散じる。9C層)
- ② 7.5YR 4/4 褐色 砂混じりシルト (粘性増す。炭化物・Fe・Mn土器器など多く含む。緑蝕出土。9C層)
- ③ 10YR 5/6 黄褐色 砂混じりシルト (Fe含む。9C層)
- ④ 7.5YR 5/6 明褐色 シルト混じり砂質土 (粘性あり。Fe・Mn含む)
- ⑤ 10YR 7/6 明黄褐色 砂混じり粘土~砂質土 (Fe・粘土部分多)
- ⑥ 10YR 5/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト
- ⑦ 粘土

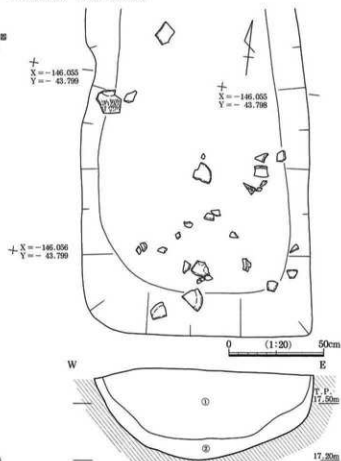


図332 2 C 調査区 土坑1平面・断面図

- ① 5YR 5/3 に近い赤褐色 粘質シルト (土器器片、炭含む)
- ② 2.5YR 6/1 赤灰色 粘質土 (土器器片、炭含む)

壁・床面とも堅緻に焼き締まっている。また、炉7・11（1479・1482）の埋土や炉底からは多量の焼土塊が検出された。炉群の周辺には多量の鉄滓（約11.3kg）や羽口が廃棄され、炉埋土や周辺土壌から鍛造剥片・粒状滓が採取されることから多くのものが鍛冶炉と考えられる。一方で、炉7・11の周辺土壌や埋土からは鍛造剥片・粒状滓が検出されていない。このことから考えて両者は炭窯の可能性が高い。

炉周辺に広がる土器溜りからは多量の須恵器・土師器を主体とし、鉄製品、鉄滓や焼けた礫、砥石が出土した。また、滑石製白玉が土器群30の土師器壺内から4点、炉11埋土から1点出土している。

調査区南側では一部に9c層が残り、その上面で東西方向の5B溝50・51（1411・1412）が検出された。溝底から多量の土師器が出土している。南東部では長辺1m×短辺0.5mほどの角礫を使用した南北方向の石列を2列確認した。石列内部からの出土遺物がなく性格は不明である。調査区の西側コーナーに位置する土器群62（1466）からは、多量の須恵器・土師器と最下層から木製品が1点出土した。

また調査区中央部の10層を除去すると、南東に開く谷状地形となり、10層上面で確認された状況よりも谷斜面は急な角度で落ち込む。西側部の斜面では直径5～8cm程度の杭跡が多数検出された。杭はその痕跡から斜面に直交するように打ち込まれたと思われる。なお、掘削深度限界のため谷埋土は完掘していない。

3 A 調査区金属生産関連遺構群

3 A 調査区の東端に位置する。土器溜り1（1368）は当該地区の東側はほぼ全体に広がるように検出された。遺物には土師器坏・高坏・鉢・壺・須恵器坏・蓋・高坏・甃・提瓶・壺・壺・埴輪・羽口・鉄滓・鉄斧・

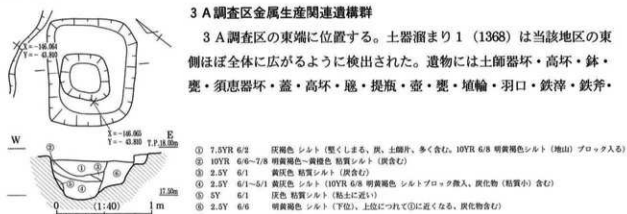


図333 2 C 調査区 土坑8 平面・断面図

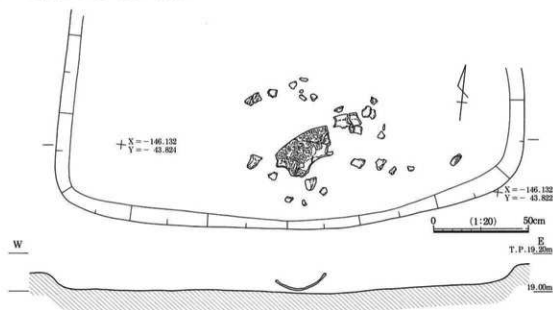


図334 6 A 調査区 土坑107 平面・断面図

獣骨などがある。最上面での遺物は包含層から露出した状態で検出された。ほとんどのものが細破片であり、層内に混在している。

炉5(1364)・鍛冶炉6~8(1365~1367)・土坑359・360(1385・1386)は、包含層を掘削した後の最下面の遺物とともに検出した。

炉5・鍛冶炉6は最上面の遺物除去中に検出した。炉5は直径約0.3mの炉壁残存である。深さ約0.1mと浅く、また炭も少量しか検出されなかったため、他とは区別して炉とのみ記述した。

鍛冶炉6はトレンチの北側で、炉内部の炭とそれを囲む炉壁が円形に検出された。規模は直径約0.9m・深さ約0.5mである。南側には炉壁の突出部がある。

この用途・目的については不明

である。断面の観察によれば、炉壁は表面から1~2cmは被熱によって褐色に変化しており、部分によっては還元されて灰褐色になっている。さらに約8cmまでは余熱によって灰褐色に変化しているが、これも部分によってはみられない。炉壁にはとくに粘土などの貼り付けを行なった形跡はなく、底部は砂層上に炭が堆積しているだけで焼け跡は全くみられない。

鍛冶炉7は鍛冶炉6の清掃中にそれよりやや北東側で、鍛冶炉6に切られた状態で検出された。炉壁は1/4程度残存しており、復原直径は約0.93mである。鍛冶炉6底部の下層から炭が円形に検出され、これが鍛冶炉7の炉壁と重なることから、鍛冶炉と推定される。

鍛冶炉8はトレンチの南側で、東側半分を残存した状態で検出された。規模は推定で直径約0.7

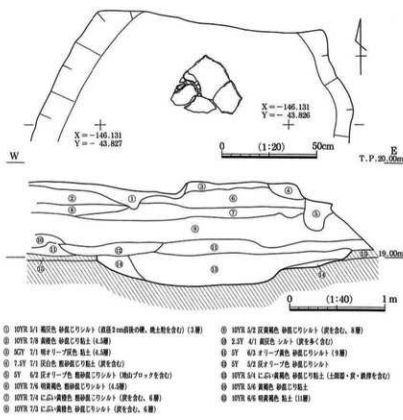


図335 6A調査区 土坑108平面・断面図

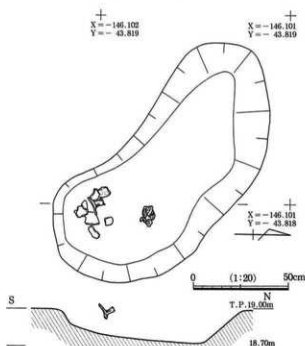


図336 6A調査区 土坑152平面・断面図

mになる。底面までが浅く、作業終了後に上部および西側がなんらかの削平を受けたと考えられる。この鍛冶炉8内部と西側から獣骨が多数出土している。

土坑359はトレンチ東側で南北約1m・東西約1.2mにわたって検出された。東側は矢板によって切られている。深さは約0.2mで中心に向かって緩やかに落ちている。遺物は南西の角に集中しており、須恵器壺・甕・高坏・坏身・坏蓋・土師器坏などがある。このうち須恵器高坏・坏蓋・土師器坏は、重ね

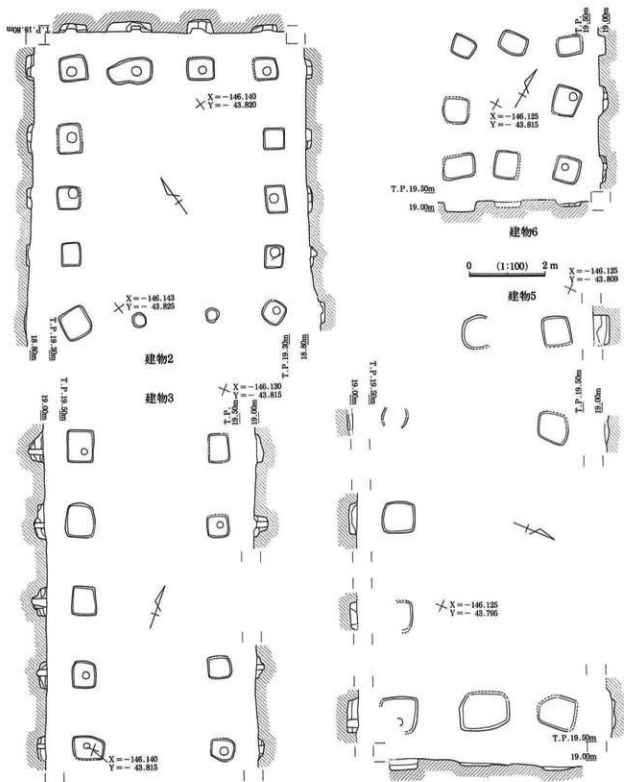


図337 6A調査区 建物2・3・5・6平面・断面図

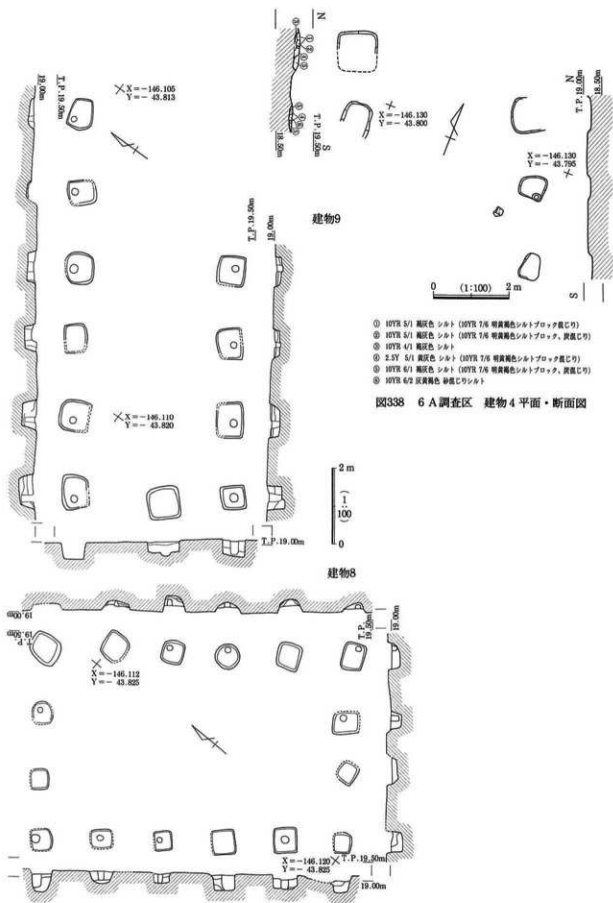


図339 6A調査区 建物8・9平面・断面図

た状態で検出された。また底面よりやや浮いた状態ではあるが、鉄製の斧が出土している。全長14ca・最大幅5.6ca・袋状部内径3.7caの袋状鉄斧で、比較的丁寧な作りである。

土坑360は鍛冶炉8のやや北側で、東西約0.8m・南北約0.5mにおいて検出した。遺物は須恵器甕・獣骨などが出土している。

3 A 土器溜まり2 (1369) 3 A 調査区の北西に位置する。形状としては等高線に平行しながら東西方向の溝状を呈している。規模は長さ約5m・幅約1.2m・深さ0.1~0.15mである。埋土は焼土・炭化物を含み、付近からはそのような土層が検出されなかった。また、遺物は主に遺構の底面から出土しており、土師器皿・鉢・甕・甎・須恵器杯・蓋・壺・軒丸瓦などがある。破片は点在するものの完形に復元可能なものがある。

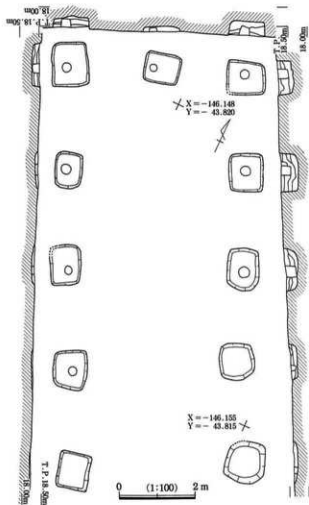


図340 5 B 調査区 建物1平面・断面図

3 A 土器溜まり2 (1380) 3 A 土器溜まり2の南側にあり、隅丸方形を呈する。各壁ともほぼ垂直にたちあがり、深さ0.7mである。遺物は土師器杯3・須恵器杯蓋1であり、土坑の北西肩部から出土した。

2 B 調査区谷1 (1341) 下層の土器群

2 B 調査区の北部で確認された。地形は調査区の北東方向に向かって大きく落ち、9 b 層除去後に北東-南西方向を軸とする谷1が検出された。規模は深さ2~2.4m、幅約10mを測り、両肩は急な傾斜で下降する。谷の底部は比較的平坦で、幅約6mを測る。

谷1周辺の層序は、9層および谷1下層からなる。谷1の埋土は大きく3層に分けることができる。上層は9 b 層に対応するもので、厚さ約0.4mを測る。遺物の出土量は少なく、細片が多い。自然堆積により、窪地状になっていた谷1が埋まった際に形成された層である。中層は9 c 層に対応し、厚さ約1.2mで、さらに2層に分けることが

表11 掘立柱建物表

建物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
方向	N-25-W	N-34-W	N-21-W	N-25-W	N-66-W	N-22-W	N-38-W	N-37-W	N-56-W
柱間(桁/梁)	2.7/2.35	1.7/1.75	1.95/1.8	27/2.25?	2.5/2.1	1.6/1.4	1.9/1.7	1.6/1.6	2/2.2
面積	48m ² ~	33m ²	28m ² ~	27m ² ~	45m ²	9m ²	20m ² ~	40m ²	42m ² ~

できる。

9c 上層は0.7mの厚さがあり、人為的に埋められている。シルトを基本としているが、粘土ブロックや炭化物などが含まれており、遺物が多く出土している。遺物は土師器・高坏・甕・台付鉢・甗や須恵器・高坏・壺・甕・甗・提瓶・平瓶などである。遺物の中では須恵器の割合が高く、大形の甕や甗が多くみられる。特に甗の出土量が多く、器種に偏りがみられる。意図的に投棄されたと考えられる状況の土器群なども検出されており、復原可能な遺物も多い。

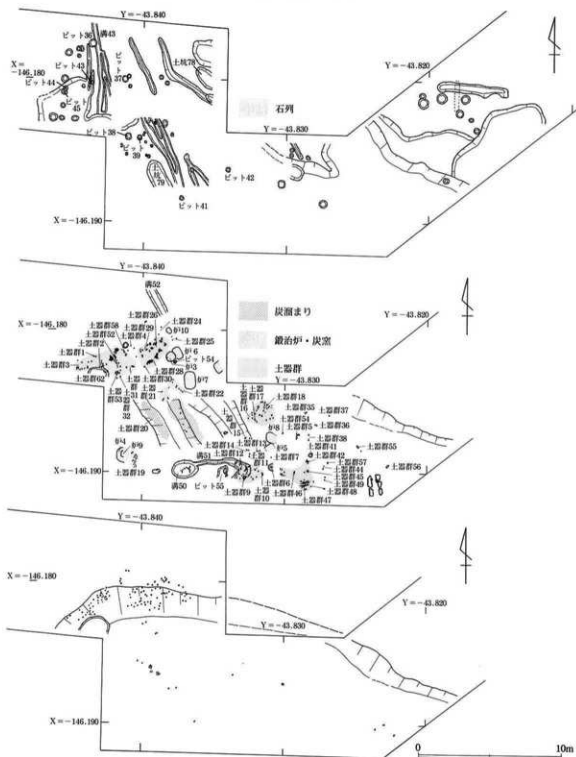


図341 5B調査区 遺構配置図

9c下層は厚さ約0.5mを測り、砂質土を基本としているが、9c上層と同様に粘土ブロックや炭化物などを含んでおり、人為的に埋められた様相を呈している。ただ、全体に遺物の量は少なく、意図的に投棄されたと考えられるような土器群は検出されていない。また谷1の中央部分にのみ堆積していることから、自然堆積の可能性も考えられる。

谷1下層は基本層序の10層に対応し、厚さ0.5~1mを測る。粘質シルトを基本としているが、砂質土や粘土がブロック状に含まれており、中層同様に人為的に埋められた様相を呈している。谷1の底部で土器群が検出されており、遺物は土器群の周辺に集中している。

谷1の堆積状況は、上層から9c上層まではほぼ北西部から南西部に向かって下がっている。また、9c上層でまとまって検出された土器群は、谷1の中心からやや北西側に偏っている。このことから、谷1は、最終的には調査区外の北西部から人為的に埋められたことが推定される。

谷1下層の堆積状況は上層と異なっている。谷1下層は中央部分から両端に向かって厚く堆積しており、谷1中層にあたる9c下層が、その窪んだ中央部の部分に堆積している。さらに谷1下層は中央部に粘質シルトが多く、端部に砂質土が多くみられる。このため、底部中央の土器群をある程度埋めた後、周囲を砂質土で埋め、その後、中央部の窪んだ部分に9c下層が堆積し、9c下層上面ではほぼ平坦な谷

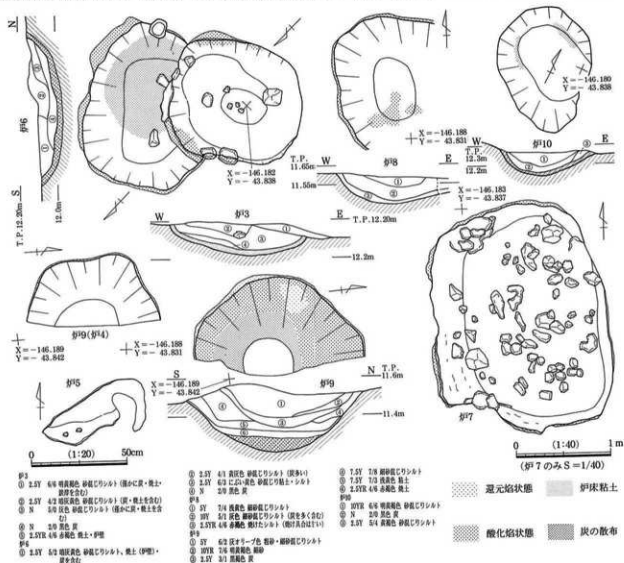


図342 5B調査区 殿舎炉平面・断面図

底となった可能性が高い。

谷1下層では、谷底の中央部分において、須恵器を中心とした土器群が検出された。9c上層でみられた土器群と異なり、完形のものが多い。投棄されたものというより、意図的にこの場所に据えられたものと考えられる。ある程度のまとまりが認められ、ここでは4カ所の土器群に分けられる。

土器群は、土師器があまり出土しておらず、ほとんどが須恵器で占められている。器種は須恵器大甕・壺・甕・提瓶・平瓶などが多く、坏や坏蓋などはほとんどみられない。土器群の器種構成にはかなりの偏りがあり、意図的に器種の選定がおこなわれている印象をうける。また貯蔵形態の器種が多いようであるが、土器内の内容物は確認されなかった。谷1底部で検出された土器群は、以下のグループに分けることができる。

土器群1 須恵器大甕を中心に須恵器台付甕1点・平瓶1点・坏蓋1点が周囲に並んでいる。

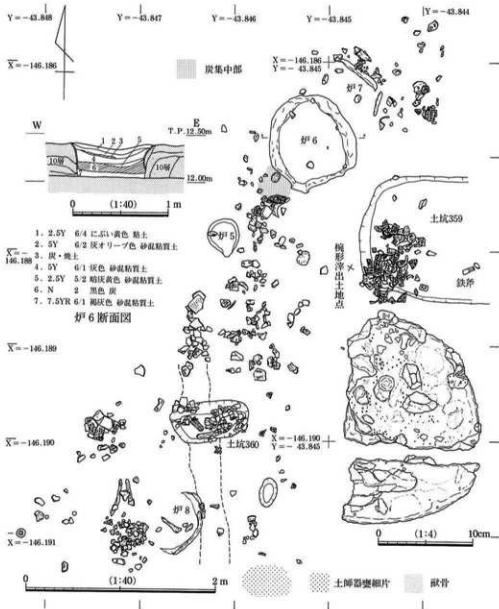


図343 3A調査区 土器溜まり・鍛冶炉検出状況図・鍛冶炉6断面図・椀形埴実測図

土器群 2 須恵器大甕を中心に須恵器提瓶 3 点・平瓶 2 天・甕 1 点・壺 3 点・高坏 1 点・筒形器台 1 点などが集中している。

土器群 3 完形の須恵器壺が 2 点並んでおり、その下部から須恵器高坏坏部や坏などが検出されている。

土器群 4 谷 1 奥部の溝状落ち込みの中から須恵器甕 1 点・甕 1 点・土師器甕 2 点・鉢 1 点などが検出され、周囲に破片が散在する。

5 B 墓 1 (1474)

墓 1 は 5 B 調査区のほぼ中央北寄り、谷の肩から北に約 11m 離れて位置する。基盤層上面で検出されたが、中世以降の土地利用による削平が著しく、確認された掘り方の深さは約 15cm であった。

平面形は南北に軸をもった長方形で、2 重の掘り方から構成される。規模は、外側の掘り方が長軸 2.5m、北の端軸 1.0m、南の端軸が 0.9m、内側の掘り方は上端で長軸が 1.55m、短軸が 0.75m を測る。内外の掘り方の間は平坦で、規模は北の間隔が 0.4m、南の間隔が 0.45m、東の間隔が 5cm、西の間隔が 12cm である。

内側の掘り方の内部には、中央やや南と北端部に沿って 2 条の溝が検出された。規模は、長さが 0.5m、0.7m で中央の溝は内側の掘り方の幅にほぼ対応する。幅は 5cm、深さは 3cm ほどである。また、内側の掘り方の四隅からは、 5×3 cm、深さ 5cm 程を測る長方形の穴が検出された。埋土は材の腐食した痕跡を示す灰色粘土である。穴の間隔は南北 1.2m、東西 0.6m である。

断面の観察により、内側の掘り方の範囲で灰色粘土の堆積が認められた。堆積の状況は、南端が比較的急な立ち上がり、北端は緩やかな傾斜をもち、いずれもさらに上方へその堆積を続ける。層厚は 10~15cm である。またこの灰色粘土層に混じり、炭化木の細片が内側の掘り方の南および西方で、細砂の塊がやはり内側の掘り方の四隅に近い位置で検出された。

内側の掘り方内から鏡 1 面・水晶製数珠玉 1 個・銭貨 29 枚および板材等が出土した。

銭貨は内側の掘り方下端の北端から 0.2m、東辺から 0.1m に位置する。前記の灰色粘土を精査中、内側の掘り方北端より 25~60cm、東辺より 15~30cm の範囲で木質の残存が認められ、銭貨はその範囲の北部にあたる部分から検出された。当初銅錆による緑青が検出されたため、それを浮かび上がらせる作業をおこなっていく過程で、木質が円形に現れ、最終的に、円柱状に積み重ねられた銭貨の崩れた姿が、

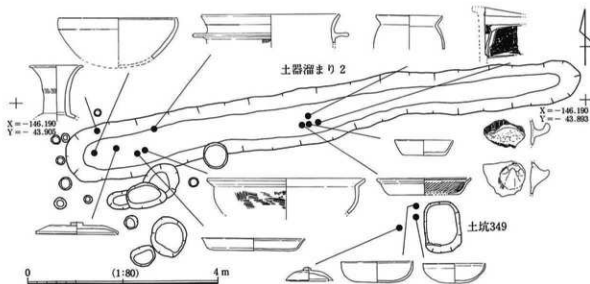


図344 3 A 調査区 土器溜まり 2 出土状況図

木製の円形容器（立ち上がりは1cm以下）におさまった形で確認された。

鏡は銭貨の南10cm未満の位置から検出された。この位置は先に触れた木質の残存範囲の南部にあたり、少なくとも2枚以上重なった材が明瞭に確認されていた。鏡はこの材を除去した後に検出された。鏡面を上とし、下面にはやはり材の薄い痕跡が認められた。

数珠玉は内側の掘り方の北端から15cm、西辺から20cmの位置で検出された。1個体単独の出土であり、周囲に関連する資料の痕跡は確認できなかった。

6 A墓2 (1614)

調査区北端の中央やや西寄りで検出された火葬墓である。墓の造営された位置は緩やかに南から北へと上る丘陵の最高点にほど近い場所に当たる。

墓は後世の土坑に切られており、北側の掘り方が明瞭ではないが平面形は隅丸方形を呈する。規模は南北0.8×東西0.6mを測る。また、削平を著しく受けており検出面からわずか15cm程度しか遺存していなかった。なお、墓の軸は真北ではなく北で西に約15度振っている。



図345 2 B調査区 谷1内遺構配置図

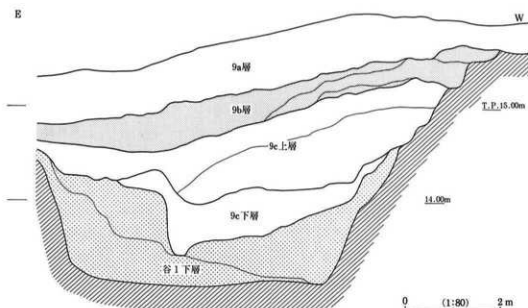


図346 2 B調査区 谷1断面図

墓は須恵器の有蓋短頸壺を骨蔵器として使用しており、海獣葡萄鏡を1面副葬する。骨蔵器の中には灰・焼骨を多量に含む淡黒灰色シルトが充填されていた。鏡は骨蔵器の北外側に鏡面を上にして置かれていた。鏡の下には板材が遺存していることから木箱（鏡箱）に納められて副葬された可能性が高い。

この墓の構築方法は以下の手順が推定される。

- 1、平面隅丸方形を呈する土坑を掘る。床面は基盤層にまで到達する。本来の深さは削平を受けているため判然としない。しかし、納められた骨蔵器が形態などの特徴からその器高は30cmを越えると考えられるため、墓自体の深さは0.5～1m程度は有していたものと推定される。
- 2、床面に黄褐色砂混シルトを4～5cm程度の厚さで敷き詰め、簡易な台状の基礎を作る。
- 3、台の上に暗灰色砂混シルト（灰・炭を多量に含む）を4～5cm敷き詰め、先ず、鏡を入れた木箱を土坑中央やや北西寄りに置き、その後骨蔵器を土坑中央に据える。

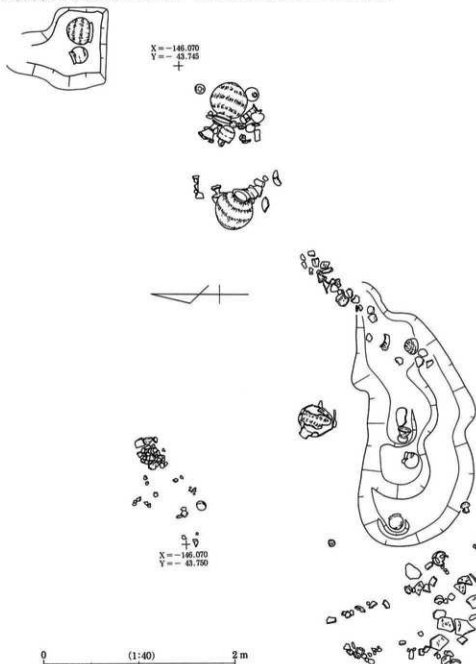


図347 2B調査区 谷1内土器群3・4出土状況図

4、骨蔵器・鏡を入れた木箱を覆い隠すように、暗灰色砂混シルト（灰・炭を多量に含む）を円または角錐状に積み上げる。

5、掘り方と円または角錐状に積み上げた暗灰色砂混シルトの間に裏込めのために粘土ブロックを多く含む灰褐色砂混シルトを詰め込む。

なお、墓2の造営時期は骨蔵器である須恵器や鏡から考えて、8世紀中頃と思われる。

6A墓3 (1615)

6A調査区の南東で、墓2の南南東27mに位置する。平面形は南北に軸をもった長方形を呈する。規模は上端で長軸1.7m、短軸0.65mを測る。基盤層を主な埋

土としていたため、範囲の認定に困難な部分があったが、わずかに混入している土器片をてがかりに深さ0.5mの底部まで調査をおこなった。

掘削の過程で3段階に分かれる面を確認した。第一の面はおおむね平坦な底面をもち、下端の規模は長軸15.5m、短軸0.45mを測る。掘り方の北西隅から南へ0.45m、西端から0.1mの位置で皿部を内側に向けた黒色土器高台付皿が壁に接する形で検出された。また墓境内での深さはこの段階での底面に近い位置にあたる。

第二の面は底部中央が舟底状に下降するもので、南端は幅0.15m程が内側に傾斜した段状を呈する。この段階において底面の形状は長軸に対しても舟底状を呈し、南北両端から下降した底部は、中心部を最深部とする。またこの段階において底面を分割する溝がみられる。溝は短軸に平行して3条あり、それぞれ北の下端から $0.2 \cdot 0.8 \cdot 1.3$ mを測る。長さは北端の溝が0.35m、中央と南の溝が0.5mである。なお、この面において底面の北端から0.3mの位置で歯が検出された。範囲は約10cm四方におよび、遺存状態はけって良くないが、一部形状の明確な資料も残されていた。

第三段階は墓墳の長軸に平行して中央に幅約0.2mの溝がもうけられる状況である。床面は墓墳南端の段から下がった位置で、南北1.4mの規模を測り、溝はさらにその内側に長さ1.2m確認できる。底面と溝との間は東西および北がそれぞれ0.15m、南が5cmほどの平坦面または斜面となっている。なお溝の断面は逆台形または先端の丸い三角形である。

なお棺を推定される灰色粘土は第二段階直上で確認された薄い層のみであり、側板を復原する立ち上がりのラインも確認されなかった。

6 A 墓4 (1616)

調査区南西中央部で検出された火葬墓である。墓が造営された位置は東から西へ緩やかに下降する丘陵の南端で、その南に展開する東西方向の谷肩部まで0.5mの場所である。

墓は後世の削平を受けたものと考えられるが、掘り方は明瞭に確認された。平面形は一辺が0.6mを測る正方形を呈する。深さは検出面から18cm程度しか遺存していなかった。墓の軸は真北に持つ。

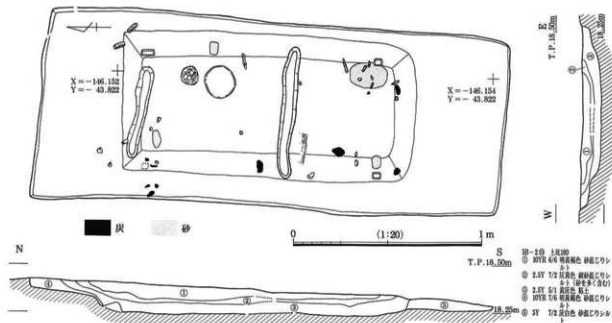


図348 5 B調査区 墓1 (土坑180) 平面・断面図

墓は断面・平面の観察から木製容器を骨蔵器として使用していた可能性が高い。木製容器は南北0.5 m×東西0.3 m・器高0.1 m程（全て外法）の箱形が推定される。器壁の厚さは3～5 cm程度と思われる。骨蔵器内部には灰・焼骨が充填されており、骨蔵器内西側中央部から無孔の水晶製丸玉が1点出土した。水晶丸玉は表面に剝離がみられ、僅かに濁りが認められることから遺骸と供に焼かれたものであろう。

この墓の構築方法は以下の手順が推定される。

- 1、平面正方形の土坑を掘る。床面は基盤層にまで到達する。本来の深さは削平のため判然としない。
- 2、掘り方中央部に骨蔵器と同じ大きさの範囲に炭を敷き詰める。厚さは2～3 cm。炭の塊はみられず、細かなものを使用。
- 3、炭を敷いた上に骨蔵器を据える。
- 4、骨蔵器と四壁の間に灰混じりの炭を詰める。炭は3 cm大の塊もみられるが基本的に細かなものを使用。
- 5、骨蔵器を覆い隠すように断面「凸」の字状に炭を積み上げる。炭は3 cm大の塊もみられるが基本的に細かなもので構成され、灰は混じらない。
- 6、窪んだ部分を基盤層の黄橙色砂混シルトで埋める。

墓4の造営時期は年代決定可能な出土遺物がなく明確に得ないが、墓の構造の類例から考えて奈良時代と考えられる。

以下、詳細図の無い遺構について説明を加える。

3B調査区9 a層上面

検出された遺構は井戸5基、南北に走る溝5条、東西に走る溝7条、土坑、ピットがある。

井戸22 (1129) はトレンチ南東側で検出された木製枠の円形井戸である。東側には幅3.5mの溝が取りつく。2段の円形の掘り方を持ち、上段の上端の径は約4 m、下段の掘り方は径1.5mである。井戸枠は径0.75mで、桶形の木枠は2段確認された。2段目の木枠は幅6～8 cm、厚さ2 cm、長さ1.1mの板材37枚で作られている。1段の木枠に対してタガは3段設けられている。埋土は1段目には黄褐色～青灰色の砂が、2段目には黒灰色腐植粘質土がみられた。遺物は丹波の播鉢、土師器、板材などが出土している。時期は豊臣大坂城築造以降に下がる可能性もある。

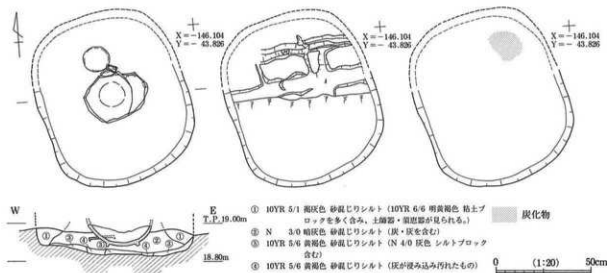


図349 6 A調査区 墓2 (ピット308) 平面・断面図

井戸28 (1337) は調査区北西隅で検出された木製枠の方形井戸である。規模は木枠の一边約0.9m、堀方は不明である。深さは検出面から約1m掘削して木製の曲物を検出し、約1.5mで底を確認した。

構造としては四隅に直径10~15cmの丸太の杭材を打ち、その間を幅約5cmの板材でつないで補強している。この板材は残存している高さ0.6mの上下に2段使用している。これらの横板の外側に残存長0.7~0.8m・幅0.3~0.45m・厚さ2~3cmの板材を一边に2枚ずつ立てている。さらにその外側に板材と板材の隙間を埋めるように、幅約10cm・長さ0.7~0.8m・厚さ1~2cmの板材を立てている。これは板材の外側だけではなく、杭材の外側にも立てられている。

曲物は直径約40cm・高さ約23cmで、薄く削った2枚の板を木皮で綴じ合わせて作っている。埋土は粘性の高いシルトで遺物はほとんどみられない。

遺物は曲物井筒を取り上げた後の底部掘り方から少量出土している。遺物の種類は、瓦器碗・皿、土師器皿、須恵器甕片、土師器高杯片などである。瓦器碗は和泉型Ⅲ-3~Ⅳ-1に該当し、底面に粗い平行暗紋、体部に間隔の空いた暗紋が施されている。外面に磨きはみられない。高台はほとんど形骸化している。口径は14cmである。瓦器皿は面取りにより口縁部が断面三角形を呈するもので、口径は9cmを測る。13世紀後葉と考える。

250の土釜は井戸28の北東隅から東に約1.2m、北に0.4mの位置から出土した。出土は掘削限界に近い11層の砂層中であり、正置で、底部を失っているものの、胴部以上がほぼ完形の状態で見出された。単体の出土である。9層までの調査を終え、包含層掘削の中での出土であったため検出面、掘り方など

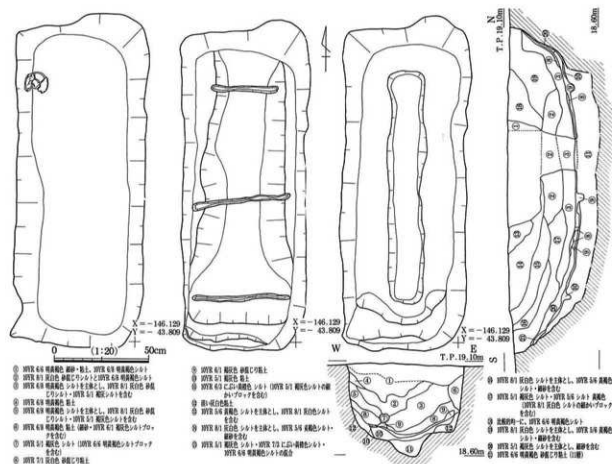


図350 6 A調査区 墓3 (土坑121) 平面・断面図

は不明である。ただし、土釜内の埋土が黒褐色シルトであったことなどから移動したものととは考えにくく、類例により、井戸枠底部の可能性が考えられる。

土坑には平面形が円形、方形、不定形な物があり、特に土坑165・166（1196・1197）のような不定形なものには腐食物や灰が多量にみられた。また、土坑168（1198）には黄色の粗砂がつまっていたが遺物が含まれず性格は不明である。溝は8d層でも見られた「目」の字状になるものがある。大半の溝は明瞭ではなく、遺物の出土量は少ない。なお、9a層掘削に際してその下層で検出された谷流路跡からは重圓文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、羽口、鉄棒、須恵器などが出土している。

5B井戸16（1407） 調査区南中央に位置する。規模と構造は上端が1辺4.5mの隅丸方形であり、上部の井戸枠は失われていたが、下部には横板組みの井戸枠が残されていた。底部は未完掘で須恵器壺、スラグなどが出土している。

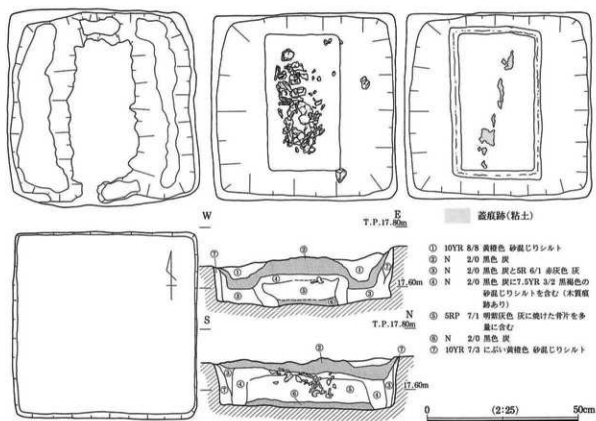


図351 6A調査区 墓4(土坑188)平面・断面図

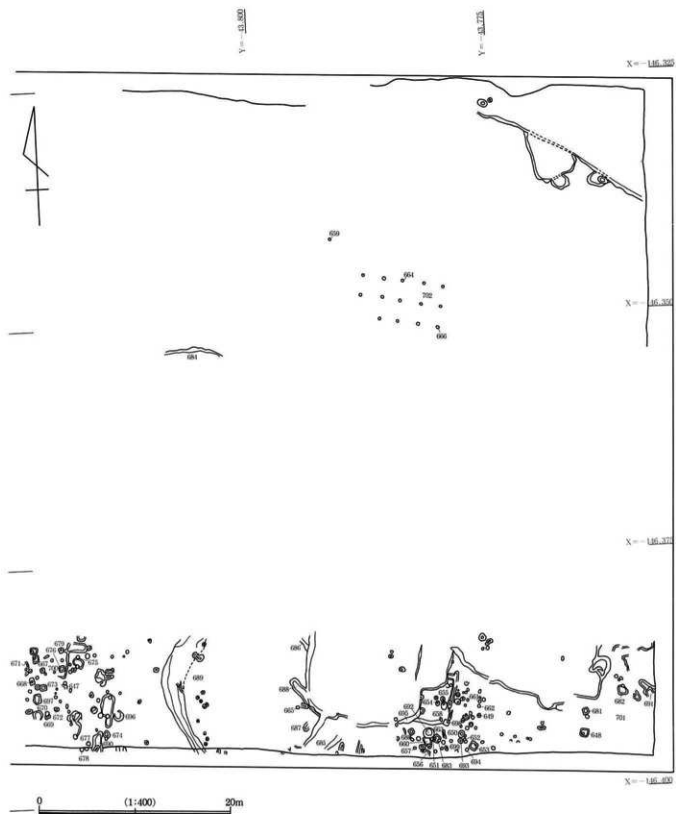


図352 遺構配置図（5 A調査区）

表12 遺構掲載番号表(5A調査区) 1

番号	遺 構 名	時期	X座標	Y座標	深さ
647	5Aピット	古代	-146387	-43822	0.06
648	5Aピット060	古代	-146395	-43768	0.10
649	5Aピット165	古代	-146392	-43779	0.24
650	5Aピット166	古代	-146394	-43781	0.50
651	5Aピット169	古代	-146395	-43784	0.05
652	5Aピット170	古代	-146394	-43781	0.25
653	5Aピット171	古代	-146396	-43780	0.33
654	5Aピット172	古代	-146391	-43783	0.30
655	5Aピット173	古代	-146391	-43783	0.28
656	5Aピット174(土坑268)	古代	-146396	-43784	0.07
657	5Aピット175	古代	-146395	-43786	0.20
658	5Aピット176	古代	-146392	-43783	0.39
659	5Aピット178	古代	-146342	-43792	0.23
660	5Aピット180	古代	-146395	-43785	0.18
661	5Aピット181	古代	-146391	-43779	0.22
662	5Aピット182	古代	-146391	-43779	0.25
663	5Aピット183	古代	-146394	-43784	0.07
664	5Aピット277	古代	-146346	-43785	0.09
665	5Aピット282	古代	-146390	-43798	
666	5Aピット284	古代	-146351	-43782	0.10
667	5Aピット302	古代	-146386	-43824	0.07
668	5Aピット303	古代	-146387	-43826	0.05
669	5Aピット304	古代	-146390	-43824	0.23
670	5Aピット305	古代	-146390	-43824	0.39
671	5Aピット313	古代	-146385	-43826	0.08
672	5Aピット314	古代	-146390	-43823	0.46
673	5Aピット315	古代	-146387	-43825	0.28
674	5Aピット316	古代	-146392	-43818	0.54
675	5Aピット317	古代	-146384	-43821	0.02
676	5Aピット318	古代	-146385	-43822	0.06
677	5Aピット319	古代	-146393	-43820	0.13
678	5Aピット320	古代	-146394	-43820	0.16
679	5Aピット322	古代	-146383	-43822	0.16
680	5Aピット322 a	古代	-146394	-43796	0.06
681	5Aピット322 b	古代	-146392	-43768	
682	5Aピット333	古代	-146390	-43764	0.19
683	5Aピット334	古代	-146394	-43764	0.03
684	5A溝075	古代	-146353	-43807	0.35
685	5A溝078	古代	-146393	-43796	0.03
686	5A溝079	古代	-146394	-43797	
687	5A溝080	古代	-146390	-43798	0.07
688	5A溝107	古代	-146389	-43798	
689	5A溝106	古代	-146388	-43811	0.34
690	5A溝112	古代	-146393	-43819	0.20
691	5A土坑093	古代	-146390	-43761	0.09
692	5A土坑258(土坑266)	古代	-146394	-43785	0.08
693	5A土坑259	古代	-146395	-43781	0.44
694	5A土坑260	古代	-146396	-43781	0.15
695	5A土坑267	古代	-146392	-43787	0.54
696	5A土坑294	古代	-146391	-43817	0.01
697	5A土坑295	古代	-146398	-43825	0.10
698	5A土坑294	古代	-146393	-43783	0.07
699	5A竪立柱建物1	古代	-146391	-43783	
700	5A竪立柱建物2	古代	-146348	-43785	
701	5A竪立柱建物3	古代	-146393	-43765	
702	5A竪立柱建物4	古代	-146348	-43785	

A-2、5A調査区の遺構

溝75 (684) 調査区の北半西南端を西から緩やかに南へ弧を描いてはする溝で、南側の肩は削平され、溝の中心から北側の肩のみが検出された。後世の削平が著しく、底面から15cm程度しか残っていない。埋土には須恵器、土師器がかなり含まれている。7世紀代の所産と考えられる。

溝78 (685) 調査区の南半中央に位置する。規模は残存する上端で約3m、下端で1.5m、長さは4mである。南北を軸とし、西に彎曲している。溝の北は江戸時代の粘土採り穴で削平され、南は調査区外へのびる。埋土は3層に分けられ、そのいずれの層からも7世紀代の土器が出土している。

溝108 (689) 調査区の南半西に位置する。南北を軸として東に彎曲する溝である。残存する規模は上端が2m、下端が1mで、長さは12mを測る。溝の南は調査区外へのび、北は江戸時代の粘土採り穴で削平されている。遺物は中層より検出された。またこの溝の北延長上から、おそらく溝内へ落ち込んだ形で円筒埴輪が1個体出土した。

ピット315・318・322 (673・676・679) 調査区の南半西端に位置する。掘り方の規模は0.6m、柱間の距離は2mであり、深さは0.25mの残存である。

谷 調査区の北東隅で北東へ下降する谷肩が検出された。掘削深度限界により未完掘であるが、隣接する大阪市中央体育館で検出されていた谷からの続きであり、その延長上には1A調査区北半の谷が位置している。

また南半中央の一群は少なくとも4時期の切り合いをもつ。地形はわずかに南に下降しており、南半部では褐色の古代遺物包含層が堆積しており、大半のピットはこの包含層の上面から検出された。このうちピット171・ピット166・土坑264・ピット334・土坑268 (653・650・698・683・656) は1つの建物を構成する可能性が高く、柱間の距離は1.8～2m、掘り方の規模は平均0.8mである。またピット180は長方形の掘り方をもつが、柱痕跡は南に寄った1カ所であり、先の建物に先行する時期の遺構とされる。

その他、この時期の建物を構成するピットは、調査区の南半東端および南半中央、そして北半中央から検出されている。このうち南半東端のピットは土坑93・ピット333・

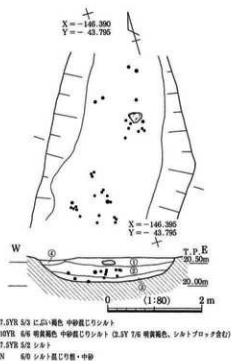


図353 5A調査区 溝78平面・断面図

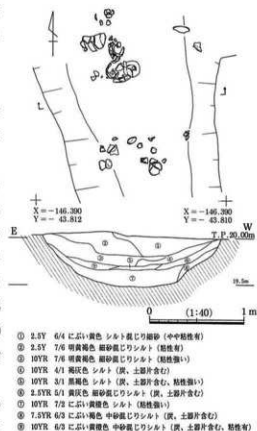


図354 5A調査区 溝108平面・断面図

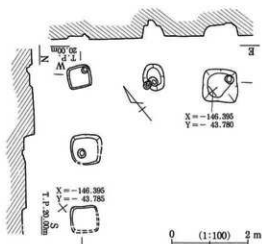


図355 5 A調査区 掘立柱建物1平面・断面図

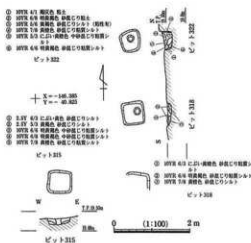


図356 5 A調査区 掘立柱建物2平面・断面図

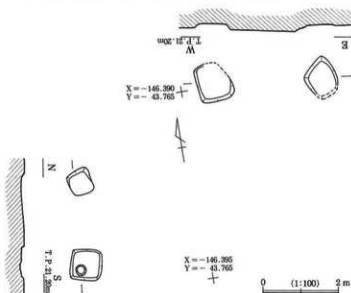


図357 5 A調査区 掘立柱建物3平面・断面図

ピット332・ピット60であり(691・682・681・648)、一辺0.8mを測る平面方形で、柱間の距離は2.2~2.5mで、上部はかなり削平され、深さは検出面から5~15cm程度しか残っていない。僅かに確認できる柱痕跡から柱は直径15cm以上と考えられる。埋土からは須恵器の小片が数点出土したが、時期は明確にしがたい。

北半中央のピット群(664・666など)は直径25cm、深さ20cmを測る。柱痕跡から考えると柱の太さは15cm程である。この柱穴群は北に約10度振り東西に軸を持つ、2間×4間の総柱の掘立柱建物に復元できる。

柱間は2.1mを測る。柱掘り方から出土した土師器の高台付き皿から、時期は11世紀~12世紀頃に比定される。

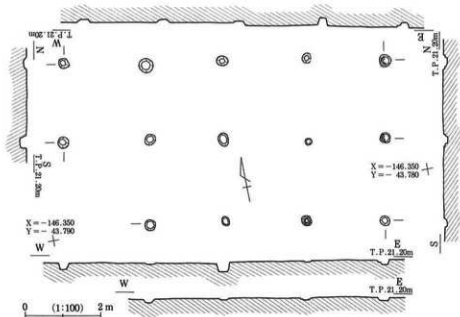


図358 5 A調査区 掘立柱建物4平面・断面図

B、遺物

豊臣大坂城の築造を遡る時期の遺物は、わずかに平安時代～室町時代の土器・陶磁器がみられるが、ほとんどは6～8世紀の土器器・須恵器および金属加工関連の遺物で占められる。その主な出土地点は、3A～5B調査区の谷埋土および6A調査区の溝であり、出土状況はかならずしも良好ではないが、難波京とその前の時代において、この地が重要な役割を果たしていたことを知るには十分な量と種類の遺物が出土した。

a、土器類

① 2 C 溝 8

12～14・16は土器器皿である。12の口径は8.6cm、器高は2.0cm、16の口径は21.4cm、器高は3.2cmと複数の法量が見られる。口縁部はやや外反し、12・13・16は端部内面に沈線がめぐる。

15は土器器杯である。口径は16.0cm、器高は3.8cmである。口縁部は外反して彎曲し、内外面に沈線がめぐる。

17は土器器碗である。直径の短い平底から体部がわずかに内彎して立ち上がり、開いた口縁部に達する。やや深い器形で、口径17.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部端部内面には浅い凹線がめぐる。内面の調整はヨコナデである。

18は須恵器杯である。口縁部の開いた深い器形で、底部のやや内側に高台が付く。内外面共にヨコナデであり、底部外面はさらにナデで仕上げる。灰白色を呈し、胎土はやや粗く、焼成は軟質である。

22は土器器高杯の脚部である。ラップ状に開く中空の脚部から裾部が大きく開く。上面には杯部の接合痕が明瞭に残る。外面調整はナデであり、杯部との接合部には左回りのハケ目が残る。

24は竈の掛け口から底の部分である。やや内彎する掛け口の復原口径は20cmである。磨滅により調整のわかる部分は少ないが、内外面共ナデによる仕上げである。色調は橙～乳白色であるが、掛け口内面と底下面是被熱のためか褐色を呈する。

21は須恵器甕である。短く開く頸部から口縁部が外反し、口縁端部は丸くおさまられている。肩部外面は縦方向の平行叩きと回転カキ目であり、内面には同心円当て具痕が認められる。

10は須恵器瓶子である。調整は全面ヨコナデで、底部外面に円形の縄痕が残る。

② 5 A 溝 75

遺物は須恵器杯蓋2点・杯身2点・提瓶が出土した。

26・27は須恵器杯蓋である。26は須恵器杯蓋で、ほぼ完形である。口径8.9cm・高さ2.9cmで、頂部には宝珠形つまみが付く。ロクロナデがみられ、外面上部には約半周する沈線がみられる。胎土は精緻である。27は口径10.1cm・高さ3.5cmである。口縁部は僅かに内傾する。頂部に横方向のナデがみられる以外は全面ナデ調整である。胎土は精緻である。

28・29は須恵器杯身である。28は口径9.7cm・高さ3.2cmである。たちあがりには内傾した後に真上へのび、端部は鋭い。口縁端部は内傾しながら上にのび、深い受けを有する。底部にはナデが行われていない。胎土は精緻である。29は口径10.8cm・高さ3.9cmである。口縁端部は鋭く仕上げられている。底部にはヘラ切りの痕跡が残る。胎土は精緻で、焼成はやや軟質である。

31は須恵器提瓶である。胴部の直径は19.25cm・高さ16.9cmである。形体は球形に近いが、側面の一方が平坦になっている。吊り手は存在しない。平坦面を除いて螺旋状のカキ目調整が行われ、頂部で横方向のカキ目がみられる。平坦面は不定方向のナデがみられる。胎土は粗い。

③ 5 A 溝78

遺物は須恵器杯身2点・甕・甃、土師器甕・不明土器・台付き鉢・高杯である。

33は須恵器杯身である。口径8.1cm・高さ3.15cmである。たちあがりは内傾し、高さは口縁と同じである。受けは浅く、口縁端部は丸い。外面底部は粗いナデ調整で指頭圧痕がみられる。

35は須恵器杯身である。口径10.5cmである。口縁部はほぼ垂直にのびるが、端部で僅かに外に開く。内面底部はやや凹凸がみられる。胎土は精緻である。36は須恵器甃である。外面は殆どナデ調整であり、体部下に沈線が1条巡る。穿孔の直径は1.5cmであり、穿孔周辺は欠損している。また、内部には穿孔による粘土塊が残されている。胎土は直径1～3mm程度の小石を多く含み、粗い。

37は土師器台付き鉢である。口径12cm・器高11.5cm・台部は厚さ6cmである。成形にはロクロは使用されておらず、形は整っていない。調整はナデであり、内面には強いナデによる筋状の痕がみられる。外面の一部に、内面には全面に黒色の付着物がみられる。胎土は粗く、焼成はやや軟質である。

38は土師器の台付き鉢か高杯の脚部と思われるが、詳細は不明である。底径は15.2cmである。脚裾部は大きく外に開く。調整は摩耗が著しいため不明である。胎土は精緻である。

39は須恵器横瓶の口縁部である。口径は18.8cmである。口縁部は外上方へ屈曲して立ち上がり、端部は内折して幅の狭い平坦面を形成する。調整は摩耗が著しいため詳細は不明であるが、頸部以下について外面には平行叩き痕が、内部には同心円の当て具痕がみられる。胎土は精緻で、焼成は軟質である。

④ 5 A 土坑258

40は須恵器杯蓋である。口径10.5cmである。器壁は薄く口縁は屈曲しながら鋭く収束する。胎土は精緻である。

⑤ 5 A 溝108

41・42・44～46は須恵器杯身である。

41は口径9.8cmで、立ち上がりはほぼ真上にのび、端部は鋭く口縁より突出する。受けは浅い。胎土は精緻である。42は口径11.7cmで立ち上がりは内傾し、端部は鋭く口縁より突出する。受けは浅い。胎土は精緻である。44は口径9.5cm、高さ3.6cmである。器壁は底部で厚く、体部から口縁部にかけて薄い。胎土は精緻であるが、器形の歪みは大きい。45は口径10.2cm、高さ3.2cmである。器壁は全体に厚い。底部外面にはナデがおこなわれていない。胎土には1～3mm程度の小石を多く含み、粗い。46は口径4.6cm、高さ3cmである。底部外面にはナデがおこなわれていない。胎土は直径1～3mm程度の小石をやや含むも精緻である。

47～51は土師器杯身である。

47は口径8.9cm・高さ2.4cmである。口縁部は僅かに外反する。磨耗が著しく調整は不明。胎土は精緻である。48は口径8.8cm・高さ2.85cmである。口縁端部で僅かに外に開く。外面はナデ調整が行われ、底部には指頭圧痕が多く残る。内面はヘラミガキが施され、放射状の暗文がみられる。胎土は精緻である。49は口径9.1cm・高さ3.55cmである。口縁端部で僅かに外に開く。内外面共に丁寧なナデ調整が行われている。内面にはさらにヘラミガキが施され、放射状の暗文がみられる。外面には口縁部から底部にかけて一部黒斑がみられる。胎土は精緻である。

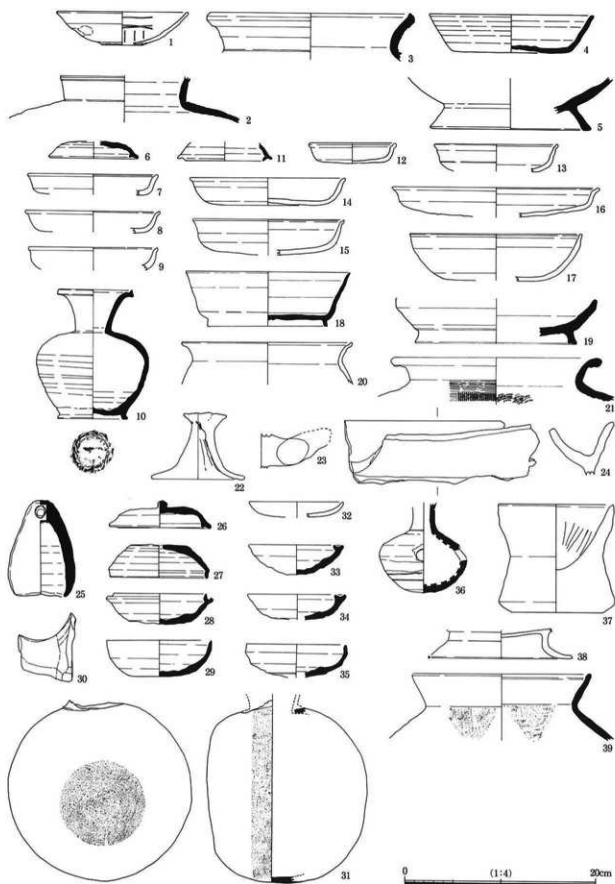


図359 須恵器・土師器など1

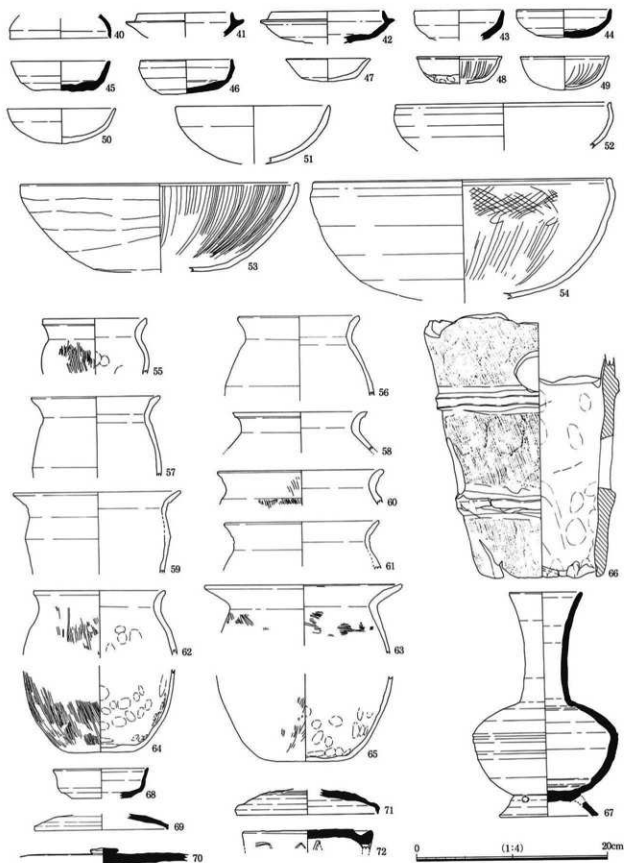


图360 須恵器・土器など2

50は口径11.2cm・高さ3.7cmである。磨耗が著しく調整は不明である。胎土は直径1～3mm程度の小石を含み、やや粗い。51は口径16cmである。胎土は直径1～2mm程度の小石をやや含むも精緻である。磨耗が著しく調整は不明である。

52～54は土師器鉢である。

52は口径22.4cmである。器壁は薄く、口縁端部で僅かに外に開く。内外面共に丁寧なナデ調整が施される。胎土は精緻である。53は口径29cm・高さ3.4cmである。器壁は厚く、口縁端部で僅かに外に開く。全面にナデ調整が行われ、さらに内面にはヘラミガキが施され放射状の暗文がみられる。外面の体部下位には一部黒斑がみられる。胎土は精緻である。54は口径31cmである。器壁は厚く、口縁部は僅かに内傾する。磨耗が著しく詳細は不明であるが、外面にはナデが強く残る。内面はヘラミガキが施され、体部上位には格子状と螺旋状の、中位から下位にかけては放射状の暗文がみられる。胎土は精緻である。

55・56・58・60～65は土師器甕である。

55は口径10.8cmである。器壁は薄く、頸部・口縁部で肥厚する。磨耗が著しく詳しいことは不明であるが、外面にはナデ調整が行われ、頸部以下にはハケ目がみられる。内面には指頭圧痕がみられる。胎土はやや粗い。56は口径12.6cmである。口縁部はやや肥厚し、端部は丸く収束する。磨耗が著しく調整は不明である。胎土はやや粗い。58は口径14cmである。磨耗が著しく調整は不明である。胎土はやや粗い。

60は口径16.9cmである。口縁部はやや肥厚し、口縁端部は丸く収束する。調整は磨耗のため詳しくは不明であるが、外面にはハケ目がみられる。胎土はやや粗い。63は口径20.5cmである。頸部・口縁部で器壁が肥厚し、口縁端部は丸く収束する。内外面共にナデ調整が行われ、頸部以下にハケ目がみられる。

62は口径11.6cmである。器壁は口縁部で肥厚する。磨耗が著しく詳細は不明であるが、外面は頸部以下にハケ目がみられ、内面は指頭圧痕がみられる。胎土は直径1～3mm程度の小石を多く含み、粗い。64は甕の底部である。外面は、底部以外はハケ目がみられる。内面は指頭圧痕が多くみられる。胎土は直径1～4mm程度の小石を多く含み、粗い。62・64は同一個体と考えられる。

61は口径16.1cmである。口縁部は外反し、端部は丸く収束する。調整は磨耗が著しいため不明である。胎土はやや粗い。65は甕の底部である。磨耗が著しく詳細は不明であるが、外面にはハケ目がみられ、内面には指頭圧痕が多く見える。胎土は直径1～3mm程度の小石を多く含み、やや粗い。61・65は同一個体と考えられる。

66は5A溝108から出土した円筒埴輪である。底径は13.1cmをはかり、小型に属する。幅3～4cmの粘土帯を用いて成形する。底部からやや外上方に直線的にのびる。タガは断面がM字型を呈し、突出度は低い。透孔は第2段と第3段のそれぞれ下端のタガに接して対面する2孔1対で互い違いに穿つ。第2段の透孔は長軸6cm、短軸5.4cmの楕円形を呈し、一方は縦長であり、他方は横長である。第3段の透孔は長軸4.8cm、短軸4.2cmの不整な五角形であり、第2段のものに比べ、小さい。外面は1次調整のみで、幅4cm以上で1cmあたり5～6条程度の粗いハケで調整する。埴輪を正位させ上から見て、左上から右下に向かって時計回りの方向に施し、底端部から2cm上にまで施す。また、下から順に調整したことがわかる。内面には指頭圧痕が数多く残り、底部付近ではタゲ方向にナデを施し、粘土帯のつなぎ目にそってナデる。また、ほぼ垂直に底端部まで22cm以上にわたってナデを1条だけ施す。底部調整は底端部をつまみ、やや尖らせる。胎土は密であり、径1mm以下の長石、径2mm以下の石英、径5mm大の小石を少量ずつ含む。色調はにぶい橙色～にぶい黄橙色を呈する。焼成は良好であり、黒斑は認められない。

⑥A溝1

多数の須恵器、土師器の他に黒色土器、かまど、製塩土器、陶硯、瓦が出土した。

須恵器は焼成が堅緻で灰色～暗灰色を呈する一群と、やや軟質で白色を呈する一群がみられる。後者は端部が内側に巻き込んだ口縁を有する坏、皿(84・86・89)及び大型の蓋、高坏、鉢、壺(82・83・109・110・187～189・199・201・202)にみられる。

73・74・76・77・78・80～83は坏蓋である。天井部外面はヘラケズリ後ナデ、あるいはヘラケズリを行わずナデを施す。口縁部はヨコナデ、天井部内面はナデを施す。内面をヨコナデし、中央に仕上げナデを施す例もある。

91～94・96・97・99・100・102～106は坏身である。91～93は火襖状に黒ずんだ数ミリ幅の痕跡が内外面にみられる。底部外面はヘラ切り後ナデを施すのみで、粘土紐の巻上げ痕が明瞭である。

96・97・99・100・102～106は高台付坏である。底部外面はヘラケズリ後ナデ、あるいはヘラケズリを行わずナデを施す。他はヨコナデ、底部内面中央に仕上げナデを施す。103・106は底部内面に不定方向のナデを施す。

85・87・88は皿である。底部外面はヘラケズリ後ナデ、あるいはヘラケズリを行わずナデを施す。

107は碗形である。体部外面下方はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。

109・110は高坏である。坏部外面下半はヘラケズリ後ナデ、他はヨコナデを施す。

187～189は鉢である。体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデを施す。

190・191・193・194・197・199・200～203は壺・甕類である。197・200は長頸壺である。底部外面はヘラケズリ後ナデ、他はヨコナデを施す。190・193・194・199・201・202は広口短頸壺である。ヨコナデを施す。

なお、76・80は口縁部外面、104・195・196は外面、189は内面、203は肩部、197は外面にそれぞれ自然釉の付着がみられる。

土師器は全体に風化が著しく調整は不明瞭である。111・112は蓋である。112は天井部内外面にハケを、口縁部はナデを施す。

坏身で調整が確認できるものは、底部外面はヘラケズリ、他はヨコナデを施す(b手法)が、ヘラケズリは不十分で指頭圧痕を残す。152は口縁部内面に斜放射暗文、底部内面に螺旋暗文を施す。155は高台付坏である。口縁部外面はヘラミガキを施す。他は調整不明。

皿の調整はb手法である。156・157・159・160～163は碗形である。調整はb手法である。坏・皿類に比べて口縁部以下のヘラケズリは丁寧なものが多い。

164・165は黒色土器A類の皿である。

高坏は坏部内面に斜放射暗文、口縁部内外面はナデ、以下はヘラミガキを施す。167は内面中央に螺旋暗文を施す。脚部断面は、169は10角形、170は11角形、171は8角形である。169・171は脚部内面にしぼり痕が残る。170は裾部外面にヘラミガキを施す。

172～174は鉢である。172は体部内面上半に斜放射暗文、下半はナデ、外面はミガキを施す。口縁部はナデを施す。174は底部内面にハケを施す。

175は小型広口壺である。

甕は体部外面にハケを施し、煤の付着が多くみられる。体部内面は調整不明瞭であるが、ハケメがわずかに残るもの、ケズリを施すものがみられる。口縁部内面はヨコ方向のハケを施すものが多くみられ

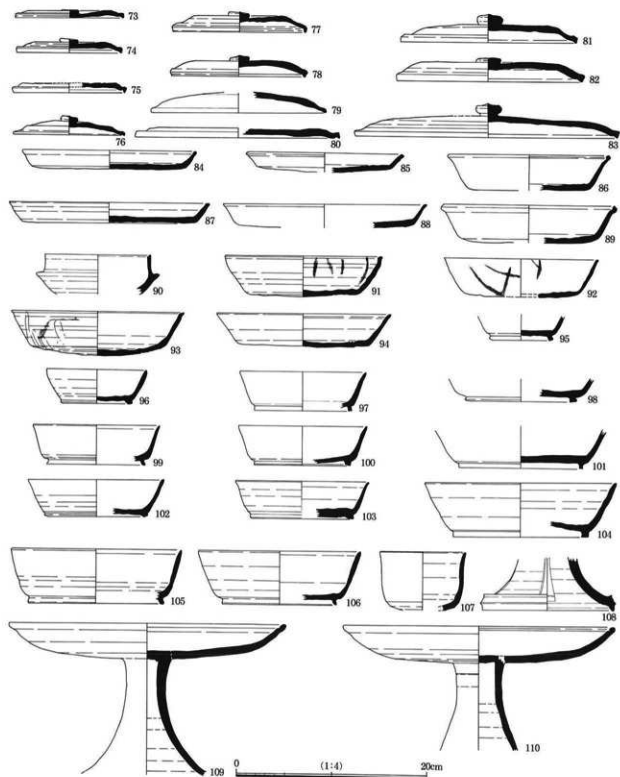


図361 須恵器・土師器など3

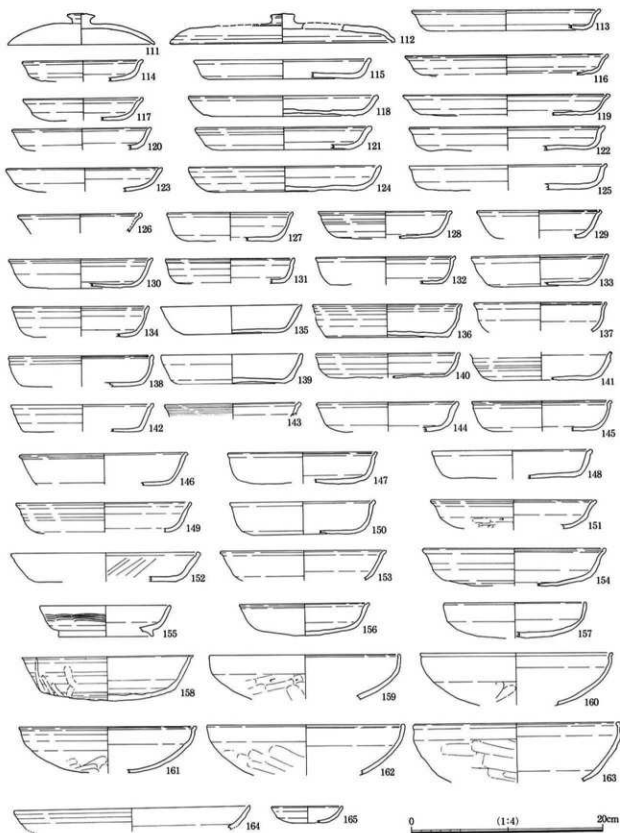


図362 須恵器・土師器など4

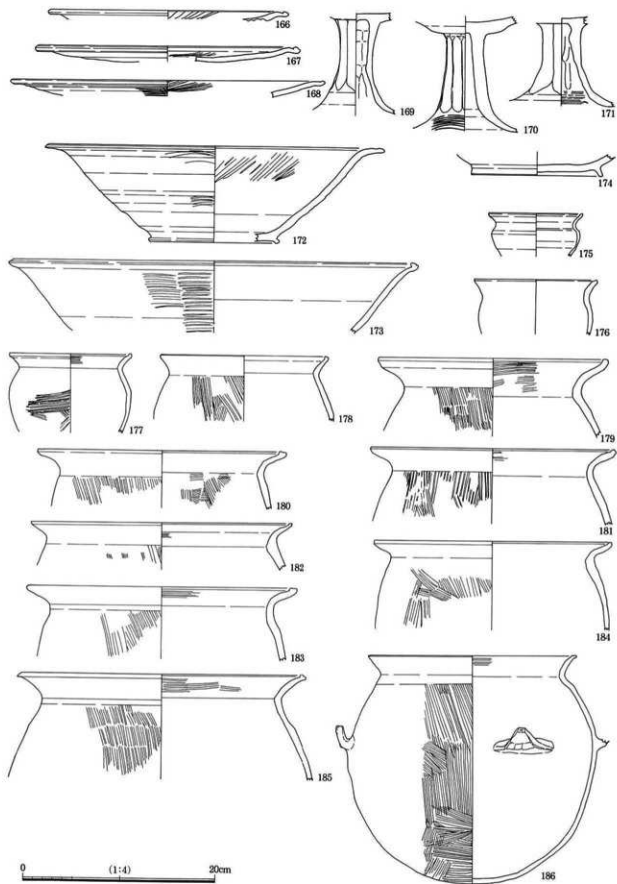


図363 須恵器・土師器など5

る。

195・196は須恵器壺蓋である。天井部外面、及び口縁部はヨコナデ、天井部内面はナデを施す。

その他、210は甗である。体部内外面は粗いハケ、底はナデを施す。

212～216・219・220・222は製塩土器と考えられる。212・214・215は胎土が粗く、砂粒を多く含む。

219・220は胎土が密である。214は、内面に粗いハケを施し、外面は指頭圧痕が残る。216は口縁部内面に横方向の粗いハケを施し器壁を薄くする。215は同様の口縁形態を示すが、調整は不明である。213は内面に粘土紐の巻き上げ痕がみられる。219・220は内面に布目痕が残る。

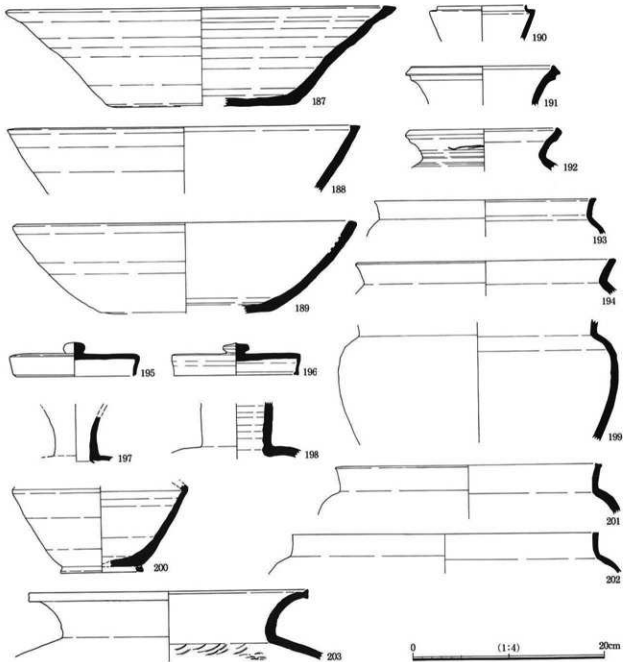


図364 須恵器・土師器など6

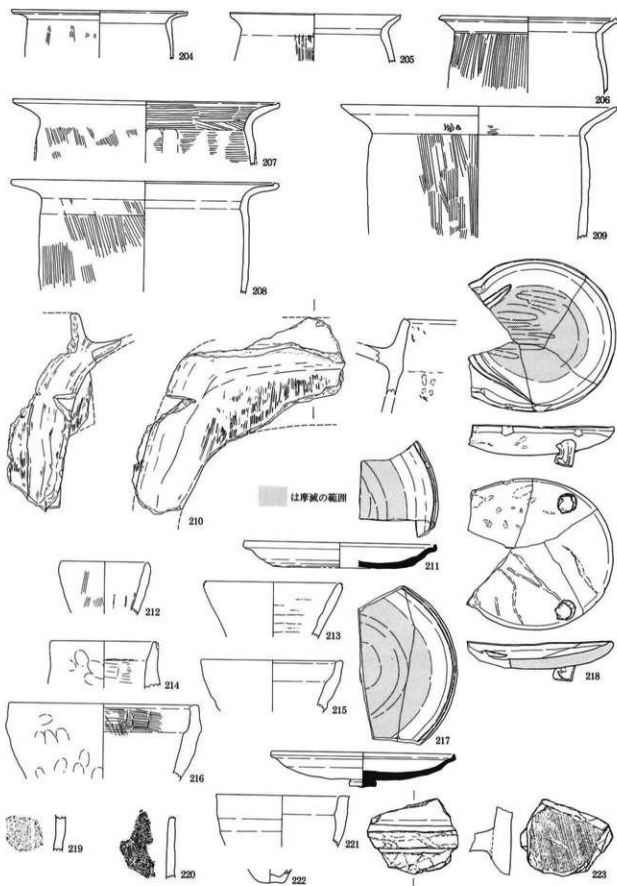


図365 須恵器・土師器など7

211・217は須恵器坏蓋の転用硯、218は獣脚硯である。硯面部は摩滅が著しく、わずかに墨の痕跡を残す。

223は須恵質埴輪であり、2～4mm程度の長石、石英等の粒子を多く含み、灰色を呈する。突帯が貼り付けられ、痕面には粗いハケを施す。

⑦ 3 A 土坑349

遺物は土師器坏3点、須恵器坏蓋1点・甕が出土した。

236は須恵器坏蓋である。口径約8cm・高さ約3cmの小型品である。頂部には扁平な宝珠形つまみが付く。内外面ともにロクロナデがみられ、ケズリは認められない。胎土は精緻で、焼成はやや軟質である。

237・238は土師器坏である。237は口径13.2cm、高さ4.0cmである。丸底状を呈し、口縁はほぼ直立している。口縁端部は鋭く仕上げられている。内面はヨコナデがみられ、わずかに放射状の暗文がみられる。外面は丁寧に磨いてあり、胎土は精緻である。238は口径15.0cm、高さ4.4cmである。体部はやや外側に張り出しており、口縁は直立している。口縁端部は内側に傾斜する形で弱い面取りを行なっている。表面の磨耗が著しく、調整については不明である。体部下半の外面には磨きがみられる。胎土は精緻である。これらの遺物の時期は、7世紀前半と考えられる。

⑧ 5 A 土坑381

239は瓦器碗で内面には格子暗文が施される。

240は山茶碗であり、胎土は明灰色で細密である。

⑨ 5 A 土坑394

241は土師器高杯で、底径は9.5cmである。外面は縦にヘラケズリを行った後に丁寧なナデを施している。ケズリ面は11を数える。内面は脚柱部にはシボリメが残る。内外面共に円状にナデ調整が行われて

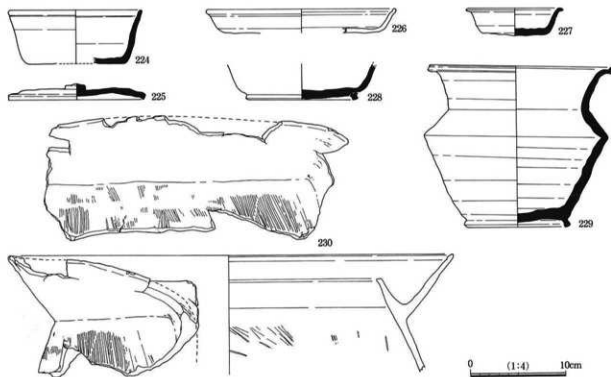


図366 須恵器・土師器など8

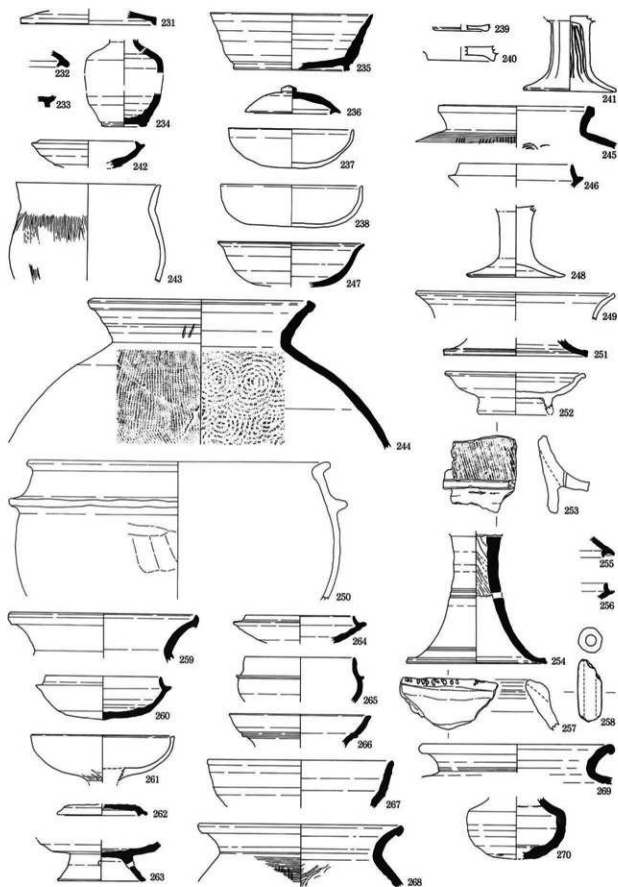


図367 須恵器・土師器など9

いる。胎土は精緻である。

⑩ 5 A 包含層または井戸28周辺

250は球形に近い胴部の上に鈔をもつ土師器釜で、短く内傾する頸部と外折して短くのびる口縁部から構成される。調整は内面がナデ、外面は鈔を横ナデにより貼付けてあり、胴部は中位に横方向のケズリまたは板ナデ、下部に斜め方向の板ナデが施されている。胎土は白色微砂粒を多く含むが精良で、色調は赤褐色である。

なお鈔は全周にわたって端部を欠損しており、胴部外面には厚く煤が付着し、内面は口縁部際まで炭化した有機物が付着している。13世紀前半に比定される。

⑩ 5 A ビット183

251は須恵器高杯である。脚部底径14.8cmで、杯部と脚部の大半が欠損しているため高さは不明である。外面底部付近には2条の凸帯線がみられる。胎土は精緻である。

⑩ 5 A ビット284

252は土師器高台付皿である。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部は外方へ屈曲して水平にのびる。一般に12世紀代を中心としてみられる器種に類似する。

⑬ 5 A ビット314

253は家形埴輪の屋根部分で、屋根部は粗いハケ状の調整が行われている。外面はそのほか、屋根部の裏側で横方向のナデが、壁部で細かいタテハケから不定方向のナデがみられる。内面は不定方向のヘラケズリからナデが行われている。屋根部分には長方形の透かしがみられる。胎土は精緻、焼成はやや

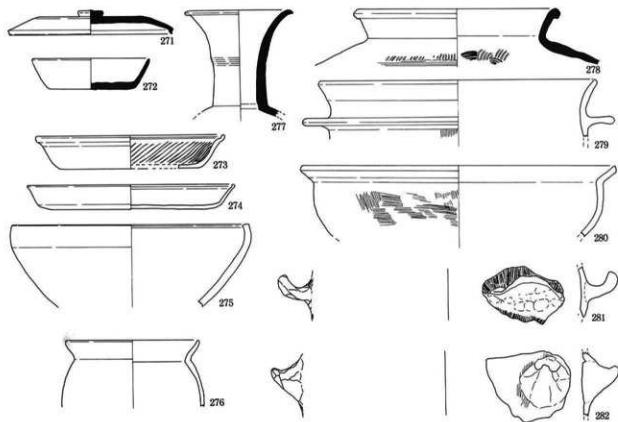


図368 須恵器・土師器など10

軟質である。

㊦ 5 A ビット 125

257は土師器甕口縁部である。口縁部外面には同心円タタキを施す。胎土には長石・金雲母・角閃石を多く含む。生駒西麓産であろう。

㊦ 3 A 土器溜まり 2

溝状の遺構より出土した遺物である。遺物は土師器皿・鉢・甕・罌付甕・把手、須恵器坏身・坏蓋・甕・壺・大甕、軒丸瓦が出土している。

271は須恵器の坏蓋である。口径は17cmでロクロによる成形である。他はナデによる調整がみられるが、肩部はケズリによって調整されている。頂部には扁平な釘状のつまみが付く。端部は折り曲げられたあと、外側に指当てによる沈線を施されている。胎土は精緻である。

272は須恵器の坏身である。口径約10cm、高さ約3cmの小型品である。ロクロによる成形であり、内外面にはヨコナデの調整がみられる。底部はヘラ切りの痕が顕著に残っており、ナデ消された形跡はみられない。

273・274は土師器の皿である。273は口径18cmを計り、口縁は内側に少し折り曲げられており、内面には暗文が施されている。274は口径20cm、高さ2cmである。

275は土師器鉢である。口径約30cmを計り、鉄鉢状を呈する。ロクロによる成形のあと、体部外面はケズリが施されている。口縁端部はほぼ水平に面取りされ、内面は肥厚している。胎土は精緻である。

276は土師器の甕である。口径約14cmを計り、口縁はやや内彎している。磨耗が著しく、内・外面の調整は不明である。

277は須恵器甕の頸部である。やや外反しながら外に開き、その中ほどに2条の沈線を施す。口縁はやや水平気味に整えられており、端部は丸く仕上げられている。

278は須恵器の甕である。口径約21cmである。外面は平行叩きの上に横方向のかき目が施されており、内面には同心円の叩きがみられる。ほぼ完形に復原される。

279は土師器羽釜である。口径は約29cmである。口縁はやや外反し、端部は弱い面取りを施される。罌部はほぼ水平にのびており、端部は丸く仕上げられている。体部外面にはわずかにハケ目の痕がみられ、罌部の下面は被熱のため暗褐色に変化している。胎土は粗く、多くの砂粒を含んでいる。

280は土師器鉢である。口径33cmの大型品である。口縁はほぼ直線的に外側に開きながら、端部はほぼ垂直に面取りされている。また口縁端部の内面はわずかに肥厚する。体部外面に縦方向のハケ目上に横方向ハケ目がみられる。胎土はやや粗く、口縁の内面は被熱のため暗褐色に変化している。



図369 須恵器・土師器など11

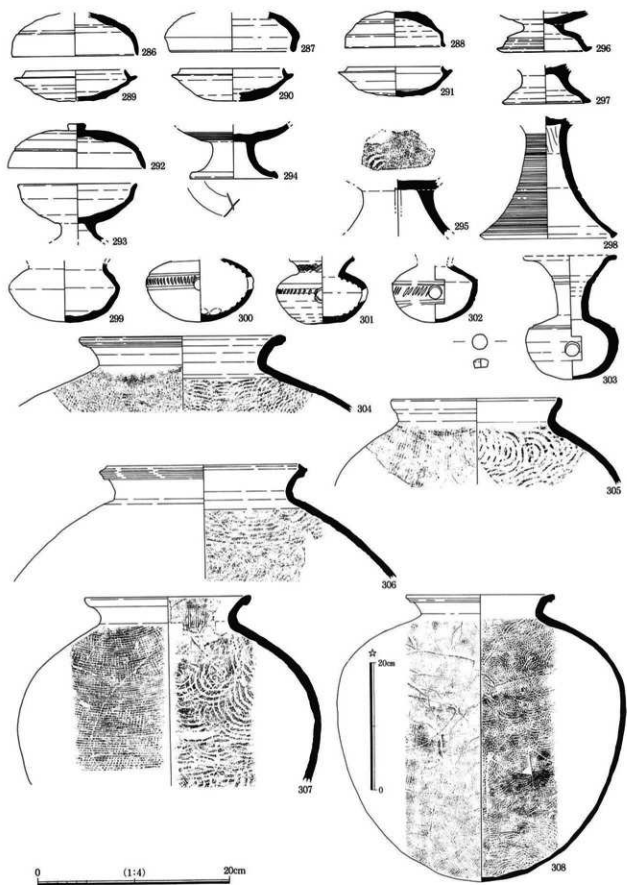


図370 須恵器・土師器など12

281は土師器の舌状把手である。土師器竈などに付くものである。胎土は精緻であり、体部外面には縦方向のハケ目がみられる。282は土師器の鷲嘴状把手である。土師器甕などに付く。把手は体部を穿孔し、内側から把手を差し込む完全充填の形態である。胎土は精緻であり、体部外面にはわずかにハケ目の痕がみられる。

⑩ 6 A 墓 3

284は黒色土器高台付き皿である。薄く「ハ」字状に張り出した高台をもつ。体部は内彎気味に外方へ広がり、口縁端部わずかに外反する。内外面とも遺存状態が著しく悪く調整は不明である。

⑩ 6 A 墓 2

285は須恵器骨蔵器である。胴部下半以下の残存である。胴部は丸みを帯びた底部からやや直線的に立ち上がる。高台は厚く逆台形状に貼り付けられ、端部は外方へ張る。外面には丁寧なケズリが施され、内面には底部の接合痕および叩き痕跡と板状工具による横位のナデ調整がみえる。胎土は良好で色調は明灰色である。

⑩ 3 A 土器溜まり 1

遺物は土師器高坏・鉢、須恵器坏身・坏蓋・高坏・甕・短頸壺・壺・甕、羽口、砥石、蛸壺、おもり、円筒埴輪などである。

288・513は須恵器坏蓋である。288は口径10.4cm・高さ3.8cmである。ロクロによる成形であり、頂部にはヘラ切り痕がみられる。口縁端部は弱い面取りを行ない、やや外側に肥厚する。513は口径13.2cm・高さ5cmである。ロクロによる成形であり、肩部から頂部までの外面は全てケズリが施されている。全体的にやや扁平な形状をしており、ほぼ直立した口縁を呈する。290は須恵器坏身で、口径10.8cm・高さ3.4cmである。ロクロによる成形で、全面にナデ調整がみられる。大きく外に開く体部から、口縁は短くて浅い受け部を有する。胎土は精緻で、焼成はやや軟質である。

293～295は須恵器高坏である。293は口径12.2cmであり、脚部が欠損のため高さは不明である。坏部はほぼ直線的に外に開く体部から、口縁はやや外反しながら端部で収束する。残存している脚部からは短脚の高坏と思われる。坏部外面に自然釉の付着がみられる。294は脚部底径8.8cmである。坏部外面は横位のカキ目調整がみられ、底部近くに×字のヘラ描きがある。295は鍛冶炉6より出土した高坏脚部の破片である。坏部内面に同心円印きの痕跡がみられる。脚部には透かしが2ヶ所に施されており、外面は横方向のカキ目調整がみられる。

299は口縁部が欠損した須恵器短頸壺である。胴部最大径で11.6cmを計る。内外面ともナデ調整である。底部内面に溶解した付着物がみられるが、内容は不明である。

302・303は須恵器甕である。302は頸部以上を欠損している。体部中位に斜位の刺突文が施され、その上下にそれぞれ沈線を1条巡らせている。外面はほとんどナデ調整であり、下側の沈線以下はケズリのあとにミガキが施されている。胎土は精緻であり、破損部の断面は赤褐色である。303は鍛冶炉6の南西肩部より出土した。口縁部のみ欠損しており、ほぼ完形品で復原される口径は約10cmである。碗形の体部と大きく開く口縁部を呈する。底部付近にケズリの調整がみられる以外はほとんどがナデ調整である。肩部に1条、頸部中位に2条の沈線をそれぞれ巡らせる。胎土はやや粗く、大粒の石英砂を含む。303は9の甕内部より出土した穿孔の際にできた円形の粘土である。このことから甕は全ての成形が終了した後に穿孔され、本来は外側に割り貫かれる粘土が、この例では偶然なかに落ち込んでしまったものと考えられる。

304・305・307は須恵器甕である。いずれも内面は同心円の叩き、外面は平行叩きがみられる。304は口径21cmを計る。口縁は外反しながら外側にやや開いている。端部は丸く、下側に沈線を施す。305は口径17.3cmで、口縁はやや内彎しながら端部は弱い面取りが施され、内面にわずかに肥厚する。307は口径17.3cmで、口縁はほぼ直線的で外側に開いている。外面はカキ目調整がみられ、口縁部内面には縦方向に3条のヘラ描きがみられる。

312は土師器鉢である。口径17.7cm・器高7.7cmで、器壁が薄く、精巧な作りである。体部は半円形を呈し、口縁端部の内面がわずかに肥厚する。外面はミガキ調整で、内面には上下2段の暗文がみられる。

314は円筒埴輪である。外面はナデ調整で、内面にはタテハケがみられる。口縁部外面に粘土の継ぎ目痕跡が残る。これらの遺物の年代は、6世紀後半から7世紀前半と考えられる。

606は坏部を欠損した土師器高杯である。脚部は大きく外反しながら開いている。脚部の直径は復原で約9.6cmである。磨耗によって詳細は不明であるが、内面と外面下半はナデ調整、棒状部分の外面はミガキ調整が施されていると思われる。

⑨1A・3A・5B調査区谷(1)

これらの調査区からは東西方向にはしる谷が確認され、古墳時代の遺構・遺物はこの谷の縁辺部や斜面に堆積する10層を中心として出土している。

谷は南北幅が40mを越える規模のものであり、その断面形態は南側の斜面が急激に、北側の斜面が緩やかに下降する。

谷の埋土は大きく4層(7~10層)に分かれ、古墳時代に関してはその最下層部分に当たる10層と基盤層になる11層が対応し、一部9c層(9層の最下部)にも該期の遺物が混入している。

286は須恵器杯蓋である。口径13.2cmを測る。口縁部は内彎しながら下がり、端部は緩い凹面を持つ。天井部は丸みを有し、外面は回転ヘラ削りの後、横ナデを施す。口縁部と天井部の間に沈線が1条巡る。

287は須恵器蓋である。口径は12.9cmを測る。口縁部は厚く、やや外反気味に内傾し、端部を丸く収める。天井部は丸く、外面は回転台を利用しないヘラ削りを施す。口縁部と内面は横ナデを行う。韓式系土器の可能性もある。

289は須恵器坏身である。口径10.5cm、器高3.2cmを測る。口縁部は短く内傾し、端部は丸い。底部は丸味を帯びて浅い。受部は真っ直ぐ外上方にのびる。

291は須恵器坏身である。口径12.0cm、器高3.2cmを測る。口縁部は短く、外反しながら内傾する。底部はやや丸みを帯びる。受部は短く、口縁部との間は「U」字状を呈し、端部を丸く収める。

292は須恵器蓋である。口径14.4cm、器高4.7cm、つまみの径2.4cm、高さ0.8cmを測る。口縁部は内彎しながら外に開き、端部は丸く収める。天井部は丸みを持つ。体部には沈線が1条巡る。

296は須恵器台付碗である。碗部の大半を欠損する。底径は8.6cmを測る。脚部は段を有しながら外へ開く。調整は坏外底は回転ヘラ削り後、横ナデによってヘラ削りをナデ消す。坏内面は横ナデ後仕上げナデを行う。脚部は内外面とも丁寧な横ナデを施す。

297は須恵器台付碗である。底部径4.5cmを測る。脚部は外反しながら外下方へ広がり、屈曲してさらに下方へ広がる。端部は外へつまみ出して面をなす。脚部中央に径0.6cmの小孔を穿つ。

298は須恵器高坏脚部である。底部径は13.4cm、高さ12.0cmを測る。脚部は外反しながら下方に大きく開き、端部は面をなして下方につまみ出す。外面はカキ目を施し、脚部中央に2条の沈線を巡らす。

300・301は須恵器甕である。

300は体部のみ残存する。体部最大径11.3cmを測り、底部がやや尖りぎみの扁平な球形を呈する。外面横ナデ後、底部は仕上げナデを施す。内面は横ナデ後、底部のみ指頭圧痕が残る。肩部に2条の沈線を施し、その間に列点文を配す。また径1.3cmの穿孔を1個有する。

301は口縁部を欠損する。体部最大径9.7cmを測る。体部は肩が張り底部は平らである。頸部は広く外反しながら広がる。肩部から底部にかけて回転ヘラ削りを行い、底部は仕上げナデを施す。底部内面に同心円の当て具痕を有する。外面頸部に波状文を、肩部に列点文と径1.4cmの小孔を1個穿つ。

306は須恵器甕である。短い頸部をもち、肩部より下半を欠損する。口径は20.0cmを測る。口縁部は外反しながら外上方へびる。端部は折りまげて外方中央に稜をもつ断面三角形の段をなし、端部を内上方へつまみ上げる。肩部はあまり張らずに下がる。

308は須恵器甕である。口径22.8cm、器高45.6cmを測る。短い頸部をもち、肩はやや張り気味に広がり、胴部最大径は上から1/3のところにあたり、径45.4cmを測る。甕は4分割成形が行われている。口縁部は横ナデを行うが、頸部外面は平行タタキの後横ナデを施す。体部外面は全体に平行タタキを施した後、肩部から体部下半までカキ目でタタキを消し、さらに縦方向に粗いナデを施す。内面は全体に同心円文が残り、底部は特に顕著に認められる。しかし、体部接合時に施されたと思われる横方向のナデによって同心円文の一部はナデ消される。

310は軟質土器の平底鉢の口縁部である。小片のため口径は不明である。口縁部は頸部から外上方へ短く開く。頸部は強い横ナデのためにくびれ、体部は内傾しながら下りる。調整は体部外面に格子タタキがみられるが、他は横ナデを施す。胎土はやや粗く、0.5~1cm前後の長石、石英、金雲母、チャート、黒色粒などを含む。色調は乳白色を呈す。

311は土師器甕の口頸部である。口径は20.8cmを測る。口縁部は外反しながら外上方へ広がり、端部は面を有し、やや上方につまみ上げる。頸部はハケ目を施す。

324は土師器罎甕である。胴部外面にはタテハケを、口縁部内面にはヨコハケを施す。罎は丁寧なヨコナデを施している。胎土には長石・金雲母・角閃石を多く含む。生駒西麓産であろう。

325は土師器甕である。外面には格子目タタキを施す。内面は丁寧なナデ調整を施し、当て具の痕跡

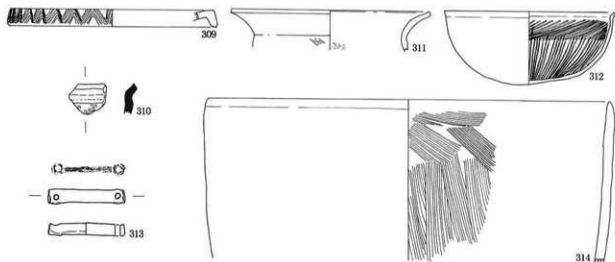


図371 須恵器・土師器など13

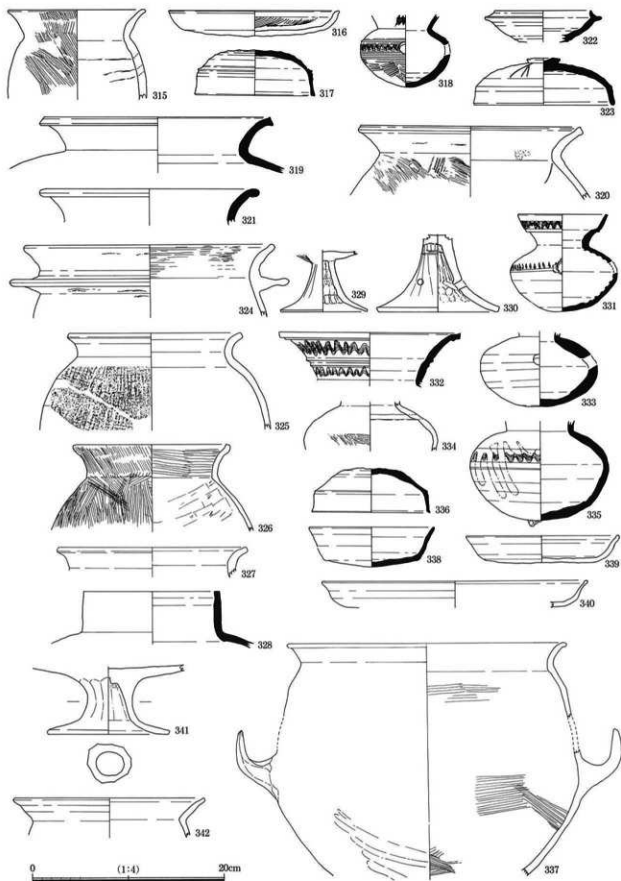


図372 須恵器・土師器など14

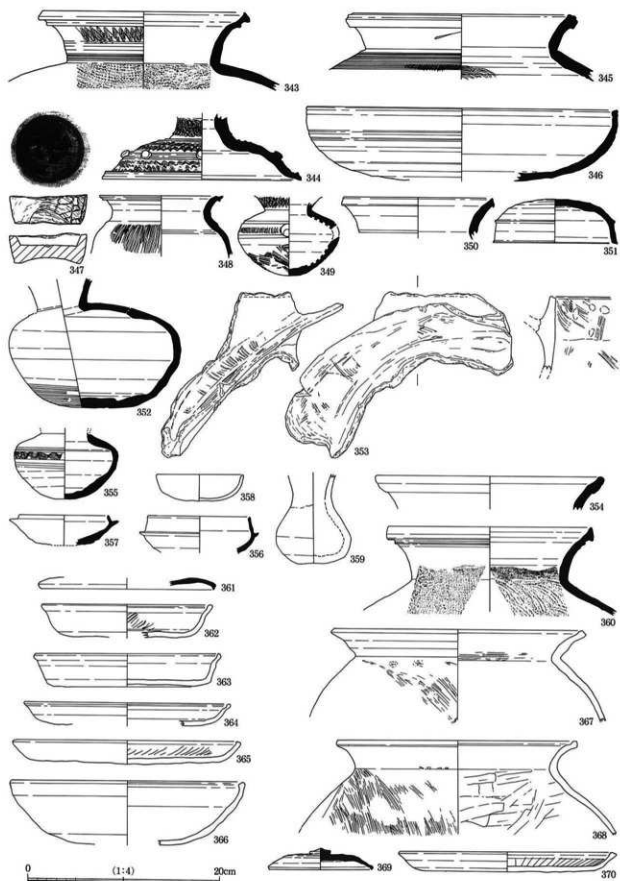


図373 須恵器・土師器など15

は残らない。

348は須恵器広口壺である。外面には平行タタキを施す。内面は当て具痕を丁寧になで消す。34は木製容器の底部である。上部は削られており、遺存しない。横木取りによって製作される。外面には幅1cm程の細部調整痕が残る。剥落が著しいが内外ともに黒漆塗りである。外面には2箇所半円を呈する割り込みがある。

353は土師器甕であり、胎土には長石・金雲母・角閃石を多く含む。生駒西麓産であろう。

◎ 2 B 谷 1

372は須恵器平瓶で口縁部と体部の大半を欠損している。373は大形の須恵器台付甕で、口縁部を打ち欠いている。

374は土器群1の、388は土器群2にそれぞれ含まれる須恵器壺である。共に頸部にヘラ描きの文様を

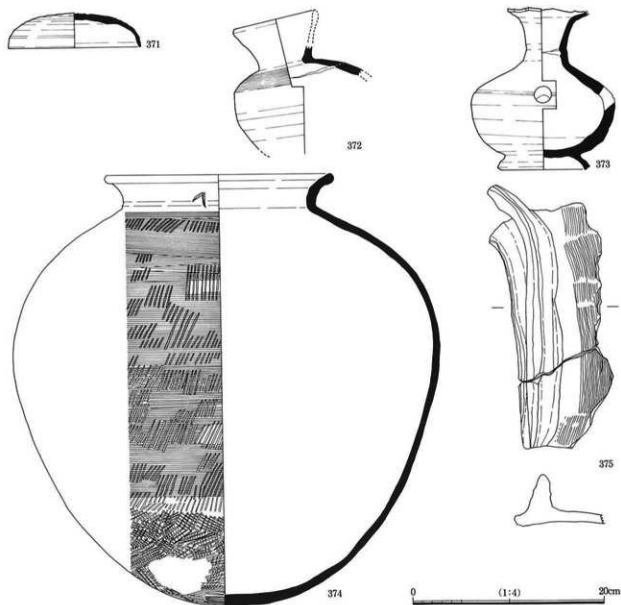


図374 須恵器・土師器など16

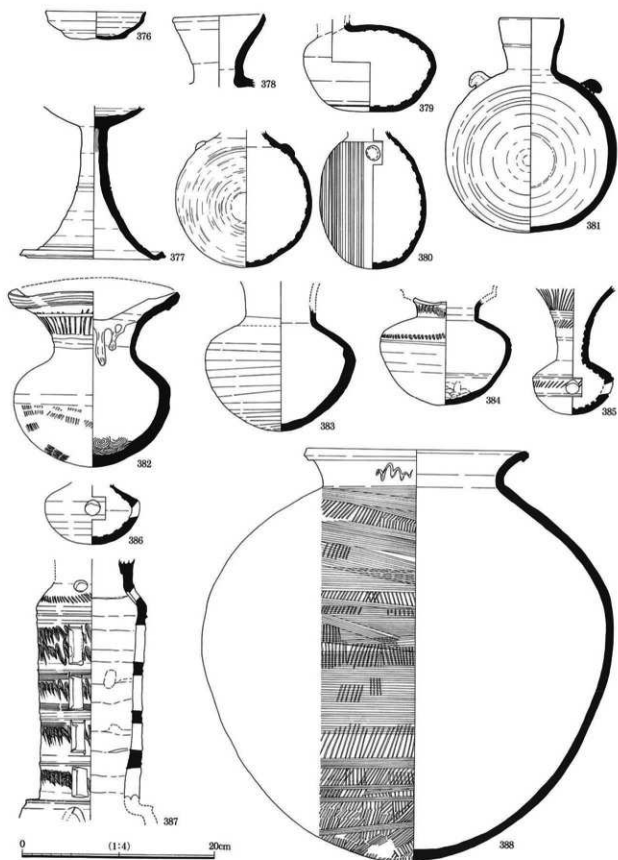


図375 須恵器・土師器など17

もち、374の胴部には3カ所の、388の胴部には1カ所の穴があけられている。

395は土師器台付鉢と類似するが、底部と体部の器壁が薄く、体部の傾きも緩やかである。磨滅のため細かな調整は不明であるが、内面にハケ調整の痕跡が認められる。

401は須恵器杯蓋、414・416は須恵器杯身である。これらの器種は各種の型式を含み、個体数もかなりの数にのぼると思われるが、多くは細片での出土である。468は須恵器提瓶であり胎土は精良で色調は灰白色を呈する。498は土師器器台または台付鉢と呼ばれている器種であり、器壁は厚く底部外面に木の葉の圧痕が残る。内面は磨滅により調整が不明であるが、外面は粗いナデと押圧で調整されている。

410は須恵器杯蓋、426・433は須恵器杯身で個体数も多い。433は須恵器高杯で平坦な底部と鋭い端部と稜線から構成される。3方向の透かしをもつ。

443は新羅系緑釉蓋である。全体の1/8が残存している。直径は口縁部で約20cm、器高は現存で4.6cmを測る。形態的には古墳時代の須恵器杯蓋に類似しており、天井部には鈕の痕跡も確認される。

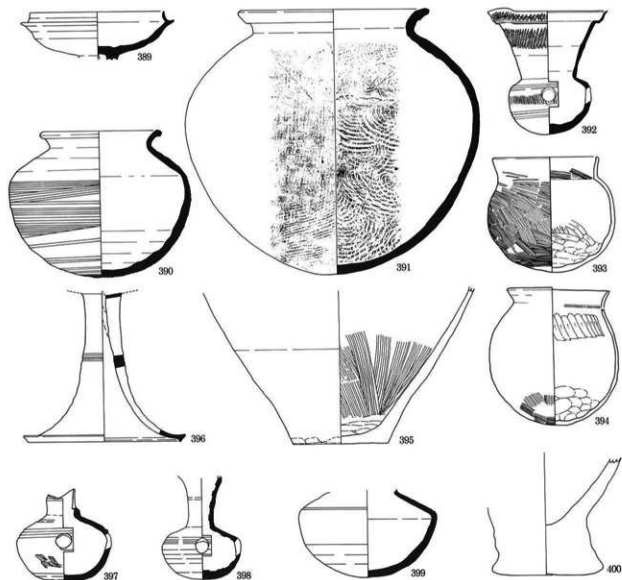


図376 須恵器・土師器など18

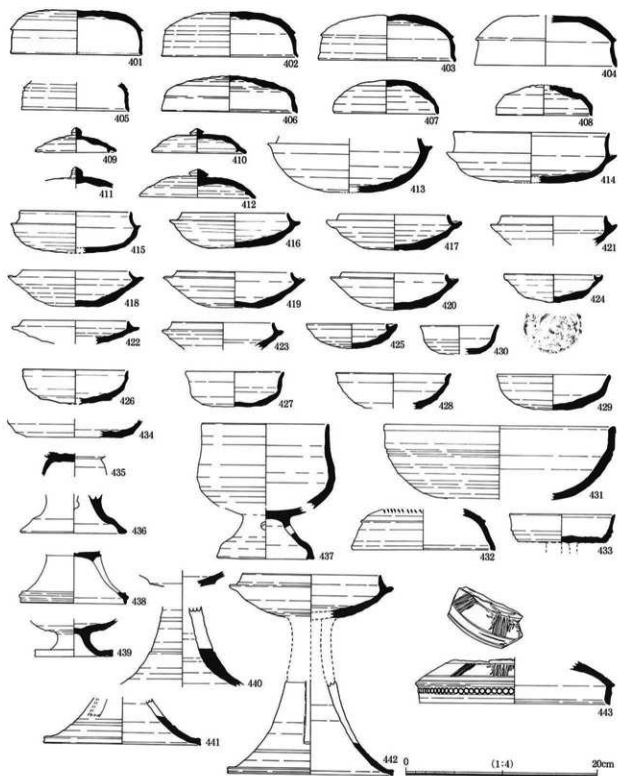


図377 須恵器・土師器など19

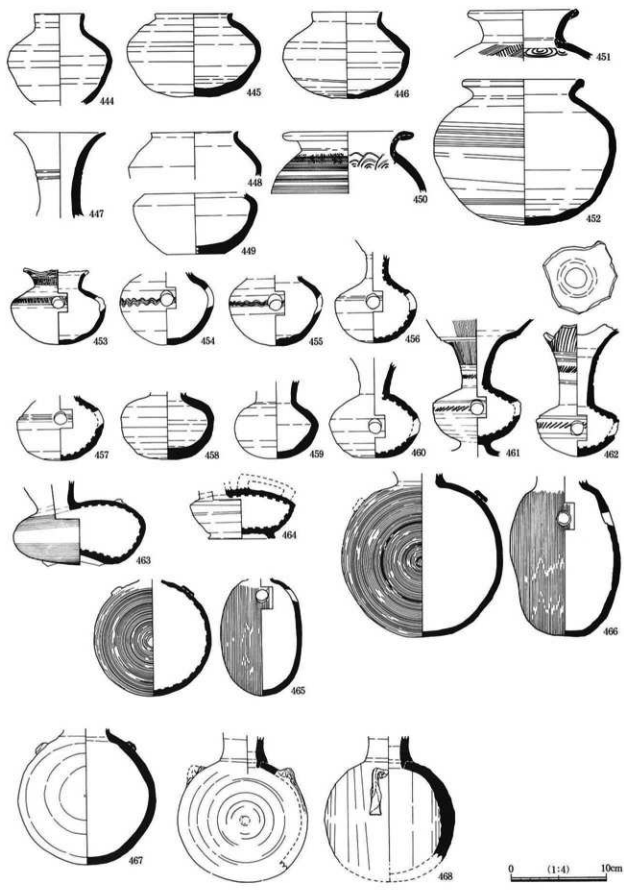


図378 須恵器・土師器など20

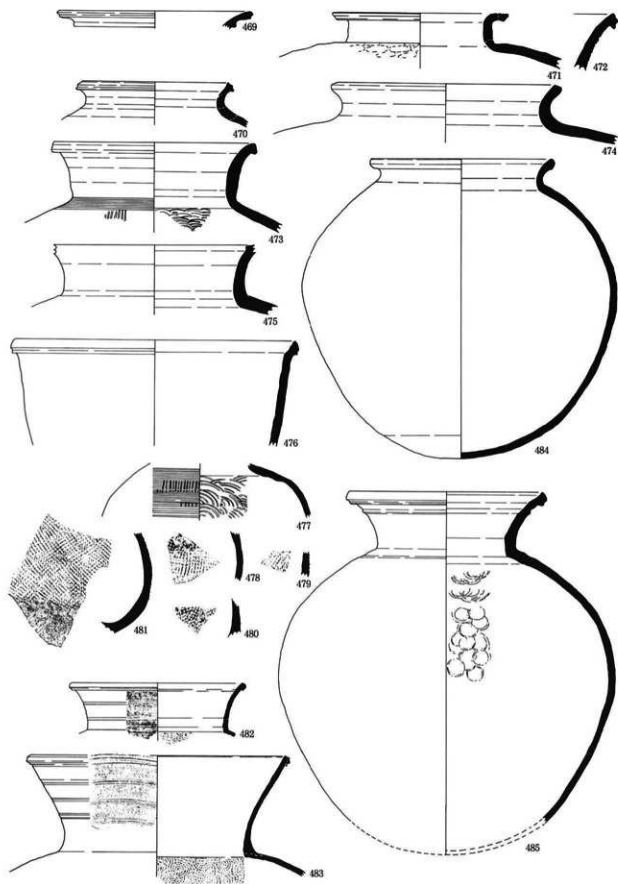


図379 須恵器・土師器など21

胎土は乳白色を呈し、砂粒をほとんど含まない精良で緻密な軟胎である。施釉は器壁全体におよび、鮮やかな緑色に発色する。また外面の一部には褐色に発色する部分もあるが、これが意図的なものかどうかは不明である。

文様は外面天井部に凹線によって区画された文様帯に櫛描き文を施文している。櫛描き文の原体は4本を1単位とするものであり、基本的には2回の施文によって文様を構成している。一方体部外面には円文をスタンプによって丁寧に施文している。またこの円文は完全な円ではなく、一部を意図的に欠いている。

453・461は須恵器甗である。この地区から多量に出土した。複数の型式をもつが、大半は6世紀後半代に比定できる。463・464は須恵器平瓶である。463は口縁部を欠く。底部は大きく歪み、須恵器片が付着する。489・490は土師器杯と鉢である。いずれも磨滅が著しい。

②1A・3A・5B調査区谷(2)

506は須恵器杯蓋である。口径14.2cmを測り、口縁部は内彎しながらやや外方へ下がり、端部は内傾する凹面を有する。稜は短く、三角形を呈する。天井部はやや丸みを持つ。

508は須恵器杯蓋である。口径は13.0cm、器高4.1cmを測る。口縁部は外反気味に下がり、端部は内傾する凹面をなす。稜は短い。天井部はやや丸みを有し、カキ目を施した後、ナデ消す。

509は須恵器蓋である。天井部は回転ヘラ削りを、肩部には回転ヘラ削りの後横ナデを施す。口縁部は横ナデを施す。口縁端部内面には明瞭な段を残す。また肩部と口縁部の境には沈線が1条走る。口径は14.5cm、器高は3.7cmを測る。

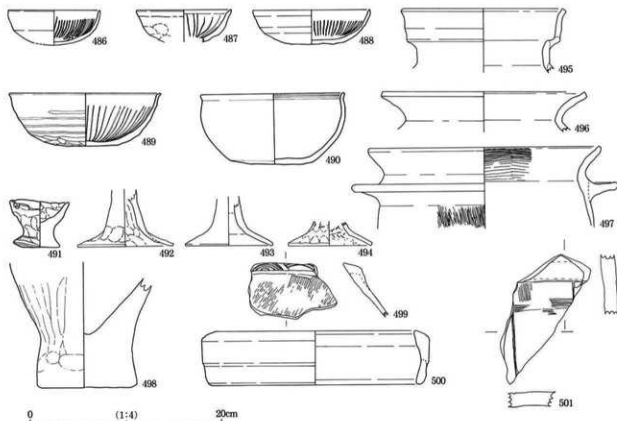


図380 須恵器・土師器など22

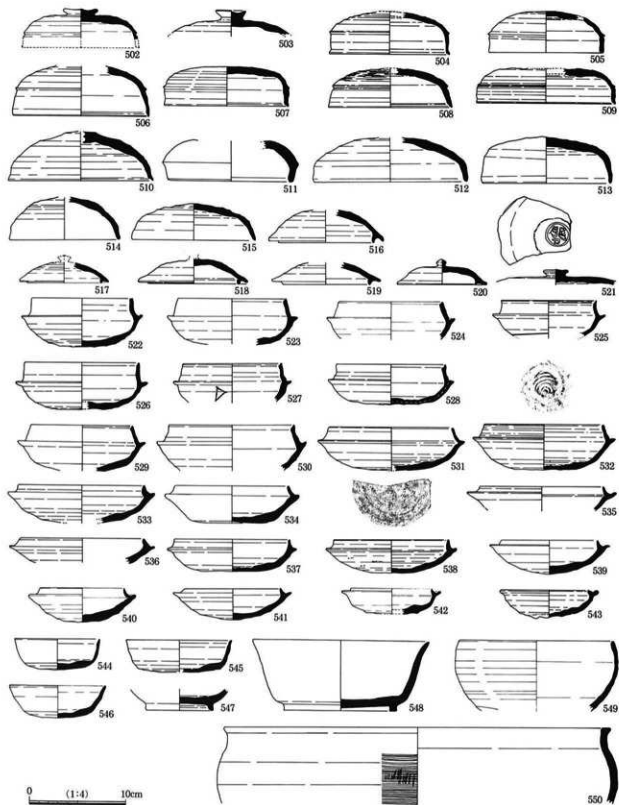


図381 須恵器・土師器など23

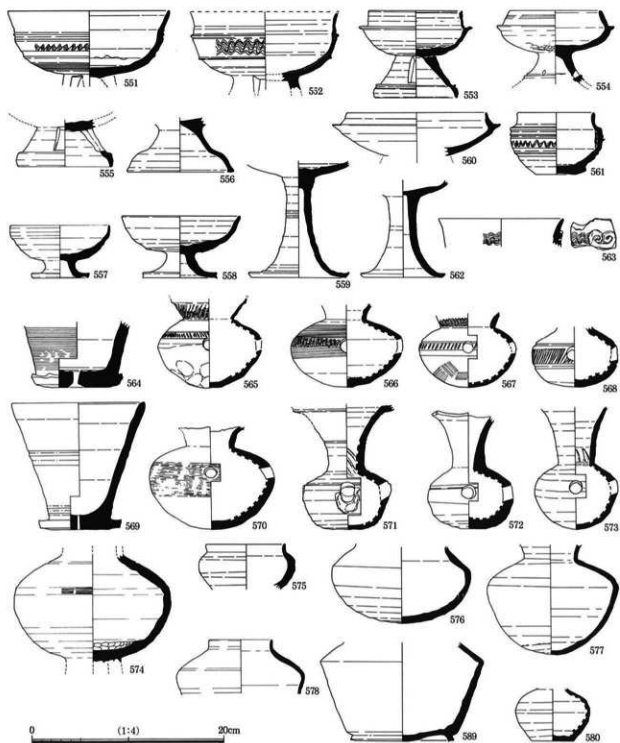


図382 須恵器・土師器など24

510は須恵器坏蓋である。口径15.2cm、器高5.2cmを測る。口縁部はやや内彎しながら下がり、口唇部は外へつまみ出すが、端部は内傾する凹面を有する。天井部は丸みをもつ。外面天井部は回転ヘラ削りを施す。

512は須恵器坏蓋である。口径16.0cmを測り、口縁部はやや外方に下がり端部を丸く収める。天井部は丸みを持ち、下方まで回転ヘラ削りがおよぶ。

515は須恵器坏蓋である。口径13.0cm、器高3.8cmを測る。口縁部はやや内彎しながら外方へ下がる。端部は丸く収める。天井部は丸みを持つ。外面に火だすき状の焼け痕と、天井部にヘラ記号を有する。

521は3A調査区中央やや東よりから出土した須恵器蓋である。天井部外面には直径2.6cm、高さ0.8cmの擬宝珠状のつまみがつき、つまみの接合痕が明瞭に残る。調整は外面が時計回りの回転ヘラケズリ、内面がヨコナデである。胎土は密で直径0.5～1cm大の長石、直径0.5～0.3cmの石英などを含む。色調は内外面共に暗青灰色でつまみ上面の墨書は「服部」と読める。

522は須恵器坏身である。口径10.6cm、器高5.1cmを測る。口縁部はやや外反しながらほぼ真直ぐ立上がる。端部はわずかに内傾する面を有する。受部は外上方にのび、端部は丸い。底部は丸みを有して深く、回転ヘラ削りを施す。

525・538は須恵器の坏身である。525は口径10cm、残存高3.7cmを測る。口縁部は長く、比較的深い受け部を有する。口縁内面には段が残る。538は口径12cm、底径4cm、器高3.5cmを測る。口縁端部は丸くおさまられている。口縁は短く立ち上がる。受部は浅い。

529は須恵器坏身である。口径10.6cm、器高4.8cmを測る。口縁部は内傾しながらのび、端部は内傾して凹面を呈する。底部はやや丸みを帯びる。受部はやや上方にのび、端部を丸く収める。

531は須恵器坏身である。口径13.0cm、器高4.5cmを測り、口縁部は外反しながらのび、端部は丸く収める。底部は丸みを持つ。受部は真直ぐ横にのび、端部を丸く収める。外面体部下半は回転ヘラ削り、その他は横ナデを施し、内面底部は仕上げナデがみられる。

532は須恵器坏身である。口径12.4cm、器高4.8cmを測る。口縁部はやや内傾しながら真直ぐのび、端部は丸く収める。底部は丸みを有するものの、全体的に深く平らである。受部はほぼ真直ぐ横にのびる。内面底部には同心円の当て具痕が認められる。内面底部の調整は横ナデを施す。

539は須恵器坏身である。口径10.0cm、器高3.6cmを測る。口縁部は短く立上がる。受部はやや上方につまみ上げた後、横にのびず。底部外面にはヘラ記号を有する。

544は須恵器坏身である。口径8.8cm、器高3.3cmを測る。口縁部はやや外傾しながら真直ぐ立上がる。端部は丸く、内面に緩やかな稜を有する。底部はほぼ平らである。内面および口縁部は横ナデを、内面底部は仕上げナデを施す。外面底部縁辺部は回転ヘラ削りを行うが、中央部は未調整である。

547は緑釉陶器碗である。須恵器質の胎土で濃い緑色釉が施されている。

552は須恵器無蓋高坏である。口縁端部は欠損している。坏部外面上半は横ナデを、下半は回転ヘラ削りの後横ナデを施す。坏部中央には13条の波状文がみられる。脚部の残りは良くないが四方向に縦長長方形の透しがみられる。口径は推定で15.6cmを測る。

553は須恵器有蓋高坏である。坏部外面は回転ヘラ削りの後横ナデを、口縁部には横ナデを施す。口縁端部には明瞭な段を残す。脚部には三方向に縦長長方形の透しがみられる。また、脚底部には1条の沈線が巡る。口径は9.8cm、器高は9.2cm、底径は8.6cmを測る。

556は須恵器台付碗の脚部である。底部底径10.8cmを測る。外下方に大きく開き、1/2上方より外

下方に下がり、裾部に至る。端部は平らに内へつまみ出す。調整は横ナデである。

559・560は須恵器高坏である。

559は脚部である。脚部底径10.6cm、長さ10.6cmを測る。筒部は長く1/2やや上方に2条の篋描き沈線を施す。裾部は大きく外下方に開き、端部を外上方へつまみ上げる。内面上部にシボリ目が看取できる。また、内面にヘラ記号を施す。560は高坏の坏部である。口径14.6cmを測る。口縁部は短く、外反しながら内傾し、端部は鋭く丸く収める。底部を欠損するが体部は内彎する。受部は断面三角形を呈す。

562は須恵器高坏である。脚部である。脚部底径は8.1cm、長さ8.7cmを測る。筒部はやや外反しながら下がり、裾部で大きく開く。端部は面をなし、外上方にややのびる。

561・563・575は土師器把手付碗である。いずれも把手は欠落する。563は口縁部直下に双渦状の浮文を張り付ける。

564は須恵器挿鉢である。体部は外上方へのび、上部は欠損する。底部は底基部より張り出し、下方に下がり、底面は平らである。外面体部は横ナデ後カキ目を施し、底部は未調整である。内面は横ナデを施す。底部に径0.7cmの穿孔を1個有する。

569は須恵器挿鉢である。体部はほぼ真直ぐ外上方へのび、口縁端部は丸く収める。底部は底基部より張り出し、下方へ下がり底面は段を有するもののほぼ平らである。なお、底部中央に0.3cmの小孔を1個穿つ。調整は未調整の底面を除いて全て横ナデを施す。

570は須恵器甕である。口縁部を欠損する。体部上方に最大径を有し、13.1cmを測る。底部はややとがり気味である。体部中央にカキ目を施し、径1.4cmの穿孔を1個有する。底部は仕上げナデを施す。内面底部には指頭圧痕がわずかに残る。頸部は短く、外反しながら外上方へのびさらに横に広がる。

571は須恵器の甕である。口縁部を欠損している。残存高は12.8cmであり、頸部と肩部に沈線が1つ巡っている。

572は須恵器甕である。口縁部は欠損する。体部最大径は9.1cmを測る。体部は扁平な球形を呈し、頸部は外反しながらラッパ状に開く。体部下半は回転ヘラ削りを行う。体部やや上方に径1.5cmの穿孔を、肩部には沈線が1条巡る。

577は須恵器壺である。頸部から口縁部にかけてを欠損している。体部外面は丁寧なナデを施す。肩部には一カ所に「I」字状のヘラ記号がみられる。また、底部外面には植物繊維が付着している。これは壺の安定を保つために縄状のものを巻き付けていたものと考えられる。最大胴径は14.0cmを測る。

582・583は須恵器壺である。

582は残存するのは口縁部から頸部にかけてのみである。口径は12.8cmを測る。口縁部は外上方へのび、端部は回転ヘラ削りによる面を有するが、凹線を施す。頸部は影らみを持つ。調整は口縁端部を除いて横ナデである。583は口縁部である。口径は15.0cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は面を持つ。肩部は大きく横に広がり、やや下がり気味である。調整は横ナデである。色調は暗赤褐色を呈すが、頸部外面に楕円形に色調の異なる部分がある。これは焼成の際に何かが付着したものと考えられる。この壺は韓式系土器の可能性もある。

585は須恵器の甕である。口縁端部は四角くおさめ、やや肥厚させる。体部内面には同心円のタタキ、外面には縦方向のタタキがみられる。

587は須恵器壺体部である。外面は縄席文を施し、内面は横ナデである。外面の縄席文にともなう螺旋状沈線の間隔は1.9cmである。前出の583と同一個体の可能性もある。

558・589・590・593・594は韓式系土器である。

589・593・558は外面に縄席文を施し、558の下半はそれを丁寧にナデ消す。589には3条以上の細い沈線を巡らせる。590は平行タタキを施す。589・590・593・558の色調はレンガ色を呈し、焼成は非常に堅緻である。594は軟質土器で外面に鳥足文タタキを施す。色調は乳白色を呈する。

595は須恵器壺の胴部と考えられる。内面には丁寧なナデ調整が施され、外面に平行条線と装飾文の叩きを残している。胎土は粘性の強い極めて精良なもので焼成も良好である。色調は灰色を呈する。12世紀代を中心に展開する瀬戸内東部系製品の一部であろうか。

597は須恵器器台である。脚部下半は欠損する。口径は36.4cm、台部高15.1cmを測る。台部は深く、内彎しながら外上方にのび、口縁部はさらに外へ開き、端部は面をなす。台部には2条1組とする6条の凸線を持つ。凸線間には波状文を施す。脚部には少なくとも2段に縦長長方形の透しが施されている。上下段とも6か所に透しを穿つ。脚部上方にも波状文を施す。脚部には3条の凸線が残存する。

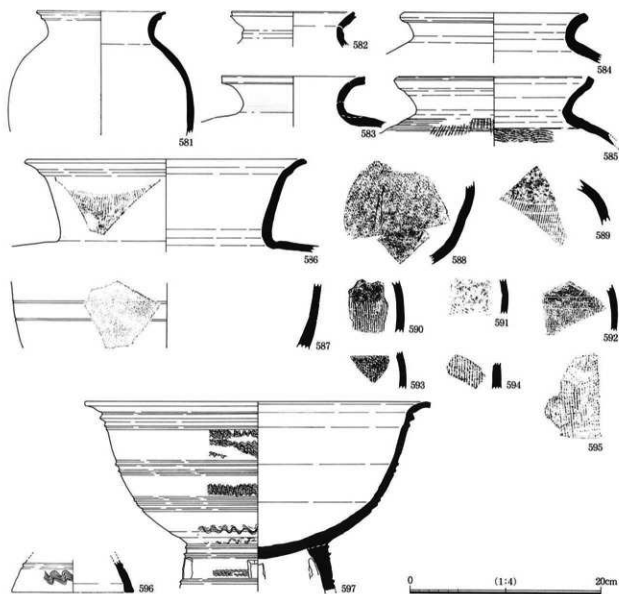


図383 須恵器・土器など25

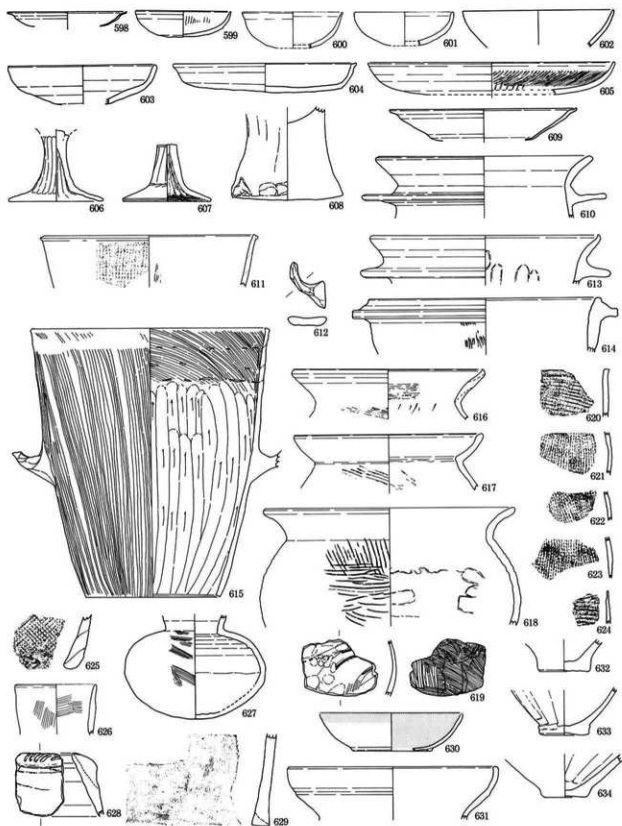


図384 須恵器・土師器など26

605は土師器の皿である。口径は26cm、器高は3.4cmを測る。口縁部は丸くおさめられている。内面には暗文がみられる。

611は土師器の甗である。体部から口縁部にかけて外方に開き、口縁部には粘土紐を貼り付けた突帯状のものが1条巡る。体部外面には格子目タタキを施す。胎土には直径1mm前後の長石・石英・金雲母を含み、色調は茶褐色を呈する。口径は22cm、残存高5.5cmを測る。

613は土師器罇甕である。口径は24.0cmを、罇径は26.2cmを測る。頸部はやや外反しながら立上がり、

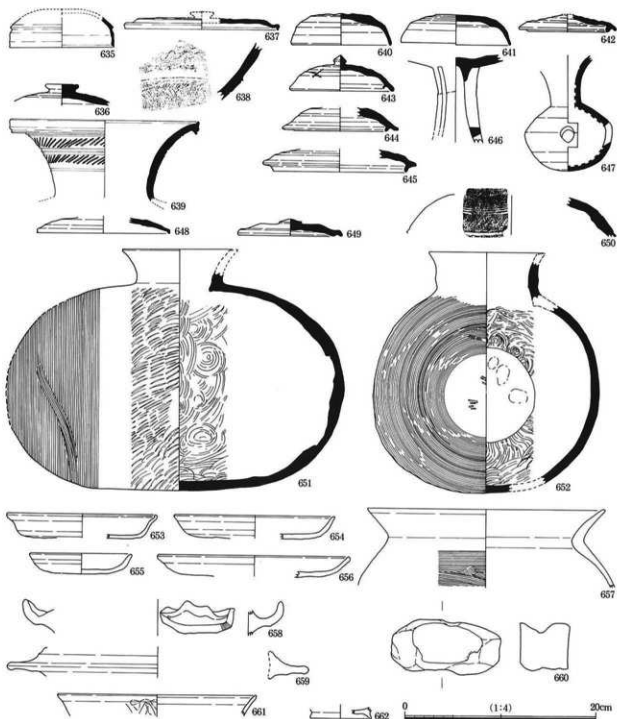


図385 須恵器・土師器など27

端部は上方につまみ上げる。外面は鈔までは比較的丁寧な横ナデを施すが、鈔より下は粗いナデがみられる。内面は非常に丁寧な横ナデを施すが鈔が接する部分は指頭圧痕が残る。

615は土師器甕で、口径24.6cm、底部径13.9cm、器高28.4cmを測る。体部はやや内彎しながら外上方へのび、口縁端部は外傾する面を持ち、内上方へつまみ出す。体部中央には把手がつく。調整は外面が粗いハケ目を施し、内面は下から3/4までは回転ヘラ削りを、残り1/4はハケ目がみられる。また粘土紐の接合痕も看取される。

616は土師器甕の口頸部である。口径20.0cmを測る。口縁部は頸部から「く」の字状に折れ、端部は上方へつまみ上げる。頸部外面は斜め方向のハケ目の後、横方向のナデを、口縁部は粗いナデを、端部は丁寧なナデを施す。内面は頸部下半は縦方向の回転ヘラ削りを頸部上半は横方向のハケ目の後、横方

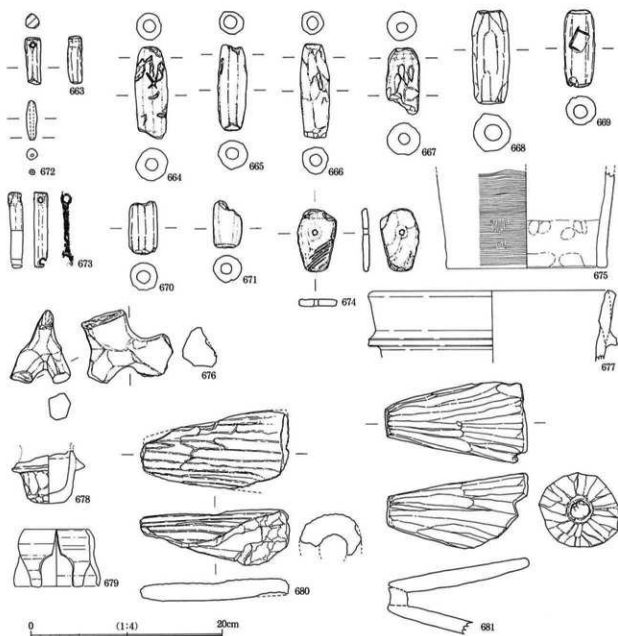


図386 土製品

向のナデを施す。

617は土師器の甕である。口縁は大きく開き、端部を肥厚させる。体部外面には粗いハケメがある。

619は3A調査区南西部から出土した土師器甕の胴部破片である。外面には粗いタテハケの後、右下がりの細かなヨコハケが施されている。左半部の粗いタテハケは1cmあたり6条程度の単位で2回以上の調整が加えられている。一方右下がりの細かなヨコハケは、破片の左下を除く全面で見られ、単位は1cmあたり12条ほどである。なおこのうち下部のヨコハケは長さ2cmほどで連続して施され、左から右への順序で右下がりの角度を増す。

中央～上部のヨコハケはおおむね均一な右下がりを示すが、その施条長さは中央部が5cm以上であるのに対して、上部は3cm程度で、複数交錯した状況を示す。

内面は右下から左上へのヘラケズリを施したあと、上半部には横方向および右上がりのハケ調整を施し、中央部および右下の一部には右上がりの細かなハケ調整をおこなう。

なお中位左寄りの3カ所に指押さの痕が残る。胎土は密で色調はにぶい黄色～浅黄色である。

外面上半部にやわらかな筆運びで描かれた墨書がみられる。上半部の墨書は横に扁平な弧を組み合わせた紡錘形を、その内部に3本の水滴状の線を描く。左の2本は左上から右下へ、右端のものは右上から左下へ向かって描く。下半部には右に膨らんだ縦線が描かれている。

また右端上部にも墨痕がみえる。人面の一部を表現したものと考えられる。

620・625は土師器甕である。両者とも外面に格子目タタキを施す。

621～624は製塩土器である。

623は外面に平行タタキを、621・622・624は縄文を施し、内面はナデ調整である。いずれも器壁は薄いが二次焼成による剝落はない。

627は土師器直口壺である。口縁部は欠損する。体部最大径は14.8cm、残存高10.9cmである。体部は扁平な球形で、頸部は真一直ぐ外上方にのびる。内面体部中央に粘土の接合痕が残る。外面上半はハケ目を施した後、頸部から横方向にナデを行う。下半は丁寧なナデを施す。内面上半を方向の粗いナデを、下半は丁寧な横方向のナデを、底部に強いナデをそれぞれ施す。また、体部中央に煤がみられるほか、部分的に表面の剝離もみられることから、二次的に火を受けたものと考えられる。

628は土師器甕口縁部である。口縁部外面には同心円タタキを施す。胎土には長石・金雲母・角閃石を多く含む。生駒西麓産であろう。

◎弥生土器

三ノ丸地点からは、10層以下とされる層より数点の弥生土器が出土している。時期的には弥生時代後期前葉のもの中心となり、これらのほかに中期後半でも新しい段階のもの、図示できなかったが、胎土などの諸特徴から中期初頭にまで遡りうる可能性を持つ体部破片が出土している。

309は弥生時代後期の壺あるいは器台の口縁部破片であるとみられるが、小片のため特定はできない、表面剝離のため調整は不明であるが、6条一対を原体とするやや稚拙な櫛描波状紋がめぐらされている。胎土中には角閃石を含み生駒西麓産の土器であると考えられる。

631は、受け口状口縁部を有する壺の破片である。調整は良好に遺存しており、内外面ともに丁寧なナデが施される。胎土中には石英、長石、チャート、黒雲母を含む。受け口部の屈曲が不明瞭となっていること、口縁部外面の凹線紋が退化していること、頸部の凸帯が確認できないことから、中期後半でも新しい段階に属するものと考えられる。

632は底部の破片であるが、器種の限定はできない。調整は剝離が激しく不明で、胎土中には石英、長石、チャート、雲母を含む。後期に属するものと考えられる。

633は器種の特定のできない底部破片で、内面は剝離のために調整は不明だが、外面には板状工具による擦過痕が確認できる。底部裏側は浅い輪台状となり、胎土中には石英、長石、チャート、黒雲母を含む。底部の様相から後期に属するものと考えられる。

634は底部の破片であり、調整は内面が板状工具による擦過、外面がミガキとおぼしき調整が底部裏側にまで確認できるが、明瞭でない。胎土中には石英、長石、チャート、雲母赤色酸化粒を含む。時期的には後期に属するものと考えられ、器種は底部から上外方に大きく開く体部へと続くことから壺の可能性が高いものと考えられる。

㊦ 2 C 北端部谷

北端部に位置する北西方向への谷頭からの出土遺物である。器種は土師器皿・甕・甕・甕・把手、須恵器横瓶・鉢・甕・長頸壺・平瓶などである。

651は須恵器横瓶である。短く外反する口縁部に依状の体部をもつ。口縁部端部は上外方にわずかにのび、面をもつ。外面調整は体部に平行叩きを施した後カキ目、体側部には平行叩きが残る。内面には同心円あて具痕、貼り付けられた体側部には指押さえが残る。

657は土師器甕である。肩部外面に横位のハケ調整がおこなわれている。

b. 土製品

663・664・669は土鍾である。669には「□」状の、664には「×」状のヘラ記号がみられる。

672は管状土鍾である。全長4.1cm、径0.5～1.2cmを測る紡錘形である。孔は径0.3cmを測る。胎土は1cm程度の長石粒や黒色粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。

673は土製の鍾である。両端に穿孔がある。全長は7.9cm、幅1.4cm、厚さ1.3cm、孔径0.6cmを測る。瀬戸内式の鍾である。

674は土師器坏もしくは皿を転用した有孔土製品である。片面に放射状暗文が数条みられる。両側穿孔である。

676は土師質の土馬である。頭部・後脚を欠損する。馬具などの表現はみられない。

678は手捏土器である。羽釜を模したものであろう。口縁部・鈎部の大半を欠損している。鈎径は7.8cm、残存高5.6cmを測る。

679はミニチュアの甕形土器である。口径6.6cm、器高6.1cm、裾部径8.8cm、焚き口高3.3cm（残存高）を測る。中央部がくびれる曲線口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部は面を持つ。体部はくびれながら外下方へ下がり、裾部は内彎して端部を丸く収める。調整は全体に横方向の丁寧なナデで仕上げるが、体部外面は横方向の粗いナデのままである。

c. 金属製品

金属325は紡輪・心棒ともに鉄製の紡錘車である。心棒は大半を欠損する。紡輪を挟んで心棒の上方は断面方形を、下方は不整形円形を呈する。

金属329は5 B 墓1出土の蔓草鳳凰鏡である。直径17.3cm、重さ226gを測る。中国鏡を踏み返した国産鏡である。鏡背には、紐を中心として左右には向かい合った2羽の鳳凰が、上には麒麟、下には葡萄をついばむオウムがみえる。同じ形の鏡は、日光男体山山頂遺跡と広島県福山市津ノ郷町からみつまっている。なお鏡の表面観察によると、両面共にわずかに布（種類不明）の痕跡があり、上面には板材が乗り、下面の一部からも板材が確認された。

金属330は6 A 墓2出土の海獣葡萄鏡である。直径13.3cm、重さ500gを測る。龍形紐であり、鏡背の文様は、二重に区画された内側に4体の獣と2羽の孔雀が、外側には8羽の鳥と8匹の昆虫があらわされている。遺存状態は不良で、内外面共に錆が厚く付着する。また一部には鏡面側からの圧力により生じた複数の凹みがあり、全体形に歪みを生じさせている。なお、出土状況からみれば、鏡の下に板材が残っており、それには鏡縁部の痕跡が円形のくぼみとして残されていた。同じ形の鏡は、伝世品としては中国で1面、日本で3面知られている。

金属335・340・348は釘である。錆膨れが著しいが折れ面から断面方形の身が観察できる。

金属341は一端は欠損するが他方は緩やかに彎曲している。錆膨れが著しく、欠損により器種同定は困難であるが鏡の類と思われる。鍛造品である。

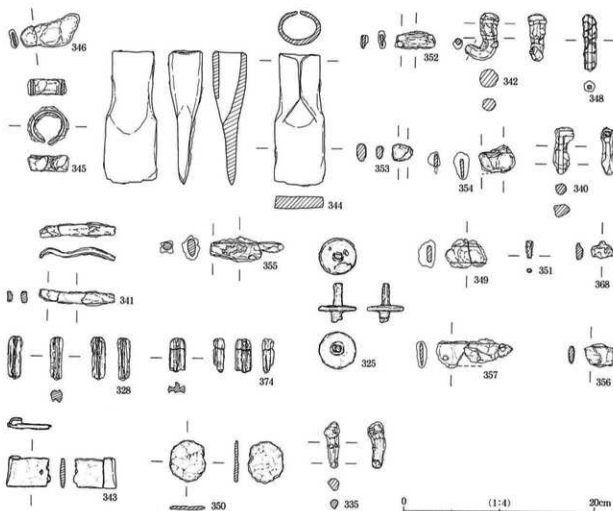


図387 金属製品1

金属342は平面「し」の字を呈する鉄製品である。錆彫れが著しく、詳細は不明であるが割れ面から観察できる部分には断面方形を呈する角棒状のものが存在する。釘が曲がったものであろうか。

金属343は摘み鎌である。一端を欠損するが他方は折り返して袋部を形成する。袋部は刃部側で密着している。鍛造品である。

金属344は袋状鉄斧である。袋部から刃部にかけては一直線ではなく、袋部直下でやや肩が張る。袋部の断面は楕円形を呈し、袋部折り返しの両端は刃部側で密着する。重量感があり、遺存状況も良好である。

金属345は環状鉄製品である。錆彫れが著しい。両端を丸く取めた薄く幅の狭い板を曲げたものである。両端は密着しない。

金属346は製品製作時の裁断片と考えられている三角形鉄片の可能性はある。

金属350は円盤状鉄製品である。表裏ともに凹凸がみられるので鍛打して成形されたと思われる。何らかの未製品もしくは素材かと考えられる。

金属349・353・368は板状鉄製品、351は棒状鉄製品である。錆彫れ、欠損が著しく器種は不明。328・374は9世紀前半の木棺墓から出土した鉄製品。劣化が著しく器種は不明。鍛造品であろう。

金属352・354～357は刀子と思われる。いずれも錆彫れが著しく、詳細は不明。

金属328・374は5 B 墓1出土の鉄製品。いずれも劣化が著しく、器種は不明。層状剝離が認められることから鍛造品と思われる。

そのほか錆彫れが著しく器種同定は困難であるが刀子・釘などの工具である可能性が高い。

d、羽口

出土した全ての羽口が鍛冶用のものである。形態は先端から基部に向けてやや広がるものが多い。外面には強いナデ調整を施すものが多く、面取り状になっているものが大半を占める。胎土には長石や石英、赤色砂粒を含み比較的精良なものが使用される。羽口の外径はさほど規格性は認められないが、通

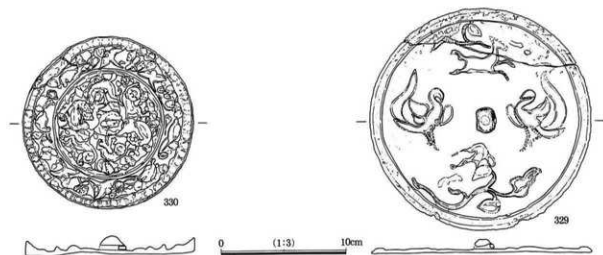


図388 金属製品2

風孔径は2 cm前後ではほぼ統一されている。大半が使用後廃棄され、破片となったものであるが、14・85
 に関しては未使用である。

4・13・24・29・48・74・81・84は炉壁に据えられた部分から炉内に突出した先端部にかけての部位
 である。先端にはガラス質になった鉄滓が付着する。13などはこうした滓の影響で先端部分が欠落した
 ものと考えられる。また、こうした部位には還元されて青灰色・灰白色を呈する部分が環状にみられる
 ものが多い。なお、81は基部の形が良く残っている資料で断面形は漏斗状を呈している。

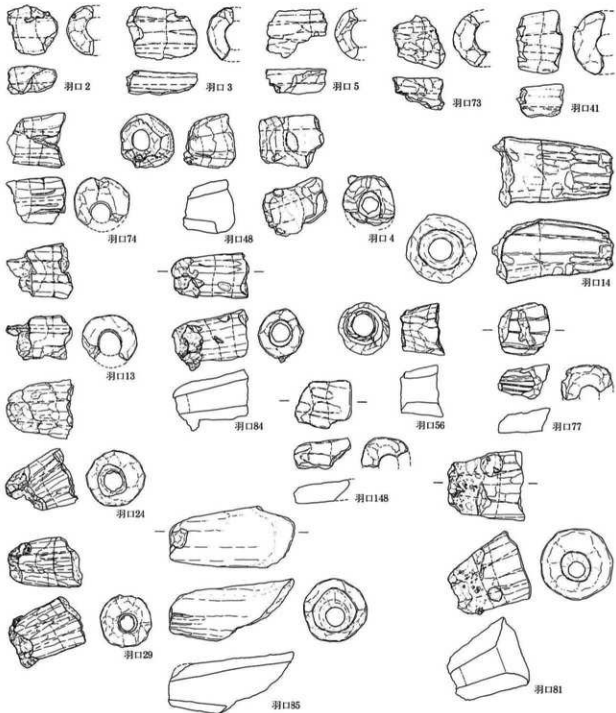


図389 羽口

29・81・84などの資料から羽口の装着角度は15～25度と思われる。以下詳細を説明する。

羽口13は残存長7.0cm、最大幅5.8cm、孔径1.9～2.3cmを測る。製作方法は74と同様である。先端部が剝離している。74・13ともに使用されており先端付近は還元色（青灰色）を呈している。

羽口14の残存長は11.2cmで、基部の外径6.8cm・内径4.8cmを計る。胎土は粗く、石英砂を多く含む。使用痕はまったく認められない。

羽口24は最大径6.3cm、孔径1.9～3.3cm、残存長7.2cmを測る。先端から基部に向けて「ハ」の字状にひらく形態である。先端にはガラス質状の鉄滓が付着している。この結果先端下半が欠損したものと考えられる。中央から先端にかけては還元を受け青灰色を呈する。胎土は長石やスサ状のものを多く含む黄色粘土を使用している。外面は強いナデ調整を施すが面取りはなされていない。

羽口29は最大径5.3cm、孔径1.6～2.4cm、残存長7.7cmを測る。先端にはガラス質状の鉄滓が付着している。中央から先端にかけては還元を受け青灰色を呈する。胎土は長石や黒色砂粒を多く含み、色調は淡い茶褐色を呈する。外面は強く粗いナデ調整を施し、部分的に面取り状になっている。

羽口74は残存長6.1cmで、最大幅5.7cm、孔径2.2～2.4cmである。製作手順として先に厚さ0.3～0.5cmの筒を作り、その後粘土を巻いて羽口としている。胎土は精良である。先端に鉄滓が付着している。石製品12は砂岩質の砥石であろう。使用のため1面が平滑になっている。

羽口85は未使用であり、滓の付着などはみられない。胎土は細密で細かな砂粒を含む。色調は灰褐色である。

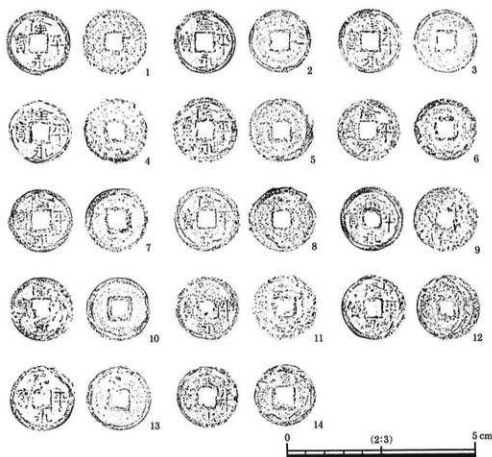


図390 銭



图391 石器・石製品 1

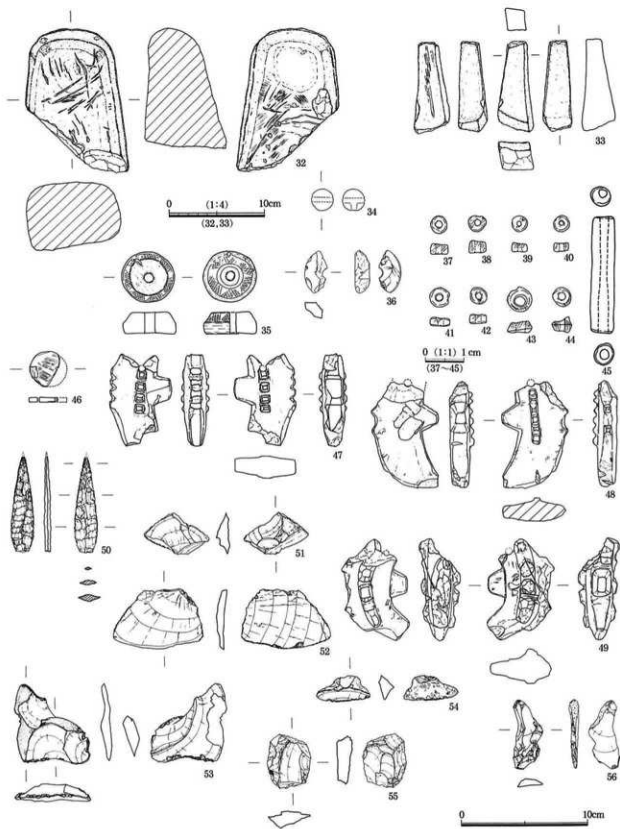


图392 石器·石製品 2

e、銭貨

図244は5 B墓1出土の銭貨である。29枚出土し、判読できた22枚は全て「隆平永寶」である。検出時にはひと固まりになっていたが、観察の結果29枚の銭貨は埋納時には十数枚づつ重ねて2本の柱にして納められていたと推定される。なお、銭貨の孔の中には繊維質などの有機物は確認されていない。

またこれら以外に銭貨を入れていた木製容器が検出されているが、遺存状態が非常に悪く、底部と底部から1 cmほどの立ち上がりの痕跡を確認したにとどまる。

f、石器および石製品

石製品12は4 A調査区の井戸2から出土した安山岩の自然礫である。全長8.5cm、幅5.3cm、厚さ3.1cm、重量は150gである。風化が著しく表面が荒れている。図に表われている剝離の内面も著しく風化が進んでおり、人工的な剝離痕とは考えにくい。

石製品18は2孔タイプの大型石庖丁の未製品と思われる。残存長12.2cm、最大幅5.5cm以上、最大厚0.9cm、紐孔間9.5cmを測る。紐孔の直径は0.6cmである。2つの紐孔は敲打により、両側から穿孔を施している。一方のものは穿孔の途中でやめている。これは敲打の際、紐孔のすぐ脇が折れたためと考えられる。この敲打痕は擦痕を切るかたちでみられるため、体部を一定程度磨いた状態で紐孔を穿っているようである。明確な刃部は認められない。なお、背部には緩やかに突出した部分（紐か）がみられ、なで肩風の製作になっている。この突出部分には敲打痕がみられ、刃部側の一边には磨きかと思われる調整痕が残っている。石材は鑑定していないが粘板岩系のものであると思われる。形態は下條信行氏の分類によるC式に近いものであろう。

石製品23は砥石である。砂質岩の石材と思われる。使用のため、1面が平滑になっている。

石製品22・24・25・27・28・31は砥石である。石材は観察表に依る。詳細な観察はできていないが荒砥から仕上げまで揃っているようである。なお24は側面に敲打痕がみられる。

石製品34は数珠の母珠である。水晶製で直径2.6cmを測る。

石製品35は滑石製の紡錘車である。斜面と底面に鋸歯紋が施されており、中心の孔は両面穿孔である。

石製品36～43・45は玉類である。36は滑石製有孔円盤、45は碧玉製管玉、37～43は滑石製の白玉（37～43）である。このうち白玉は5 B調査区の金属加工関連遺構の集中部から、土師器小壺に入った状態でまとまって出土している。また形態的に体部に稜を持つものと持たないものの2種をみることができる。

石製品46は滑石製有孔円盤である。約1/3が欠損する。直径は推定で3cm、厚さは3mmを測る。石材は淡灰緑色を呈し、その表面には擦痕が残る。

石製品47は子持ち勾玉である。残存長7.3cm、幅（最大）2.1cm、厚さ1.7cmを測る。両端部を欠損しており、全体の形状は不明である。石材は滑石であり、多少風化が進んでいる。断面形は扁平な長方形である。本体は丁寧に研磨されており工具痕は残っていない。

子は方形の突起状のものばかりである。腹面の子は突起状になっており、長さ2cm、幅1.5cm、厚さ1.3cmである。本体との接点には段を持たない。背面には本体に刻みを入れ方形の突起状の子を4個作りだしている。A・B側面には4個の方形の突起状の子がある。それぞれ独立して作りだされている。

頭部貫通孔は径0.5cmを測り、両側から穿孔されている。

石製品48は子持ち勾玉である。残存長8.3cm・幅5.3cm・厚さ1.8cmを測る。頭部貫通孔より上部が欠損するが本体は縦長のC字形をなす。下端部は先すばまりに作られている。石材は滑石で、多少風化が進んでいる。本体には細かな擦痕が多くみられる。

子はA側面のが幅1cm程度のノミ状工具で全て削り取られている。B側面のは長さ4.5cm・幅0.7cmを測る細長い台を削り残し、その台を6分割して子を作り出している。腹面の子は突起状になっており、長さ2.1cm・幅1.5cm・厚さ1.4cmを測る。背面には背の低い山状の子が2つ削りだされている。

頭部貫通孔はB側面からの片側穿孔であり、径0.6cmを測る。

石製品49は子持ち勾玉である。残存長7.9cm、残存幅（最大）4.1cm、厚さ（最大）2.2cmである。頭部を欠損するが本体はやや均整を欠くC字形をなすと思われる。下端部はやや丸を持ち四角くおさめている。石材は滑石で、多少風化が進んでいる。断面形は扁平な長方形に近い。本体には幅1～2mm程度の細い溝状の工具痕が残る。

子には欠損しているものが多いが、小勾玉状のものと方形の突起状になったものとがみられる。腹面の子は突起状になっており、長さ2.2cm・幅1.4cm・厚さ1.3cmを測る。本体との接点にはわずかな段がみられる。背面には2個の子がころうじて確認できる。これらはそれぞれ小勾玉状になる可能性があり、最低2個以上の小勾玉状をなす子があったと考えられる。A側面には3個の突起状の子が確認でき、B側面には1個の小勾玉状をなす子と2個の突起状の子がある。B側面のありかたからみればA側面の上部の子は小勾玉状をなす子の一部かもしれない。

頭部貫通孔の残りは良くないが径は0.5cmと思われる。片面からの穿孔である。

石製品50・53・52・51・54・55は安山岩製の石器である。いずれも、弥生時代の所産であろう。

石製品56は安山岩の剥片である。全長は5.4cm、幅2.0cm、厚さ0.5～0.8cmを測る。一部に自然面を残す。縁辺部には細かな剝離がみられるが自然のものであろう。

g、瓦

2・17・23・32・34・35・36・46・47は重圏文軒丸瓦である。ただし23は瓦当面を欠損してため、その可能性の指摘にとどまる。2は第3圏と第2圏の一部のみ残る。外縁は内傾で、丸瓦部との接合位置は高く、接合粘土の量は少ない。17は外縁の半周以上を失っているが、瓦当面はほとんど残存する。丸瓦部との接合はさし込みにより、反転した布目がみられる。また丸瓦内側の補充粘土は非常に多く、台形状をなす。23の接合はさし込みにより、内面には補充粘土とその後に行われたヘラナデが見られる。

32の瓦当部は、側面に沿って一段盛り上がる。丸瓦部との接合はさし込みにより、内面には補充粘土が台形状に盛り上がる。34は瓦当部にケズリが施され、瓦当側面にはその基底面より下に范のあたりがある。凸面には瓦当部から縦方向のケズリが施され、丸瓦部との接合はさし込みにより、内面には補充粘土が台形状に盛り上がる。

35は瓦当面の半分を剝離により欠損する。瓦当部の調整はナデと指押さえにより、丸瓦部との接合はさし込みにより裏面に2段の溝をもつ。46の丸瓦部との接合はさし込みにより、やはり裏面に溝をもつ。

46は瓦当部に瓦当基底面と同じ高さで范端があり、丸瓦部との接合はさし込みにより、内面には補充粘土が台形状に盛り上がる。また第1圏線内が非常に磨耗しており、硯に使われた可能性も考えられる。

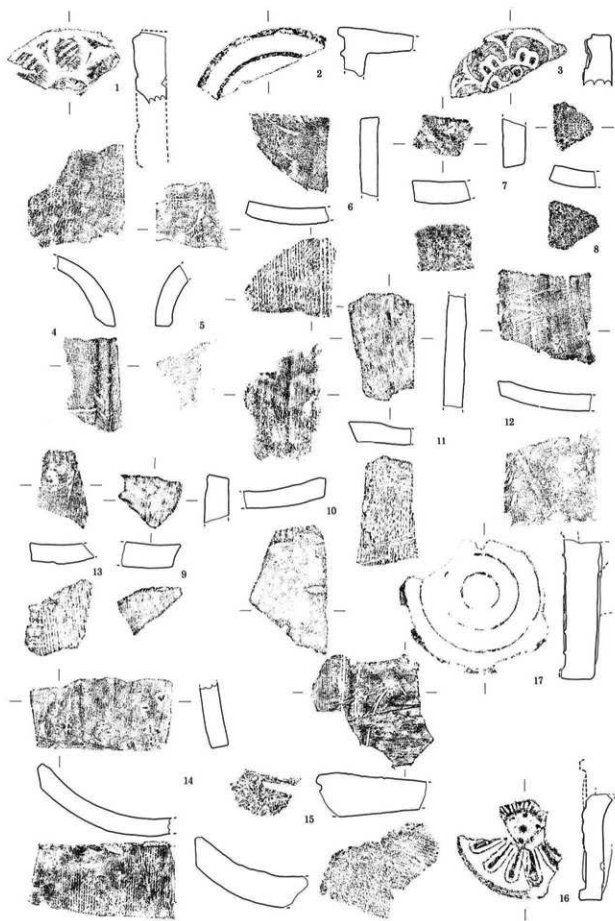


图393 瓦 1

15・37・49は重圏・重郭文軒平瓦である。いずれも破片であるため瓦当部の上弦幅・弧深および全長などは不明である。調整を見れば、15は凹面に瓦当側横方向の板ナデと縦方向の丁寧なケズリが施され、38は同じ部位に布目がわずかに残る程度にナデ消しがおこなわれ、また模骨の痕跡もみえる。なお49の凹面については丁寧なナデがみられるのみである。また49は後期難波宮の6574型式に類似する。

1・3・16・33・42～45は蓮華文軒丸瓦である。このうち16と42は播磨国府系瓦である。1は瓦当裏面にナデが、丸瓦部との接合部に近く布目が残る。範傷が著しい。33は中房のみである。

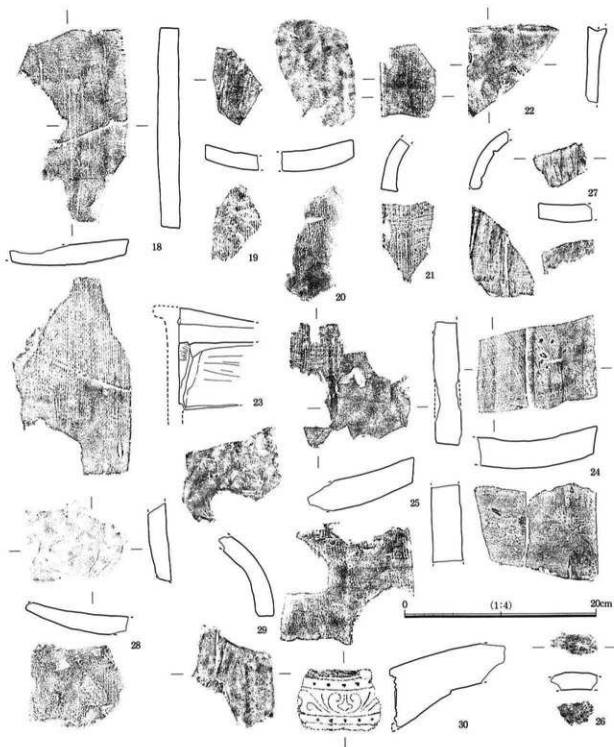


図394 瓦2

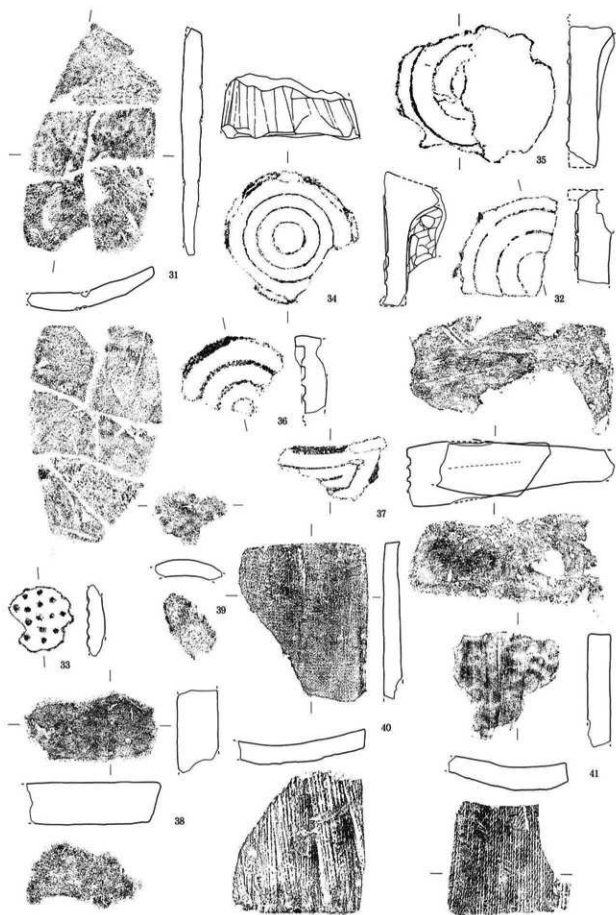


図395 瓦 3

43~45は珠文帯をもつ。いずれも直立縁であり、瓦当厚は2.2~2.4cmを測る。瓦当表面は剝離が著しいが一部でナデがみられ、一方瓦当側面ではケズリがみられる。胎土は密で43と44は2次焼成を受けている。44は平安時代に比定できる。

30・48は唐草文軒平瓦である。30は段頸、48は曲線頸で、頸の外面には縦方向のケズリが狭端部から瓦当方向へむかって施され、その後ろに弱いナデが加えられている。一方30の同部位は横位のナデである。

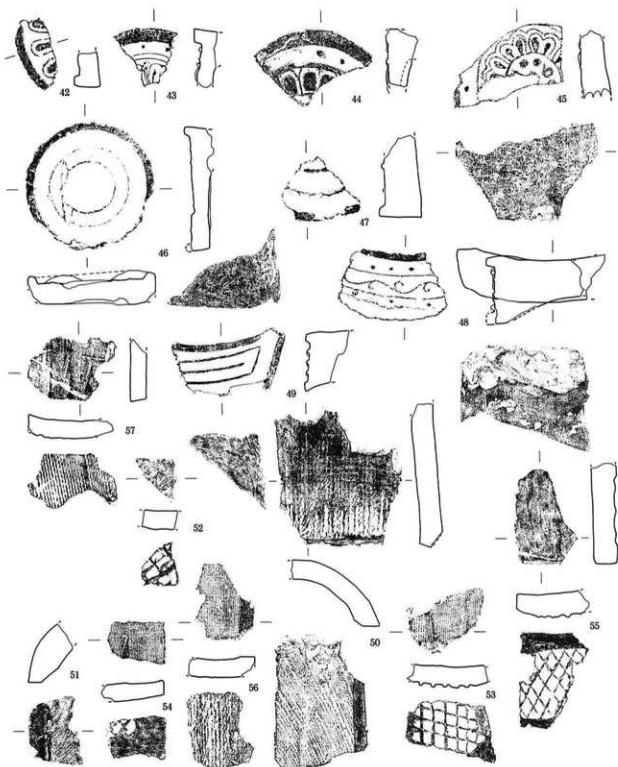


図396 瓦4

30は平城宮跡の出土資料と対比される。共に直立縁である。

4・5・21・22・26・29・39・50・51は丸瓦である。基本的に凹面には布目残り、このうち2には吊紐が、50・51には糸切りの痕跡が認められる。また凸面には細目が残り、横位または縦位のナデが加えられている。なお22は瓦当が脱落しており、周縁と丸瓦の部分のみ残存している。種別は不明であるが軒瓦である。周縁の復原径は約14cmである。内面に布目の圧痕がみられる。胎土は精緻であり、焼成

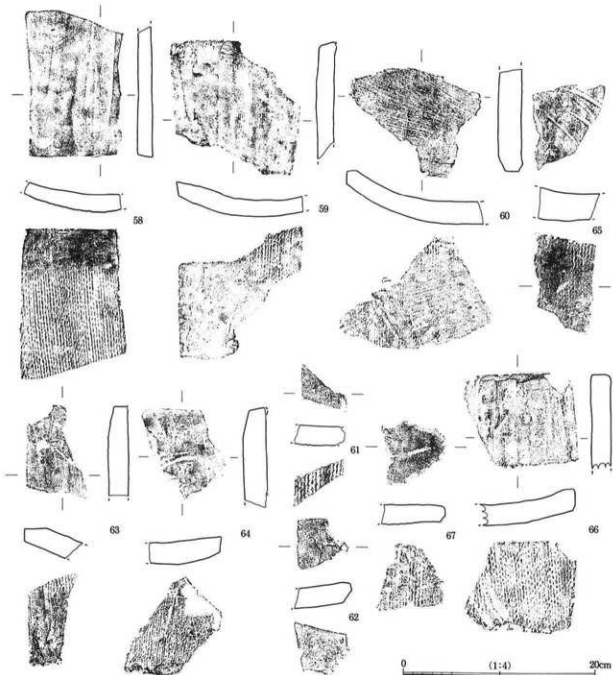


図397 瓦 5

は還元硬質である。

上記で述べてきた以外の資料は平瓦である。凹面は、基本的に布目が残りに、13・10・12・19・24・25・40・53・54・57～59・66には模骨痕も残っている。また18は布目がわずかに残るが、縦位のケズリがそれを消し、さらに広端の両面は横位のケズリが施されている。25は狭端面際に横位のケズリが施される。凸面は基本的に縄目がみられるが、52～54には格子の叩き痕跡が残されている。調整は、18が広端面際に横位のナデ調整が、21と31は側面側にケズリと思われる痕跡がみられ、58は端面際に横位の丁寧なナデが、63にも端面際に縦位のナデ消しが施されている。

側面と端面では、側面がおおむねケズリで仕上げられ、端面は6が広端面をナデ、41が広端面をケズリ、25が狭端面をケズリで調整している。胎土は比較的良好な資料が多いが、11・40・55・65は須恵器質の焼き上がりを示している。